

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第2集

# 笛吹段・兎沢古墳群

## 発掘調査報告書

昭和58年度県営畠総高草地区埋蔵文化財発掘調査

1984

財団法人 県府博物館付属

静岡埋蔵文化財調査研究所

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第2集

# 笛吹段・兎沢古墳群

## 発掘調査報告書

—昭和58年度県営畠縄高草地区埋蔵文化財発掘調査—

1984

財団法人 駿府博物館付属

静岡埋蔵文化財調査研究所

卷頭図版



笛吹段古墳群 遠景（航空写真）

## 序 文

本書は、本研究所が、昭和57年度に実施した県営畠地帯総合土地改良事業に伴う高草地区における笛吹段古墳群10基、兎沢古墳群1基についての報告書である。

調査は静岡県教育委員会の指導のもとに、焼津市教育委員会の全面的な協力と援助によるところ大であって、中でも笛吹段古墳群は昭和55年度の市教育委員会試掘調査の成果を継承するものであった。

笛吹段古墳群はほぼセンターに添って、10基の古墳群が横列する状況で発見されたが、それは大略上下2段を基本とする構成をもつ数グループの単位群と認めてよいものであった。このような古墳群の群構成の把握は、1群集墳調査における現下の課題でもあり、調査例としてはごく稀なものともいえないとしても、資料として発表された例としては、重要なものの一つに数えられるであろう。

兎沢古墳群は9基からなる古墳群であることを確認し、そのほか中位にある第4号墳を調査したのであるが、それは両袖式横穴石室をもって本古墳群中の主墳的古墳といえるものであった。

また、第4号墳以外の各墳についても現状のまま略測等の調査は試みたのであるが、その中で第9号墳の奥壁から線刻壁画を発見したことときわめて重大であった。それは猪と鳥を基調とするものであったが、特に猪は全国初例としての意味をもった。この発見に伴う服部市長をはじめとする市当局の文化財保護に対する適切な処置と対策も敬服に値するものであったことを付記したい。

終わりにのぞみ、静岡県農地森林部、志太棟原農林事務所および、焼津市高草地区土地改良組合、静岡県教育委員会文化課、焼津市教育委員会の寄せられた配慮に謝意を表するとともに、本調査に従事し、報告書執筆の労をとった所員の労を多としたい。

昭和59年3月

財団法人 駿府博物館付属  
静岡埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

1. 本書は昭和58年度県営畠地帯総合土地改良事業高草地区埋蔵文化財発掘調査業務に伴う調査報告である。
2. 調査は静岡県から委託をうけて静岡県教育委員会文化課の指導のもとに調査調整機関焼津市教育委員会・調査実施期間（財）駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 昭和57年度調査は、昭和57年8月4日から昭和58年3月25日まで実施し、昭和58年度では昭和58年9月12日より昭和59年3月25日まで、前年度調査の整理、報告を行った。
4. 昭和57年度調査は、静岡埋蔵文化財調査研究所植松章八（調査部長）・佐野五十三（主任調査研究員）を担当者とし、足立順司、及川司（調査研究員）を調査員として実施した。昭和58年度は、及川司を除く上記の者で実施した。
5. 本書の執筆分担は次の通りである。

I章・Ⅲ章・Ⅳ章	.....	佐野五十三
II章・Ⅲ章・V章	.....	足立 順司
6. 本書の編集・刊行については、静岡埋蔵文化財調査研究所があたった。

## 目 次

序文		
例言		
目次		
挿図目次		
挿表目次		
図版目次		
<b>第Ⅰ章 調査の経過</b>	1	
<b>第1節 調査に至る経過</b>	1	
<b>第2節 調査の経過</b>	2	
<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>	3	
<b>第Ⅲ章 箫吹段古墳群の調査</b>	6	
<b>箫吹段第13号墳</b>	6	
<b>箫吹段第17号墳</b>	9	
<b>箫吹段第18号墳</b>	17	
<b>箫吹段第19号墳</b>	23	
<b>箫吹段第20号墳</b>	27	
<b>箫吹段第21号墳</b>	35	
<b>箫吹段第22号墳</b>	39	
<b>箫吹段第23号墳</b>	43	
<b>箫吹段第24号墳</b>	49	
<b>箫吹段第25号墳</b>	50	
<b>第Ⅳ章 兎沢古墳群の調査</b>	53	
各古墳の概要	53	
<b>兎沢第4号墳</b>	57	
<b>第Ⅴ章 ま と め</b>	62	
<b>付 載 兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について</b>	所長 斎藤 忠	66

## 挿 図 目 次

第 1 図 位 置 図 .....	4
第 2 図 笛吹段第13号填石室実測図 .....	6
第 3 図 笛吹段古墳群分布図 .....	7
第 4 図 笛吹段第17号墳墳丘図 .....	10
第 5 図 笛吹段第17号填石室実測図 .....	11
第 6 図 笛吹段第17号墳遺物配置図 .....	13
第 7 図 笛吹段第17号墳遺物実測図 I .....	14
第 8 図 笛吹段第17号墳遺物実測図 II .....	16
第 9 図 笛吹段第18号墳墳丘図 .....	17
第 10 図 笛吹段第18号填天井石実測図 .....	18
第 11 図 笛吹段第18号填石室実測図 .....	19
第 12 図 笛吹段第18号墳遺物配置図 .....	21
第 13 図 笛吹段第18号墳遺物実測図 .....	22
第 14 図 笛吹段第19~21号墳墳丘図 .....	24
第 15 図 笛吹段第19号填石室実測図 .....	25
第 16 図 笛吹段第19号墳遺物実測図 .....	27
第 17 図 笛吹段第20号填天井石実測図 .....	27
第 18 図 笛吹段第20号墳遺物配置図 .....	28
第 19 図 笛吹段第20号填石室実測図 .....	29
第 20 図 笛吹段第20号墳遺物実測図 I .....	31
第 21 図 笛吹段第20号墳遺物実測図 II .....	31
第 22 図 笛吹段第20号墳遺物実測図 III .....	32
第 23 図 笛吹段第21号墳遺物実測図 .....	36
第 24 図 笛吹段第21号填石室実測図 .....	37
第 25 図 笛吹段第22・23号墳墳丘図 .....	39
第 26 図 笛吹段第22号墳遺物実測図 I .....	40
第 27 図 笛吹段第22号墳遺物配置図 .....	40
第 28 図 笛吹段第22号填石室実測図 .....	41
第 29 図 笛吹段第22号墳遺物実測図 II .....	44
第 30 図 笛吹段第23号墳遺物実測図 .....	46
第 31 図 笛吹段第23号填石室実測図 .....	47
第 32 図 笛吹段第24号墳遺物実測図 .....	49
第 33 図 笛吹段第25号填石室実測図 .....	50
第 34 図 笛吹段第24号填石室実測図 .....	51
第 35 図 兎沢古墳群分布図 .....	55
第 36 図 兎沢第4号墳地形図 .....	57
第 37 図 兎沢第4号墳墳丘図 .....	58
第 38 図 兎沢第4号填石室実測図 .....	59
第 39 図 兎沢第4号墳出土遺物実測図 .....	61

第 40 図 兎沢第9号墳壁画	67
第 41 図 兎沢第9号墳壁画拓影	68

## 表 目 次

第 1 表 調査日程表	2
第 2 表 笛吹段第17号墳出土土器観察表	15
第 3 表 笛吹段第18号墳出土土器観察表	22
第 4 表 笛吹段第20号墳出土土器観察表	33
第 5 表 笛吹段第21号墳出土土器観察表	36
第 6 表 笛吹段第22号墳出土土器観察表	45
第 7 表 笛吹段第23号墳出土土器観察表	46
第 8 表 笛吹段第24号墳出土土器観察表	50
第 9 表 兎沢第4号墳出土土器観察表	61
第 10 表 調査古墳一覧表	65

## 図 版 目 次

卷頭図版 笛吹段古墳群遠景

- |        |   |                          |
|--------|---|--------------------------|
| 図 版 1  | 1 | 笛吹段古墳群遠景（航空写真）           |
|        | 2 | 笛吹段古墳群遠景（東より航空写真）        |
| 図 版 2  | 1 | 笛吹段古墳群遠景（西より航空写真）        |
|        | 2 | 笛吹段古墳群遠景（南より）            |
| 図 版 3  | 1 | 笛吹段古墳群近景（東より）            |
|        | 2 | 笛吹段古墳群近景（西より）            |
| 図 版 4  | 1 | 笛吹段第13号墳石室               |
|        | 2 | 笛吹段第13号墳石室根石の状況          |
| 図 版 5  | 1 | 笛吹段第17号墳地形               |
|        | 2 | 笛吹段第17号墳天井石検出状況（奥壁より）    |
| 図 版 6  | 1 | 笛吹段第17号墳石室               |
|        | 2 | 笛吹段第17号床面遺物出土状況          |
| 図 版 7  | 1 | 笛吹段第17号墳閉塞部遺物出土状況（前方より）  |
|        | 2 | 笛吹段第17号墳閉塞部遺物出土状況（石室内より） |
| 図 版 8  | 1 | 笛吹段第17号墳奥壁               |
|        | 2 | 笛吹段第17号墳石室根石の状況          |
| 図 版 9  | 1 | 笛吹段第18号墳地形               |
|        | 2 | 笛吹段第18号墳全景               |
| 図 版 10 | 1 | 笛吹段第18号墳天井石の状況（後方より）     |
|        | 2 | 笛吹段第18号墳天井石の状況（西より）      |
| 図 版 11 | 1 | 笛吹段第18号墳奥壁付近の石室          |
|        | 2 | 笛吹段第18号墳左袖石部付近の状況        |
| 図 版 12 | 1 | 笛吹段第18号墳石室内遺物出土状況        |
|        | 2 | 笛吹段第18号墳石室根石及び全景         |
| 図 版 13 | 1 | 笛吹段第19号墳石室全景             |
|        | 2 | 笛吹段第19号墳天井石の状況（後方より）     |
| 図 版 14 | 1 | 笛吹段第19号墳天井石の状況（東より）      |
|        | 2 | 笛吹段第19号墳天井石の状況           |
| 図 版 15 | 1 | 笛吹段第19号墳奥壁付近床石の状況        |
|        | 2 | 笛吹段第19号墳石室天井石除去後の状況      |
| 図 版 16 | 1 | 笛吹段第19号墳石室根石及び全景         |
|        | 2 | 笛吹段第19号墳掘り方全景            |
| 図 版 17 | 1 | 笛吹段第20号墳天井石検出状況（後方より）    |
|        | 2 | 笛吹段第20号墳石室内覆土中小皿出土状況     |
| 図 版 18 | 1 | 笛吹段第20号墳全景（前方より）         |
|        | 2 | 笛吹段第20号墳全景（後方より）         |
| 図 版 19 | 1 | 笛吹段第20号墳天井石の状況           |

- 19 2 箕吹段第20号墳石室内の状況  
図版 20 1 箕吹段第20号墳奥壁床面付近  
2 箕吹段第20号墳太刀出土状況  
図版 21 1 箕吹段第20号墳遺物出土状況  
2 箕吹段第20号墳床石の状況  
図版 22 1 箕吹段第20号墳天井石除去後の奥壁  
2 箕吹段第20号墳掘り方及び全景  
図版 23 1 箕吹段第21・22・23号墳周辺の地形（南より）  
2 箕吹段第21号墳天井石の状況  
図版 24 1 箕吹段第21号墳全景（前方より）  
2 箕吹段第21号墳全景（後方より）  
図版 25 1 箕吹段第21号墳奥壁  
2 箕吹段第21号墳東側壁  
図版 26 1 箕吹段第21号墳石室根石及び全景  
2 箕吹段第21号墳石室掘り方全景  
図版 27 1 箕吹段第22号墳石室全景（前方より）  
2 箕吹段第22号墳石室全景（後方より）  
図版 28 1 箕吹段第22号墳遺物出土状況（東側壁部）  
2 箕吹段第22号墳遺物出土状況（西側壁部）  
図版 29 1 箕吹段第22号墳床面の状況  
2 箱吹段第22号墳石室根石及び全景  
図版 30 1 箱吹段第22号墳床面検出の状況  
2 箱吹段第23号墳奥壁  
図版 31 1 箱吹段第23号墳石室床面遺物出土状況  
2 箱吹段第23号墳石室全景  
図版 32 1 箱吹段第23号墳石室根石及び全景  
2 箱吹段第23号墳墳丘の築造状況  
図版 33 1 箱吹段第24号墳石室全景  
2 箱吹段第24号墳遺物出土状況  
図版 34 1 箱吹段第24号墳石室根石  
2 箱吹段第24号墳掘り方  
図版 35 箱吹段第17号埴土器  
図版 36 箱吹段第17・18号埴土器  
図版 37 箱吹段第18・20号埴土器  
図版 38 箱吹段第20号埴土器  
図版 39 箱吹段第17・20～22号埴土器  
図版 40 箱吹段第22号埴土器  
図版 41 箱吹段第23・24号埴土器・その他の遺物  
図版 42 1 穂沢古墳群遠景（航空写真）  
2 穂沢古墳群遠景（航空写真）  
図版 43 1 穂沢古墳群遠景（西より）

- 図版 43 2 穂沢古墳群遠景（南より）  
図版 44 1 穂沢第4号墳墳丘（北より）  
2 穂沢第4号墳墳丘（南より）  
図版 45 1 穂沢第4号墳東側周溝の土層  
2 穂沢第4号墳周溝の地山掘削面  
図版 46 1 穂沢第4号墳閉塞施設  
2 穂沢第4号墳石室全景  
図版 47 1 穂沢第4号墳石室  
2 穂沢第4号墳石室  
図版 48 1 穂沢第4号墳奥壁  
2 穂沢第4号墳玄室内西側壁  
図版 49 1 穂沢第4号墳羨道部西側壁  
2 穂沢第4号墳玄室内東側壁  
図版 50 1 穂沢第4号墳東玄門  
2 穂沢第4号墳石室根石及び全景

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

焼津市域に於いて、近年市内の住宅建設等に伴う市街化が進むなかで、市の北を貫流する瀬戸川の北側周辺は田園地帯として緑の多い地域であり、そのなかで、高草山は山裾から頂上に至るまで、蜜柑園・茶畠として利用され眺望も素晴らしい、ハイキングコースにもなっている。この地域は周辺の田畠を含めて焼津市内でも有数な農産物の供給地帯である。

高草山は、急峻な斜面を持つため、蜜柑・茶園經營の上で、地形から生じる農作業上の障害は大きかった。こうした背景のもとに県営畠地帯総合土地改良事業として高草山の山裾から頂上に至る農道建設が策定され、昭和47年より工事が行われて来た。

この土地改良事業は標高 501 m の高草山南側一帯の山麓から頂上付近にかけて農道建設を行う大事業であり、多くの幹線農道に支線農道が接続される。

兎沢古墳群の所在する野秋地区は、東名日本坂トンネルの北西側の地域である。路線は日本坂トンネルの貫通する尾根の際から北上し、兎沢古墳群を経て隣接する尾根上を西に反転し、花沢地区の山腹を巡る路線である。

一方、笛吹段古墳群を通過する路線は坂本地区から、北東に走り、山腹にそって蛇行を繰り返し西に転じて、古墳群の所在する緩斜面に至り、そこから東に向い、更び古墳群の上、約50 m 程高い位置から西へ走り、他の幹線農道と接続する路線である。この笛吹段古墳群は以前から所在が確認されていた第13号墳付近まで道路が建設され車の通行も可能となっていた。兎沢古墳群も同様の状況であり、工事箇所は古墳群の所在する尾根まで達していた。

この高草山及びその周辺は古墳や山城とかなる文化財が多数分布する地域であり、埋蔵文化財の破壊が懸念されていた。

そのなかで、野秋地区に所在する兎沢古墳群を路線が通ることとなり、島田土地改良事務所・高草土地改良組合・焼津市教育委員会・県文化課による事前協議がもたれ、これに伴い花沢地区的花沢城址、坂本地区的笛吹段古墳群周辺でも道路建設が実施されていたため急拠、協議が行われた。

野秋地区的兎沢古墳群は以前から周知の遺跡であり、焼津市内はもとより志太平野のなかでも最も遺存状況が良好であり、貴重な文化遺産であるため関係機関の調整の結果、路線は古墳群のなかでも最も分布が粗である位置を通ることで合意が成立し、調査を行うことになった。

笛吹段古墳群については、すでに13基の古墳が確認されており地形的にみて路線変更しても古墳にかかる可能性が強いため、昭和56年度分の工事は中止し、確認調査を実施することとなった。また、57年度工事予定分についても確認調査が昭和56年10月～11月焼津市教育委員会により行われた。

この結果、平坦面から斜面にかけて笛吹段古墳群13基の周知の古墳のほかに、多くの古墳が発見された。

本調査については、関係機関の間で調整が行われたが、焼津市教育委員会は小川地区的区画整理事業に伴う大規模な調査を展開している状況にあり、昭和57年4月1日に発足した財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所にて調査を行うことで、関係機関の協議が成立し、兎沢古墳群・笛吹古墳群とともに昭和57年8月より（財）静岡埋蔵文化財調査研究所が、焼津市教育委員会の協力を得て調査に着手した。

## 第2節 調査の経過

調査は兎沢古墳群・笛吹段古墳群とともに同時並行させて行うことにして、兎沢古墳群は8月4日、笛吹段古墳群は11日から、それぞれ慰靈祭を行い調査を開始した。

兎沢古墳群の地形測量は東から西へ下降する尾根上に分布する10基の古墳群とその周辺の範囲で実施したが、先ず調査区域を優先させた。雑木等を片付け、古墳確認トレンチを掘り下げに入った。この結果、5号墳推定地には古墳は存在せず、尾根上の南側用地境付近にコンターに並行して構築された4号墳を発見した。

兎沢古墳群は、尾根上にコンターに並行して立地するが、第7号墳の如く東西方向の尾根からやや南に寄った位置に所在するという例もみられるため、南側斜面にも2本のトレンチを設定したが古墳は確認されなかった。この結果、調査対象古墳は第4号墳1基となり、7月上旬から埴丘調査と並行して石室の調査に移行した。その後、9月13日の台風により作業を一時中断し、10月には当研究所の現地会議の際第9号墳において猪の線刻画の重大な発見があり、11月で調査を終了した。

笛吹段古墳群は、調査区域を中心とした斜面部と平坦部の地形測量を行いつつ古墳の位置確認のため56年度焼津市教育委員会の試掘調査の結果に基づき、9月より石室填丘・周溝の検出作業に移行した。その後、9月の台風のため作業は一時中断の状態に陥り、10月に入り本格的な実測を中心とした石室の調査に入った。また、新たに17・23・24号墳が発見され調査に入った。

11月26日、13号墳を除く17号墳～24号墳の航空写真撮影及び航空測量を実施し、翌日11月27日、焼津市教育委員会との共催による現地説明会を開いた。そして、実測の完了した古墳から石室解体、実測をすすめ12月15日、現地作業を終了した。

第1表 調査日程表

月 日	8月				9月				10月				11月				12月			
	4	11	18	25	31	6	13	20	27	4	11	18	25	8	15	22	29	6	13	15
作業																				
埴丘石室発掘			U-4																	
床面精査																				
写真実測																				
石室解体補足																				

## 第 II 章 位 置 と 環 境

静岡県のはば中央、志太平野の東端に位置する焼津市は、駿河湾に面していることから戦後、カツオ・マグロを中心とする遠洋漁業基地として知られるようになった。この焼津市の背後には標高 501 m の高草山が、志太平野と静岡平野を分断する形で存在する。高草山は、海岸線に近く、沖積地と接しているため、急峻な印象を受けるきわだった山である。また、山頂には、高草神社の小さな祠と無線中継塔があり、山腹には茶園とミカン園が広がっている。さらに、高草山からの展望は、東には富士山・駿河湾の波間にへだてて伊豆半島・眼下には、焼津市街と海岸線が続く。このような展望をもつ高草山は、焼津市街に近いこともある、家族向きのハイキングコースとなっている。

また、高草山の南斜面は、裾部に石脇・坂本・関方などの集落が形成されているが、高草山を中心に茶葉やみかん生産にたずさわっている農家が多く、周辺の住民にとっては、生活手段の一部にもなっている。

一方、瀬戸川周辺の沖積地においては、古くから水稲耕作を展開させてきたが、近年では、東海道新幹線につづいて、東名高速道路焼津インター・チェックングループも開かれ、付近は交通の要所となっている。また、静岡市に近接することもある、しだいに都市化の波も押しよせ、遠洋漁業基地焼津の街も新しい展開をみせている。

志太平野東半部に位置する焼津市域には、高草山とその支丘を中心に多くの古墳が分布する。これら古墳については、すでに増井義己氏によって、志太平野に展開する古墳群のうち高崎支群として位置づけられている。<sup>註1</sup>

これらの古墳群は、現状では谷山（旧名称高草）第1号墳を最古とするようであるが、この古墳については礎床の主体部に管玉1・鉄劍を副葬する様相から5世紀末ないし6世紀初頭に位置づけられている。しかしながら、近年、焼津市教育委員会の発掘調査の結果、旧焼津市内、小川地区の沖積低地内<sup>註2</sup>から古墳時代初頭の墳墓の発見が続き、そのうち小深田西第1号墓からは重圓鏡が発見されるなど、その前後に位置する墳墓あるいは古墳の存在が明らかにされつつあり、この時期の墳墓（古墳）が旧焼津市街の微高地や砂洲上や沖積地に埋もれている可能性も否定できないのが現状である。<sup>註3</sup>さらに、近年における発掘調査によれば、全体として「いずれにしろ焼津市内の平野に進出してきた最初の地域が、この微高地（上記の微高地や砂洲）であろう」と推定される段階にいたった。

さて、高草山とその周辺に展開した古墳群は、上屋敷・奥屋敷・宮腰・東海道・寛沢・谷沢・谷山などがあげられるが、その多くは古墳時代後期の群集墳である。また、これらの群集墳は高草山の山腹や裾部に存在するため、外形上、墳丘は明瞭とはいせず、茶園やみかん園の造成や開墾の際、石室の一部が露出し、その存在が確認された例が多い。このため、古墳群の実数は、現状を上まわる事が推定される。

このうち、今回、発掘調査を実施した笛吹段古墳群は、高草山南斜面のはば中央に位置し標高 230 ～ 330 m の間に約 20 数基の古墳の存在が推定される。また、高草山裾部の石脇および坂本の集落が標高 10 m 前後を測るので、その比高差は 200 m 以上の高所にある。これらの古墳は、高草山の緩傾斜面の地形の変化に応じて、いくつかのまとまりを示しているが、今回、調査対象となった第13号墳から第24号墳は、東西約 180 m 南北約 100 m のテラス状の緩傾斜面に位置する。行政上では、焼津市字吹込 1626 番地ほかに相当する。

また、笛吹段古墳群については、すでに増井義己氏によって、4基の古墳が調査されているが、その位置については、標高 330 m 前後を測る、今回、調査対象となったグループの上段の緩傾斜面に位置す



- 1. 莢沢古墳群
- 2. 向山古墳群
- 3. 苗吹段古墳群
- 4. 高崎古墳群
- 5. 谷山古墳群
- 6. 覧沢古墳群
- 7. 東海道古墳群
- 8. 宮腰古墳群

第1図 位置図

る。また過去の調査例のなかで、注目されるのが、高草山の裾部にあたる高崎地区で昭和33年に発見された広畠古墳がある。この広畠古墳からは、須恵器四耳壺や銅製方頭柄頭・鉢具などが発見されている。<sup>註5</sup> この古墳については8世紀前葉に位置づけされ、被葬者についても初位の官人層という想定がなされたことがあり、高草山周辺の古墳群の推移を考える上で興味ある問題を投げかけている。

これらの古墳群の立地をみると、狼煙山古墳・別所古墳、東名高速道路の両側には、今回、発掘調査を実施した兎沢古墳群や向山古墳群などのように丘陵線線上に位置するもの、笛吹殿・荒芝古墳群のように高草山中腹に位置するもの、また、その他多くの古墳群のように高草山裾部に位置するものとに区分できる。このような立地の違いが、群集墳の展開の中でどのように位置づけられるかも今後の課題であろう。

高草山から西側にかけていくつかの横穴式石室を主体部とする群集墳が展開している。その中で、西方に所在する一古墳からは、内行五花文を主紋とし、重圓文と櫛齒文を組合せた六鈴鏡が出土している。後期古墳としては、極めて少ない例で、今後、この地域の古墳時代を考える上で、その性格づけは重要な課題となろう。

また、旧東海道にそった岡部町では、横添古墳群のうち板沢支群のうち9基が調査されている。<sup>註6</sup>

また、内谷古墳群のうち本郷支群の第31号墳も調査され、いずれも、報告書、概報が公刊されている。<sup>註7</sup>

今回、調査対象となった兎沢古墳群は高草山の支丘が静岡市境と接する位置にあり、東名高速道路日本坂トンネル直上にあたるこの古墳の存在については、すでに『静岡県史第一巻』に簡単な記述があり、古くから知られていたことが判明する。また、この古墳群は、丘陵線線上に継列する様相で10基が登録されているが、外形上、すべてが確認されているとはいがたい。そのうち、5基が横穴式石室の主体部が開口し、そのほかの古墳についても埴丘が残されており、確実視されている。また、この古墳群については焼津市域の中で、外形上、もっとも良好に残存する群集墳であるため、典型例として広く知られている。行政上、焼津市野秋字兎沢地内に相当する。

註1 増井義己「志太平野の群集墳」「群集墳と横穴」静岡県考古学会 1978年

註2 増井義己「焼津市高草11・12号墳発掘調査概報」「埋蔵文化財発掘調査報告書」1968年

註3 焼津市教育委員会「焼津市埋蔵文化財発掘調査概報IV」1983年

註4 焼津市教育委員会「焼津市埋蔵文化財発掘調査概報II」1982年

註5 向坂鋼二・増井義己「焼津市高崎出土の土師器と須恵器」「考古学手帳4」1958年

向坂鋼二「焼津市高崎・広畠古墳出土の遺物」「須恵器—古代陶質土器の一編年」静岡県考古学会

1979年

註6 大塚敏夫他「横添古墳群板沢支群発掘調査報告書」1982年

註7 増井義己「内谷古墳群本郷支群31・32号墳発掘調査概報」1981年

### 第 III 章 笛吹段古墳群の調査

笛吹段古墳群は高草山、山頂から南下する支丘上に分布し、古墳群の範囲は東西約180mで南北方向に細長く、標高230m～330mの間に位置する。今回調査した古墳を含めて今まで22基の存在が確認されている。この地域は高草山南斜面のほぼ中央部分に位置している。

笛吹段古墳群の立地は大別して次の3つにまとめることができる。(1)支丘上の尾根及びその東斜面に立地するグループ—第6～9号墳—、(2)急斜面が緩斜面に移行する位置に立地する—第17～25号墳—、(3)テラス状の平坦部縁辺に立地するグループ—第11～13号墳—となる。今回調査を行ったのは(3)に属する13号墳を除き、すべて(2)のグループに含まれる立地の古墳であった。

以下に調査を行った古墳について記述をする。尚、遺物配置図の遺物番号のうち頭文字Bは玉類、Iは鉄製品を示す。

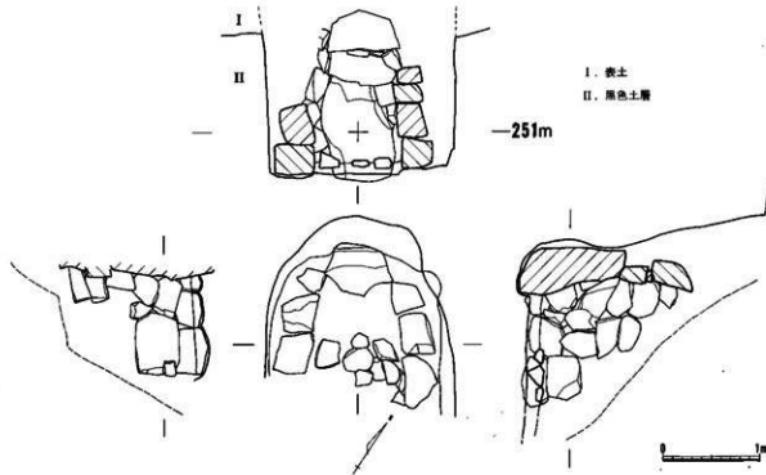
#### 笛吹段第13号墳

##### 墳丘と石室

##### 立地

この古墳は調査区の最も南、平坦部が南に張り出す手前25m付近、251mコンターが張り出し部から谷に向う、やや南東向きの平坦部から、急斜面に移行する位置にある。

この古墳は以前から笛吹段古墳群第13号墳として周知の古墳であり、平坦部縁辺に位置する古墳のかの一基として微地形観察の結果確認されていた。そして同様の立地を示す古墳が本墳より更に南の縁辺に数基確認される。



第2図 笛吹段第13号墳石室実測図



第3図 笛吹段古墳群分布図

### 墳丘

墳丘・周溝等の外部施設は検出できなかった。この付近は地山が地表下約20~30cmと浅く茶園開墾。その後の土地利用によって墳丘・周溝が削平されたと判断された。

### 石室

主体部は、横穴式石室をもち奥壁床面で海拔250.7mを測る。石室の遺存状況は奥壁と側壁の一部を残し前側は掘削により消失していた。現存値は長さ約1m、奥壁巾90cm、奥壁3段残り、根石を縦位に2・3段目は横位に積み高さ床面から150cmであった。

奥壁は比較的大型の詰石を用い縦位の根石と2段目は石室内に張り出し、奥壁の面にかなりの凹凸がみられる。

側壁は、30cm~50cmの角礫を奥壁に接する部分を小口に積み、根石及び2段目は横口、他を小口積みする。遺存する範囲では側壁の状況把握は不可能に近く礫の大きさと位置の関係が不明瞭で工法としては、同寸法の礫を積みあげたと判断される。特に、東側壁の下から2段目は縦長に置かれており積み方も粗雑である。

床石は、奥壁から50cmの範囲にはみられず約20cm前後の偏平な礫を敷いている。床面については残存部分が少く状況の把握は、ほとんどできない程消失していた。

石室はやや胸張りであったと判断され奥壁部巾90cmに対し現存値の最大巾は奥壁より80cmの位置で、約110cmを計る。

掘方は奥壁部で、半円状に張り出し、やや外に広がりをみせて掘られる。確認した掘方の最大巾は約2mであった。

### 出土遺物

石室の遺存状態は悪く、本古墳からの遺物の発見は認められなかった。

## 笛吹段第17号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

この古墳は南斜面の標高260m~263mに立地する各古墳(17~21号墳)のなかで最も西に位置し、道路予定路線が平坦部から東へ屈曲して、上昇する位置に当る。第18号墳とは約36mの間隔をもち、標高260m付近に石室が構築されている。

この古墳の西には土採跡跡があり、この部分を境に尾根が南に張り出し、東向き斜面となって平坦部に連なる。この古墳の周辺は背後に18号墳から続く石垣がみられる他は比較的旧地形が残されているが、この古墳の位置する大部分の範囲が用地外であるため微地形の観察は不可能であったが、この古墳の前部には僅かに張り出すコンターが認められた。

#### 墳丘

この古墳は、焼津市教委による試掘トレンチを再度、深掘り、精査した際、最前部の側壁を発見し、更に、用地境にそって確認トレンチを入れた結果、両側壁を発見するに至ったものである。尚、東側の墳端部にそって、南北方向で、礫を伴う溝状遺構を検出した。

溝状遺構は巾1.6m、深さ約0.4m、用地境で17号墳の墳端を切り南下して消失する。礫は石室のものと同じであり底が平坦となる溝に散在していた。礫の大きさは30~40cmであった。

## 石室

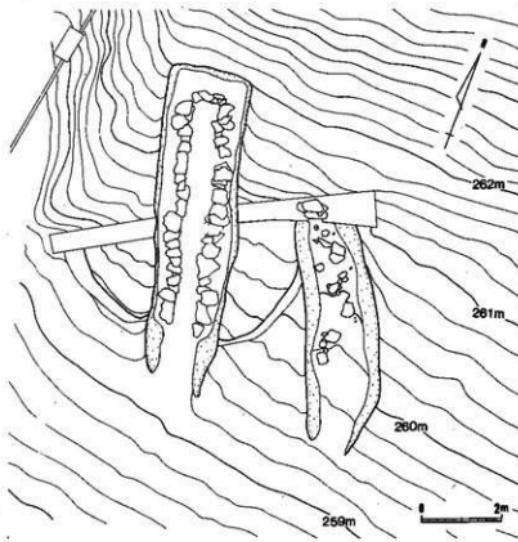
主体部は斜面に対し、やや斜行する方向に構築された横穴式石室であり、奥壁床面レベルは、標高259 m 64 cmを測り、全長6 m、奥壁部巾0.71 m、最大巾0.82 m、ほとんど崩壊のない長方形のプランを呈する。

天井石1個が石室中央よりやや奥壁寄りに落下した状態で発見された。石材は、長さ82 cm、巾58 cm、厚さ30 cm、角柱状に面取りされ、その下部は床面には達していなかった。東側壁は奥壁付近が崩壊し、2・3段遺存するのを除いて、他は、地表から一定の深さで残ることから、抜き取られたと判断される。このような状況で遺存していたが、石室の根石は築造時の状態と判断され、全体の規模、構造等の推定可能な数少い古墳である。

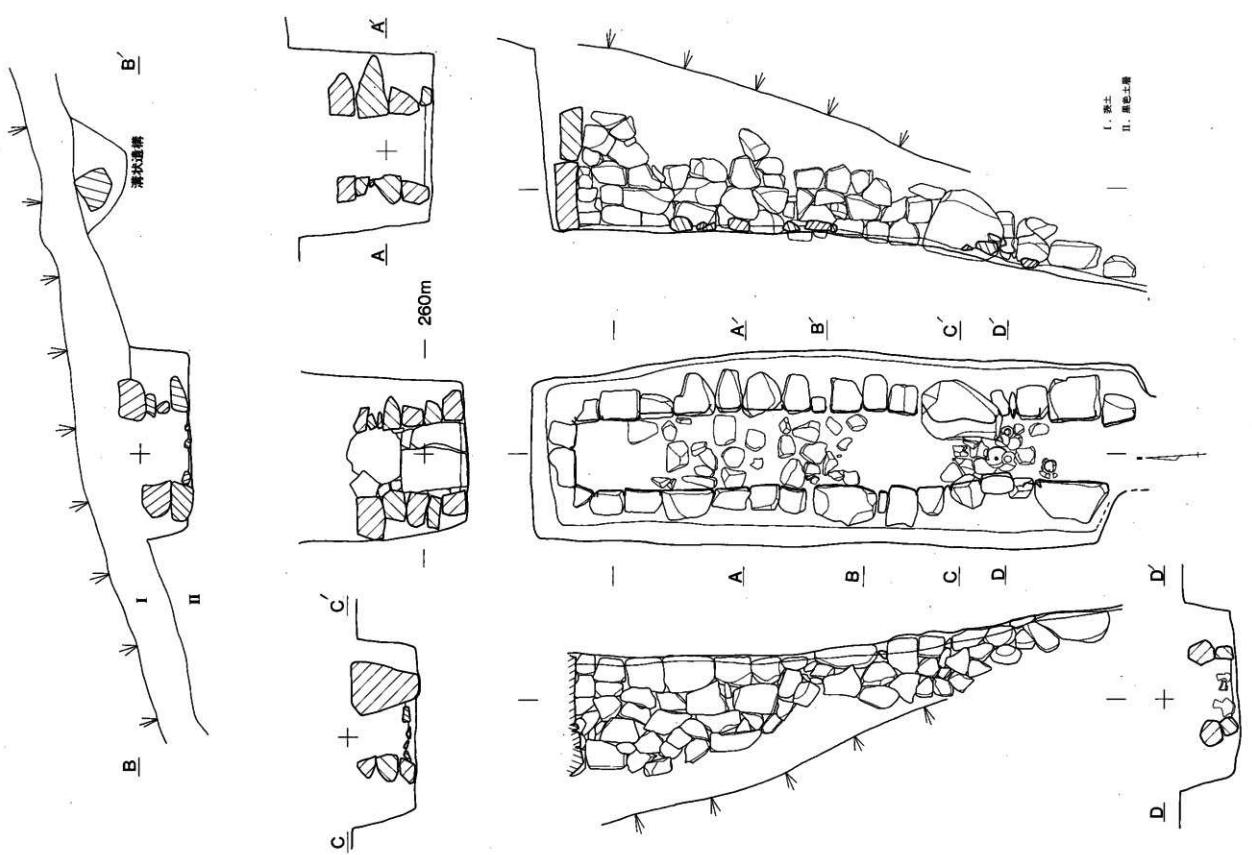
奥壁は3枚2段に構築され一段目は、長さ約70 cmの長方形の板状石材を用い、右側には角柱状の石材を組み、奥壁床面の巾を確保し、2段目も左側に3個の礎をあてがい、奥壁の巾を保っている。2段目の石材は、下段と異り、角が丸味を帯び、風化がすすむもので、側壁の石材と類似する。奥壁は、やや内傾するが整った面を構成している。

側壁は、奥壁付近で5~6段、中程で3~4段、前方では根石のみという遺存状態であり西側壁が良好に残る。長さ30~40 cmの風化し、丸味をもつた角礎を用い、石材の大きさと使用位置をみると西側壁では50 cm前後で方形の石材を奥壁から石室中央の手前、2 m付近まで3個根石として用い、3 m付近には70 cm×25 cm、先端部には80 cmの細長い根石を置く。他は30 cm~40 cmの石材で、側壁が高くなるに従って小さい石材を用いる。根石は広口に積み、2~3段目には横口積みもみられるが、小口積みが多く、3段目以上は、ほとんど小口に積む。このように不均一ながら西側壁には石材の大きさと、使用位置に規則性がみられるのに対し、東側壁では根石を含めてほぼ同じ大きさの石材を使用し奥壁から2 mの範囲は40 cm、その南側では、30 cm前後の石材を用いている。特に、崩壊した部分には、根石より大きい石材を用い、床面では根石の上面が僅かに確認される状態で、2段目が前に張り出し、築造時よりかなり変形していると推定された。2段目は横口、その上からは、小口積みにしている。以上のように、東壁は、西壁と比較して、土圧に対して脆い構造であったと判断される。

東西壁の相異は部分的にも指摘される。奥壁より4 m付近の両側壁は大きく異り、西では、根石を含めて30 cm前後で、不定形の礎を小口積みするが、東では、高さ70 cm、巾80 cmの大型石材を置きその両側にも西よりやや大きい石材を使用する。この大型の石材は、奥壁よりも大きく、天井石を除いて、遺存する石室のなかでは最大のものであった。



第4図 苗吹段第17号墳横断面図



第5図 筒次段第17号墳石室実測図

床石は、奥壁より50cm～3mの間に、散在した状態で検出され、15cm～30cmの風化した角礫を用いる。30cm前後の比較的大きな礫が奥壁寄りに認められるが、規則的な配列をなす状態ではなく床石の一部と判断した。

この古墳の床面は、奥壁から約3mの間が平坦であるが、それより前部は、ゆるやかに下降し、側壁の末端では、平坦部とのレベル差は55cmを測る。従って、奥壁より50cmの間を除く、平坦部に床石を敷いたと判断される。

尚、先述した東側壁の大型石材の置かれた両側壁間、奥壁より4m～5mの間で床石の小型のものと類似する約20cm前後の風化した角礫が、土器を伴って配置されていた。土器の一部はこの礫に乗せてあり、また礫の配置されない約20cmの間に大部分の土器が出土している。尚この部分は床面巾が約60cm、最大巾より約20cm狭く床面の境付近からやや巾広となるプランがその位置に向って狭くなつてゆく傾向が指摘される。

掘り方は巾1.7mほど垂直に下端で巾1.5mを測る。石室のプランにそった長方形を呈し、西は直線に東はやや張り出して前方に向い、側壁先端付近で表土層と接し消失する根石の掘り方もほとんどみられず、僅かに根石を安定させるため掘り窪める程度であり、石室中央部より前の根石は掘り方が浅く、奥壁部で地表から約2mを測り、緩斜面に築造される。床面部の掘り方も床面の傾斜にそつて検出され、後方を削り、前部の床面をつくり出すような形跡はなく、前部の根石下部は築造時の斜面を示していると推定される。

### 出土遺物

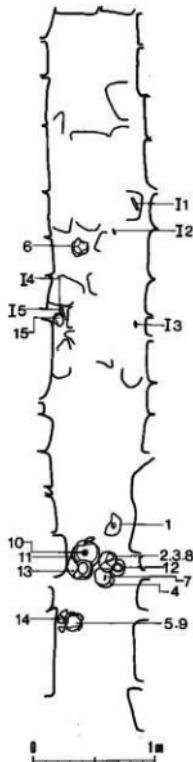
#### 遺物の出土状態

遺物は、石室内の礫床と閉塞部付近にわかつて出土した。石室内から発見された遺物をみると、石室の長軸方向から発見されており、鍼状鉄器も発見されていることから、木棺内に副葬されていたと判断される。鉄錆は足位に置かれていたと推定される。土師器・壺は、木棺内であるかの判断は保留しておく。また、閉塞部付近から出土した遺物は、東側壁寄りに壺蓋・配石間の土器集中箇所には壺類を中心にして長頸壺、西側に広口壺が置かれ、広口壺にもたせかけた壺のセットは、西側壁寄りの閉塞石に置かれている。なお、最前部西側壁に接して壺身・土師器鉢が重なつて出土した。これらの事実により、供献された土器群といえるだろう。

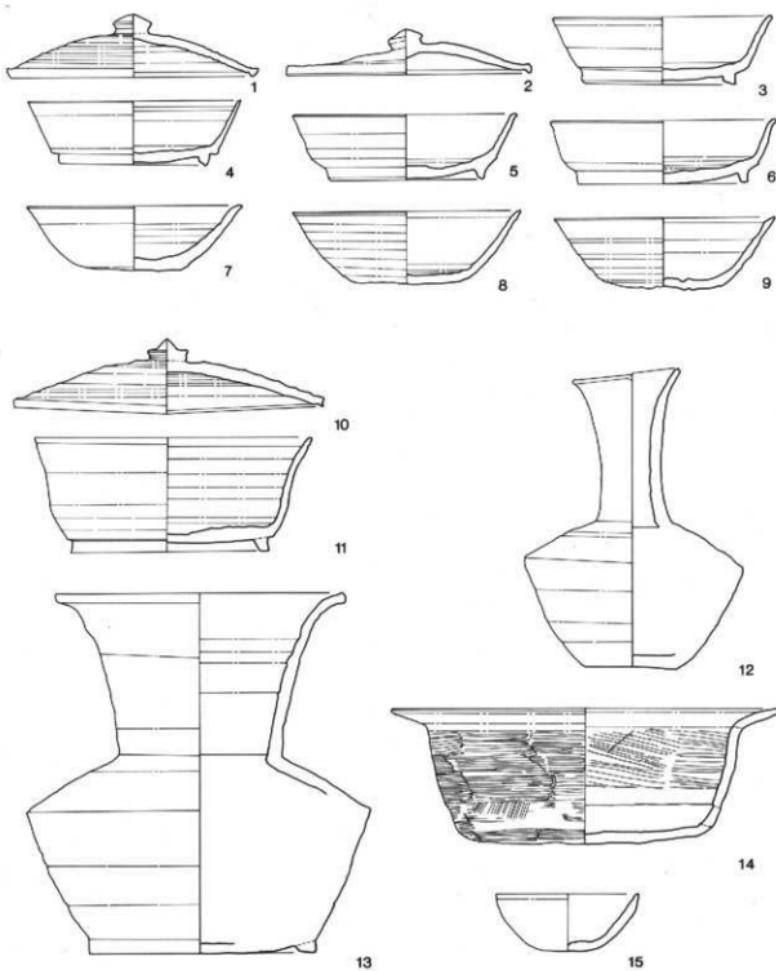
#### 須恵器

笛吹段古墳群から出土した遺物は、土器類（須恵器・土師器）・鉄器類・玉類に大別される。また、出土状況をみると、周溝や埴丘から出土したもののは少なく、その多くは石室内の副葬品といえる。さらに、副葬品の傾向として、土器供獻を主体とし、わずかに直刀・刀子・鉄錆などの武器類、ほかに若干の玉類が認められた。

したがって、副葬品の主体をなす土器類については、個々の記述を別表の観察表にゆずり、あらかじめ、出土した須恵器・壺類を基準として分類したのち、記述をすすめ、出土点数の少ない鉄器・玉類については本章の中で記述をすすめた。



第6図  
笛吹段第17号墳遺物配置図



第7図 笛吹段第17号墳遺物実測図Ⅰ

第2表 笛吹段第17号墳出土土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏蓋	1	口径 15.7 器高 3.9	先端の丸い擬宝珠状のつまみがつく。天井部上位がやや丸味を帯び、口端部へつづく。口端部はつまみ出している。	つまみ周辺の天井部上位をヘラケズリ。天井部内外面ともに横ナデ。	胎土 良好 焼成 色調(外)暗青灰色 (内)灰白色	
坏蓋	2	口径 15.3 器高 2.8	丸味をおびた擬宝珠状つまみがつく。天井部は扁平で口端部へつづく。口端部は内側に屈曲する。	天井部上位ヘラケズリ。体部内外面ともに横ナデ。	胎土 良好 焼成 色調 灰白色	
坏身	3	口径 13.7 器高 4.2 高台径 9.6	高台脇から屈曲して口端部へつづく。	高台内中央部は未調整。高台内より体部内外面、横ナデ。	胎土 良好 焼成 色調 灰白色	
坏身	4	口径 13.3 器高 3.9	高台脇が锐く屈曲し、口端部までつづく。	高台内をヘラ削り、体部内外面ともに横ナデ。	胎土 良好 焼成 色調 青灰色	
坏身	5	口径 1.4 器高 4.1 口径 9.7	体部下位で、わずかに屈曲し、口端部はわざかに外反する。	高台内中央は未調整。高台内から体部内外面は横ナデ調整。	胎土 良好 焼成 色調 灰白色	体部汚染
坏身	6	口径 14.1 器高 3.9 高台径 10.1	高台脇からゆるやかに屈曲し、口端部につづく。口端部はわざかに外反する。	高台内中央部、未調整。高台内ヘラケズリ。体部内外面横ナデ。	胎土 良好 焼成 色調 灰白色	
坏身	7	口径 13.5 器高 4	やや平底気味で、ゆるやかに口端部につづく。	底部はヘラケズリ。体部の内外面ともに横ナデ調整。	胎土 炭化粒子を含む。良好 焼成 色調 灰白色	
坏身	8	口径 14.2 器高 4.2	やや平底気味で、ゆるやかに口端部まで続く。	底部はヘラ切り未調整。体部にロクロ目が残る。	胎土 良好 焼成 色調 暗灰色	
坏	9	口径 13.8 器高 4.2	やや平底気味で、口端部が外反する。	底部はヘラ切り未調整で、体部にロクロ目を残す。	胎土 良好 焼成 色調 暗灰白色	
坏蓋	10	口径 19.3 器高 4.6	やや変形した擬宝珠状のつまみは、先端部を尖らせていてる。天井部から口端部にかけてゆるやかに屈曲する。口端部は外側にわざかに屈曲する。	天井部の上位を横ナデ、中位をヘラ削り調整、下位から天井部内側を横ナデ調整。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 暗茶褐色	11とセット
大形坏	11	口径 17.3 器高 7.1 高台径 10.4	深目の土木で、口端部へゆるやかに外反する。断面、台形の高台、外側にわざかに広がる。高台の脇は、锐く屈曲する。	体部下位から、高台内にかけてヘラケズリ。体部外側より、みこみまで横ナデ。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 暗褐色	10とセット
長頸壺	12	口径 6.8 最大径 13.5 器高 18.5 底径 5.7	平底の底部で、腹部上位で屈曲する。口端部はゆるやかに外反する。口端部の一ヶ所に受口をつける。	底部から頸部下位はヘラケズリ。頸部上位から口頸部は横ナデ。	胎土 密・良好 焼成 堅緻 色調 灰白色	
広口壺	13	口径 17.9 最大径 21.3 器高 22.3 底径 14.1	断面台形の高台をもち、胴部上位で锐く屈曲する。広く開いた口頸部は、口端部で外反する。	頸部下位ヘラケズリ、頸部上部から口頸部は横ナデ。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 灰白色	

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
鉢	14	口径 24.1 器高 8.4	平底の底部で、胸部がゆるやかに屈曲する。口縁部は大きく外反する。	口縁部横ナデ、体部外面へラケズリ、体部内面ハケ目調整、内外面とも丹塗り。	胎土 小礫を含む。 焼成 やや軟 色調 淡茶褐色	

坏類については、坏蓋につまみのつく以前の形態を第Ⅰ類とし、蓋にはつまみの坏蓋内面にかえりのもつものを第Ⅱ類、蓋につまみがつき、蓋内面にかえりの消失する形態を第Ⅲ類とした。また坏身については、立ち上りをもつ形態を第Ⅰ類、立ち上りが消失し高台をもたない形態を第Ⅱ類、立ち上りが消失し高台をもつ形態を第Ⅲ類とした。なお、無蓋の坏身については、これらの分類から逸脱するが、便宜的に第Ⅳ類として記述をすめる。

出土した遺物は須恵器（坏蓋3・坏身8・広口壺1・長頸壺1）、土師器（坏2・鉢型土器1）、鉄製品に大別される。玉類の副葬と鉄製武器のうち刀剣類を欠いている。

坏蓋はいずれもつまみをもち、内面の消失した第Ⅲ類である。つまみの形態は、擬宝珠状を呈し、先端の突ったものと丸味をおびたものがある。坏身は、上記の坏蓋とセットとなる有蓋坏身と高台のない塊状を呈する無蓋坏身の両者がある。有蓋坏身は、高台と体部の境界付近で鋭く屈曲するものとゆるやかに屈曲するものがある。また高台の形態についても断面台形を呈するものと、丸味をおびるものがある。無蓋坏身は、底部の調整にヘラ切り未調整のあとヘラ削り調整をおこなうものとヘラ切り未調整のものがある。

また、これらの蓋坏と異なる法量のものを大型蓋坏と呼称した。この蓋坏は、胎土・焼成などから1セットになる蓋と身と判断されたが、他のグループと異なって、地元産ではなく、猿投・尾北窯の生産と考えられる。また、つまみの形態や高台の形態から考え、金属器の影響を受けた器型と判断されよう。広口壺と長頸壺は、出土状況より考え、先の第Ⅲ類の蓋坏と一括されるものと考えられるが、後期古墳から出土する須恵器としては、新しい時期の特徴をもっている。

### 土 师 器

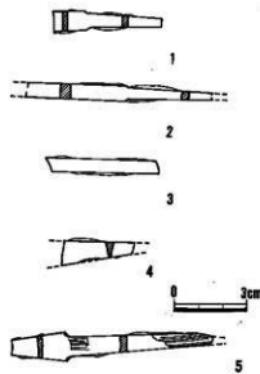
平底で口端部が鋭く外反する器型で鉢形土器と考えた。全面に丹塗りで、外面に細いヘラミガキ調整を施する。県内では皆見にふれた限り、類例認められない。ほかに坏が1点出土している。

### 鉄 鋸

残存長8.3cm、巾1.3cmで先端部を欠く。茎部は、木質部も残存しており、形態もよく残っている。形態は尖根式に分類される。

### 鍔状鉄器

残存長7.7cmから4.1cm、巾8mm～6mmを測り、両端部を欠く。断面方形の部分と断面球形を部分からなるが、刃部を形成しておらず、形態からカスガイではないかと判断した。このように考えられるとすれば、玄室内における木棺埋葬の位置を推定でき、また、埋置された木棺は組合せ式木棺であると推定される。



第8図 苗吹段第17号墳遺物実測図Ⅱ

## 笛吹段第18号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

この18号墳は標高 261 m ~ 264 m 付近に位置し西の17号墳とは、約36 m、東の19号墳では23 m、北東方向の24号墳は、約17 m の間隔を置いている。

斜面は、17号墳と同じ北西方向に走るコンターを持ち、ほぼコンターの流れにそって高さ、50 cm 程の石垣が墳丘を斜めに横断して組まれており、17号墳の後方に達している。この石垣による微地形の変化を考慮しながら、現地形を観察すると、石垣より下の墳端と推定される部分に僅かな張り出しが認められ、コンターの乱れを生じている。現地形の観察からは、古墳の所在を認めることが困難であった。茶園改植時に、石室の石材を抜き取り石垣に転用し、周囲の斜面にあわせて、削平した結果形成された地形である。

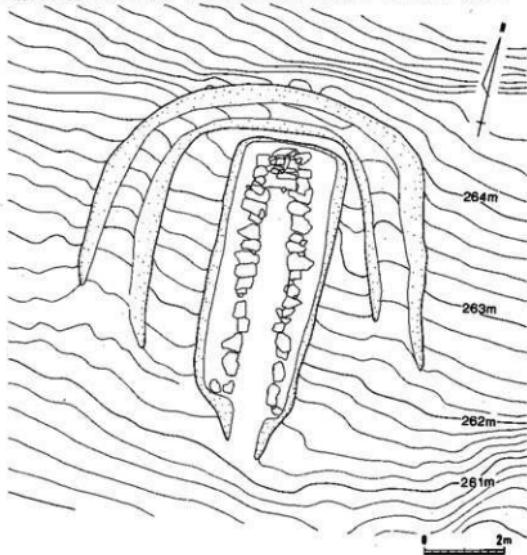
#### 墳丘

墳丘は、東西の周溝内側上端間で 6.2 m、南北 8.6 m と推定され、後方から西侧にかけてゆるやかに屈曲し、内側に向って消失するか、東側は屈曲部で鋭角になり、聞き気味に消失している。全体の形状からほぼ隅丸方形状の墳丘プランを示すものと認められる。奥壁後方のトレーナーでの土層をみると、周溝の中心部から奥壁まで僅か 1 m であり、周溝は黒褐色土中に掘り込まれ、掘方から奥壁にかけて搅乱のため、盛土は検討不能であったが、石室横断トレーナーでは周溝～石室掘方間に約 15 cm ~ 20 cm の盛土が一層認められた。そして、側壁末端部から掘方確認のトレーナーを入れたが、掘方も含めて、墳丘の盛土は認められなかった。

周溝は黒褐色土中に掘り込まれ、溝内堆積土も、土質、色調ともに極めて類似していたが、確認トレーナーを入れ、その断面の形状及び規模を確認した。西では、巾 1.5 m、深さ 0.35 m 前後で底は直線的に斜行し断面形状は U 字形を呈している。東側では石室中央から約 3.5 m が周溝の中心であるが、東ではそれが約 50 cm 短く、断面の形状もやや偏平な V 字状を呈する。周溝内堆積は、黒褐色土が主で、下部に地山である黄褐色粘土が、厚さ 10 cm のレンズ状に堆積していた。この部分の溝は、巾 1.5 m、深さ 30 cm である。墳丘周溝とともに遺存状態は良好であった。

#### 石室

主体部は、袖石を持つ横穴式石室であり、コンターに直交して石室が築造されている。天井石が架構された状態で残り、側壁も地表より 0.6 m ~ 0.7 m の深さまで抜



第9図 笛吹段第18号墳墳丘図

き取られてはいるが、天井石から最前部の根石まで斜面の傾斜にそって良好に遺存していた。

天井石は2枚で、長さ約70cm、巾40cm前後、厚さは20cm程の細長い板状を呈する石材を用い、断面長方形に面取りされていた。この天井石は、側壁最上面と、僅か10cm程重なり合って架構され周囲は天井石を安定させる20cm前後の礎や、土砂の流入を防ぐ小礎で囲まれていた。石室の計測値は、全長6.2m、奥壁部巾0.75m、最上巾1.1mを測り胴張りの長方形を呈する石室である。

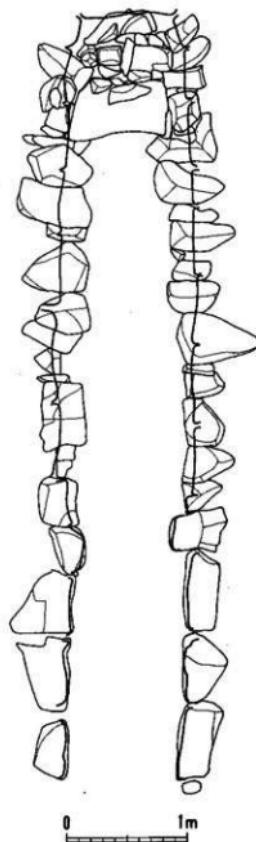
奥壁は、4段で70cm×40cm前後、厚さ30cm程に面取りされた長方形の板状石材が用いられ、根石は巾35cmでやや不整形である。2段目から4段目にかけて、上位の石材程小型にはなるが、各々の接する面も平坦に面取りされ、詰石を用いるのは2段目と3段目が接する部分のみである。4枚の奥壁面、天井石まではほぼ垂直に立ちあがり接点もほぼ水平に積み重ねている。

側壁は東西壁ともに斜面の傾斜にそって、ほぼ均一に遺存しており、天井石の乗る約90cmの範囲は約6～7段、玄室中央部で3～4段、側壁末端は根石のみ遺存する。側壁はすべて面取りされ、鋭角化した稜を持つ角礎が用いられ、堅牢に構築されている。東側壁は奥壁付近に長辺30～40cmの角礎を小口に積み、奥壁より1m20cm付近から方形に定形化した比較的大型で、長さ50cm、巾40cm前後の石材を用いる。2段目からの積み方は段数による変化はなく、50cm前後の大型石材は横口、36cm前後の小型のそれは、ほとんどが小口面向けて構築されている。詰石は奥壁よりの小型の石材間に集中して用いられ、前半部分にはほとんどみられない。両側壁についても、同様な傾向が認められるが、方形に面取りされた石材を多く用いており、各々の石材も大きく整然と積まれ詰石の数も少い。両側壁とともに、石材の大きさと位置の関係は、高さに関係なく小型のものが奥壁寄りに、大型のものは玄室中央より前に用いられる傾向が認められる。

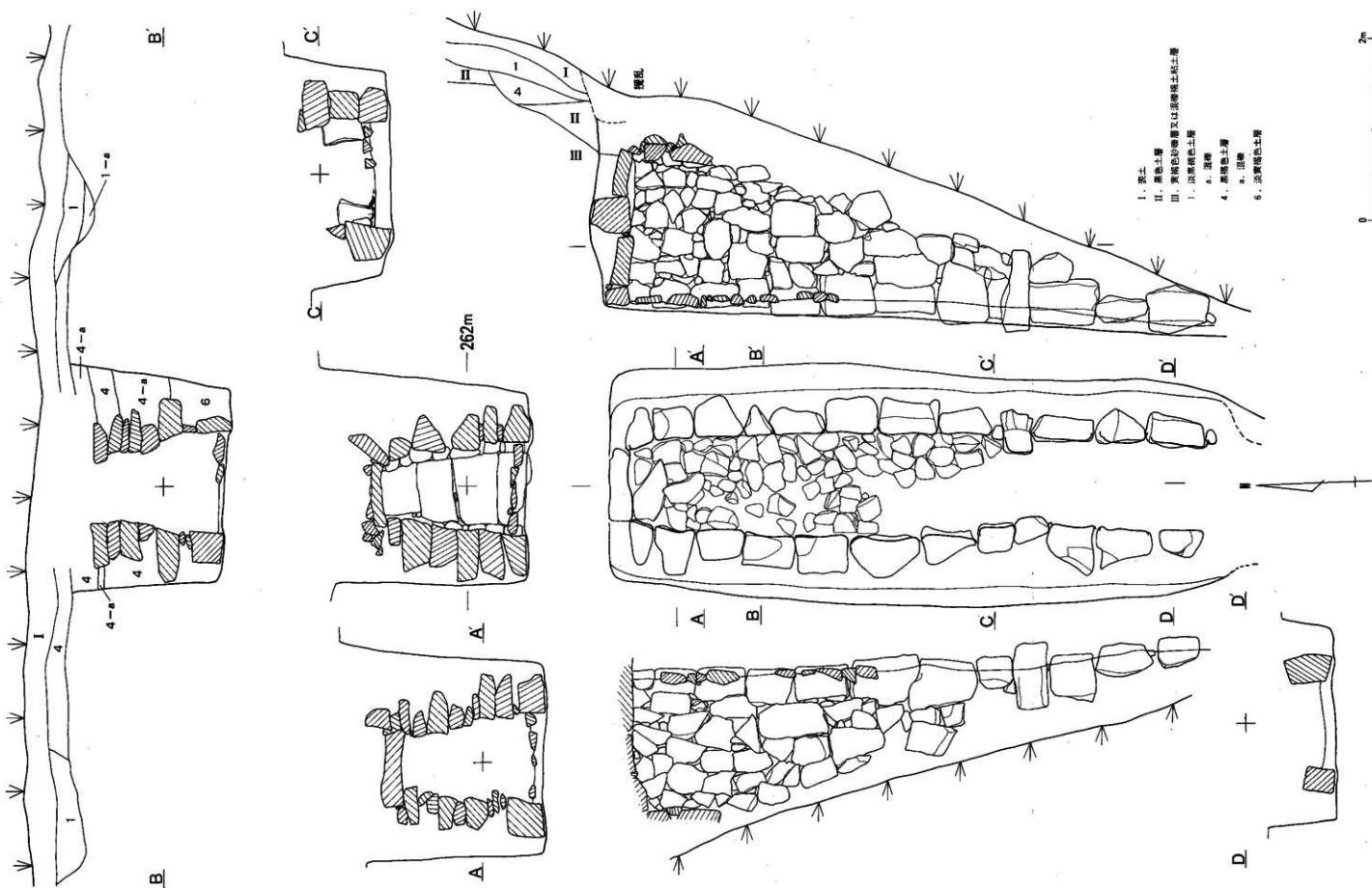
袖石は、東側では奥壁より4m30cm、西では4m40cm付近に認められ、床面で約10cm～15cm内に張り出す。東袖石は長さ88cm、最大巾33cmの細長く、先細りした角柱状の石材を用いる。西の袖石は東より約18cm程短く、長さ70cm、巾38cmの長方形を呈する。四角に面取りを施し定形化した袖石である。

羨道部は側壁が根石のみであり、僅かに東袖石に接して2段目が一個認められる遺存の状態であるが、石室内の根石に匹敵する規模の石材を用いている。羨道部巾は石室内よりやや狭く、約90cmを測る。

石室内床面には床石が敷かれ、その範囲は東側壁寄りに袖石までの間4mと、石室中央より西はやや床石間に隙間がみられ、奥壁より2.7m、袖石の1.5m手前で終っている。床石は20cm～30cmの偏平な角礎を用い奥壁に接して長さ約70cmの大型の床石が認められる以外はほぼ大きさが均一化されている。奥壁付近では各々の床石が重なり会うが、大部分は各々が接する程度



第10図 苗吹段第18号墳天井石実測図



第11图 箫次段第18号填石室实测图

で、面としてもあまり凸凹がなく整っている。

この石室は、奥壁床面で標高 261.5 m を測り、石室内は 2 段目の側壁から強い持ち送りがみられ、天井石をのせている。天井石の遺存する部分での床面巾約 1 m に対し、天井石に接する最上位の側壁間は、約 60 cm で、持ち送りによって約 40 cm の差を生み出している。

閉塞石に該当する砾は、移動した可能性を考慮しても羨道部からは発見されなかった。

掘方は、奥壁部 2 m 40 cm、下端約 2 m で地山まで達しており垂直に近く掘り下げ長方形プランを呈し最前部の側壁にそろように内側に屈曲し、前溝に連なるが、この部分は日常の耕作が及んでいる深さであり前溝の状態は確認できなかった。石室内の掘方は、玄室では平担面を形成するが袖石を境に下降し、最末端では玄室とのレベル差が約 30 cm を測る。袖石は約 10 cm 程掘り窪めるが前の根石は、ほとんど掘方を持たない。

#### 遺物の出土状態

遺物は、石室内 2 ケ所、羨道部 1 ケ所の計 3 ケ所に集中して出土した。西側壁寄り、床面がみられない位置から袖石にかけての間に坏を主体とした土器類が出土した。

東袖石の手前の床石間に鉄鎌が出土し、羨道部には西側壁末端の根石に接して、坏身、坏蓋が重ねられて出土した。

#### 出土遺物

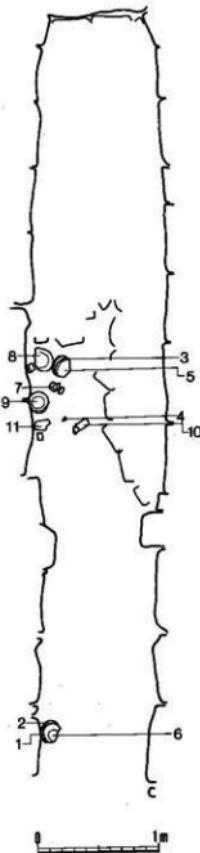
出土した遺物は須恵器 7 点（坏蓋 4・坏身 2・塊 1）、土師器 5 点（盤 4・坏 1）と両者の破片若干のほかに、鐵鎌と思われる鐵器細片が出土した。また、出土した土器類についても器種も限定される。玉類の副葬のないことや鉄製武器の貧弱な様相を指摘できよう。

#### 須恵器

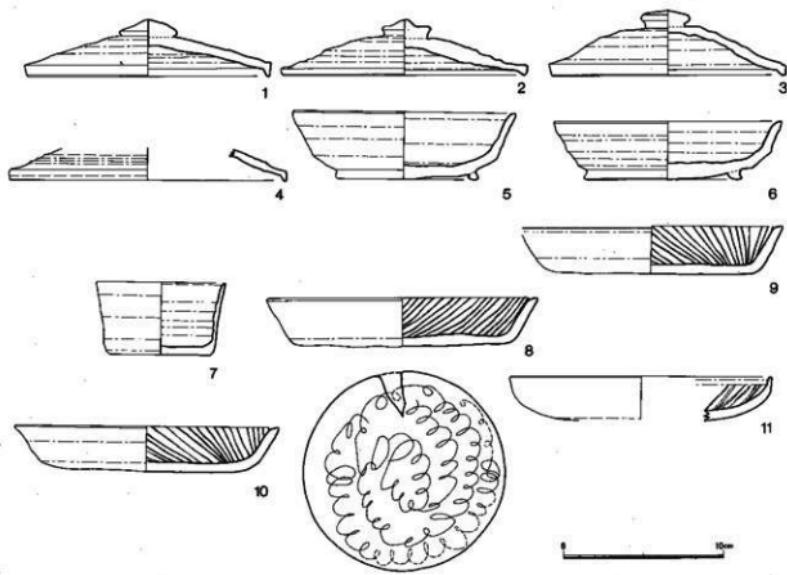
坏身はいずれも第Ⅲ類で、高台脇がゆるやかに丸味をもつ。高台の造りも粗雑な印象を受ける。坏蓋は、やや変形した擬宝珠状のつまみをもち、天井部もゆるやかなふくらみをもって口端部へつづく。塊は平底の底部をもつ小形の製品である。

#### 土師器

盤は底部の形態から 2 種類に細分できる。a 類は平底で、鋭く屈曲するもので、b 類は底部と体部の境界が不明瞭な丸底のものである。いずれも内面の調整は放射状暗文で、No. 9 のみが身込み部分に螺旋状暗文を施す。



第12図  
笛吹段第18号墳遺物配置図



第13図 笛吹段第18号墳遺物実測図

第3表 笛吹段第18号墳出土土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
杯蓋	1	口径 15.5 器高 3.5	偏平でひしゃけた擬宝珠状つまみをもつ。天井部は偏平で口端部へづく。口端部はつまみ出して丸くおさめる。	天井部上位ヘラケズリ。他は横ナデ。自然釉かかる。	胎土 良好・密 焼成 やや堅 色調 灰白色	
杯蓋	2	口径 15.5 器高 3.5	先端の丸いやや中央の突出した擬宝珠状のつまみをもつ。口端部は断面三角形におさめている。	天井部上位ヘラケズリ、天井部内外面横ナデ、天井部内面中央未調整。	胎土 炭化粒子を含む。 焼成 堅緻 色調 墓緻	
杯蓋	3	口径 14.8 器高 4	偏平なボタン状つまみをもつ。天井部はふくらみをもって口端部へづく。口端部は丸くおさめている。	天井部上位、ヘラケズリ調整。他は横ナデ。	胎土 炭化粒子をわずかに含む。 焼成 堅緻 色調 暗灰白色	
杯蓋	4	口径 (17.3)	つまみの形態は不明。口端部をわずかにつまみ出して直立気味にする。	内外面とも横ナデ調整。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 青灰色	%破片
杯身	5	口径 14.0 器高 4.2 高合径 9.9	高台は外側にひろがり端部を丸くおさめている。体部下位で屈曲し、口端部へづく。	高台内中央未調整。他は横ナデ調整。	胎土 炭化粒子をわずかに含む。 焼成 堅緻	

器種	図版No.	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
杯身	6	口径 14.2 器高 3.6 高台径 9.8	高台を外側にわずかにつまみ出して広がる。体部中位で屈曲し口端部へつづく。端部は丸くおさめている。	高台内中央未調整。 高台内外周へラケズり、他は横ナデ。	胎土 炭化粒子をわずかに含む。 焼成 堅板 色調 灰白色	口縁部1/4欠
塊	7	口径 (8.0) 器高 4.1	平底で口縁まで直立気味につづく。	底面へラケズり、他は横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅板 色調 青灰色	1/4残
盤	8	口径 16.3 底径 14.9 器高 3	平底の底部に、直口気味に口端部へつづく。口端部は、内側へナナ目で切る。	内面に放射状暗文を施す。全面に丹塗り。 外表面横ナデ。	胎土 やや不良 焼成 やや堅板 色調 淡赤褐色	
盤	9	口径 17 器高 3	平底の底部で直立気味、外側へ開く。口端部を斜目に面取りする。内面、放射状暗文、見込み、螺旋状暗文。	底部未調整。体部横ナデ。全面丹塗り。	胎土 良好 焼成 やや堅板 色調 淡赤褐色	体部1/4残
盤	10	口径 16.5 底径 15.2 器高 2.8	丸底の底部で、境界が不明瞭である。口端部は丸くおさめている。内面、放射状暗文。			
盤	11	口径 (16.4)	丸底の底部で、境界が不明瞭である。口端部は丸くおさめている。内面、放射状暗文。	内外面とも丹塗り。	胎土 磁を含む。 焼成 やや軟 色調 淡黄褐色	口縁部1/4残

### 笛吹段第19号墳

#### 墳丘と石室

##### 立地

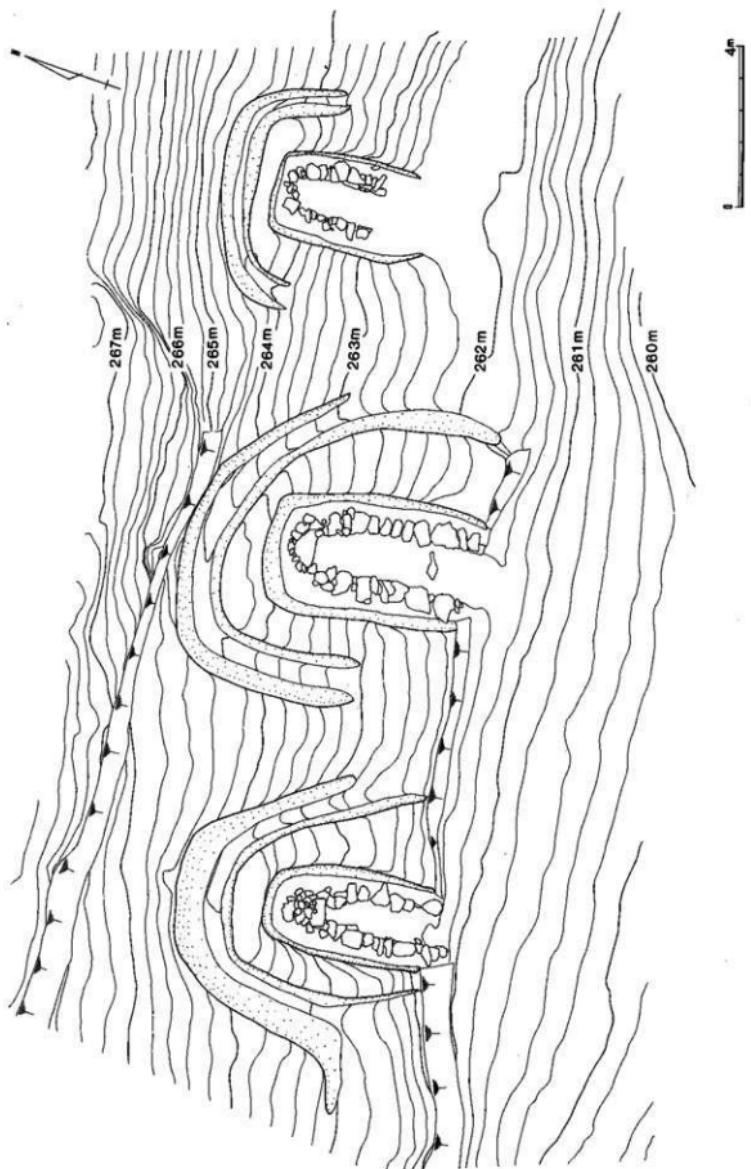
この古墳は、第17号墳から第22号墳の立地する緩傾斜面上に位置する。なお、この付近の等高線の変化をみると、僅かに、第19号墳～第21号墳付近から南に張り出している。また、調査前には、見かけの上で墳丘の存在は認められなかったが、南側にひろがる茶園の断面に石室が露出しており、石室のレベルから墳丘の存在に注意した。

##### 墳丘

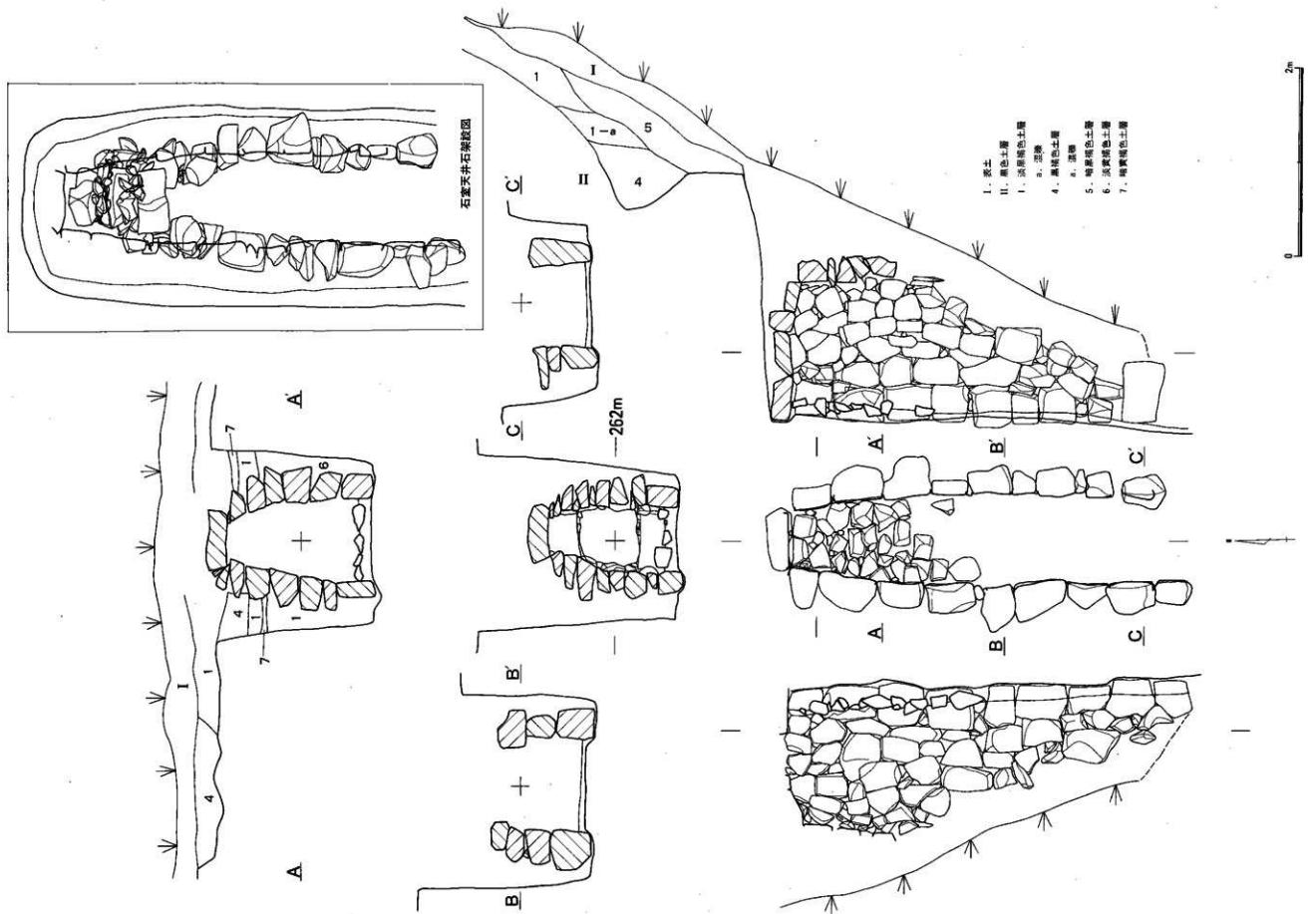
石室の東西、南北方向にあけたトレンチの断面観察により周溝や墳丘の存在を認め、調査をすすめた。この結果、第19号墳の墳丘は 5.7 m × 5.5 m で巾 1.5 m の周溝が巡ることが確認された。なお、周溝は南側の畑地の掘削面までつづき、それより南側は、削られて確認できなかった。

##### 石室

石室は、全長 4.3 m、奥壁の間 0.65 m、石室最大巾 1 m、高さ 1.4 m を測り、石室の形態は、わずかに胴部の張る形態で、持ち送り積みが認められた。閉塞部については、茶園の掘削面のためにすでに消失しており、確認できなかった。この部分を除いて、石室は比較的、原形をとどめていた。天井部は、3 枚が架構された状態で残存していた。尚、天井石は、長さ 0.7 m、巾 0.3 m 前後の面取りされた石材を用い、側壁との間の空間には詰石が用いられていた。奥壁は、ほぼ正方形を呈する石材の面をえ、4 枚、4 段によって組まれていた。側壁については、根石にやや大き目の角板状の面取りされた石材を用い、2 段目から上には 0.4 m × 0.3 m 前後の方形を呈する石材が多く認められた。石室の積み方をみると、右側壁 2 段目が広口積みが多く、それより上位には横口積みがみられ、小口積みも若干みられる。左側壁は、2 段目から横口積みが多く、小形の石材に小口積みがみられた。奥壁、側壁ともに堅牢な築造法がなされ、また、それぞれの面も均一に整えている。



第14図 箕吹段第19~21号墳墳丘図



第16圖 筍次段第19號墳石室實測圖

床面は、30cm～20cmの角砾を用いている。また、奥壁から前方へ、約1.3mまで敷かれている。

#### 出土遺物

奥壁付近から、僅かに刀子1点、土師器坏片が発見されたのみであった。

#### 刀子

基部と刃部の一部が欠損する。残存長7.2cm、巾は刃部1.6cm・茎部1.1cmを測る。



第16図 笛吹段第19号墳遺物実測図

## 笛吹段第20号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

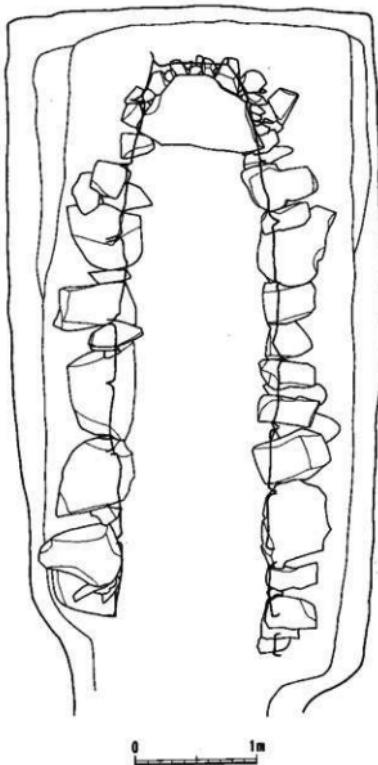
第19～第21号墳付近に僅かに南に張り出した緩傾斜面の中央付近に位置する。また、南側にひろがる茶園により、墳丘の一部はすでに消失している。

#### 墳丘

石室に直交するトレンチと石室の主軸方向に2本のトレンチを入れた。このトレンチの土層観察によって、第20号墳の墳丘と周溝の存在を確認した。この結果、墳丘は6.4m×6.5m、周溝の巾は約1mを測る。墳丘の裾部は、畠地の鋤削によって削りとられ、すでに消失していると判断された。この為、周溝の南側については検出できなかった。

#### 石室

石室は、全長4.8m、奥壁巾0.7m、最大巾1.4m、高さ1.6mを測る。石室の形態は長方形で、奥壁部分で巾が狭くなる。従って、石室中央部で巾広く、僅かに胴張りを呈する。天井石は一枚が架構された状態で発見された。残っていた天井石をみると、半円形を呈する板状の石材を用いている。長さ1m、巾60cmを測る。奥壁は3枚で組まれ、最下段の石材は長さ110cmと最も大きい。側壁は70～40cmの石材を用いているが石室内側に向く面は、根石を含めて、切り石状の方形を呈して安定する石材が少なく多くは詰石を多用して、側壁を形成している。また石材の組み方は根石部分に広口積み、2段目から横口積みが多用されている。上位の積み方では小口積みがほとんどである。全体に乱雑な印象を受ける積み方であるが、各々の石材については、面取りされ、全体



第17図 笛吹段第20号墳天井石実測図

に面が整備され、詰石を使用して安定をはかっている。

床石は奥壁より 2.8 m ~ 2.5 m の間に敷かれており、0.3 m ~ 0.2 m 大の割石が用いられている。床面の敷石はすき間なく敷かれ、重なり合って、かなり凹凸がある。敷石の床面が終る位置から 0.7 m 程手前に長さ 90 cm、巾 30 cm、厚さ 30 cm の角柱状の間仕切り石が設置されていた。この他間仕切り石付近に 30 cm 大の礫が数個認められたが明確に閉塞石とは判断できなかった。

### 出土遺物

#### 遺物の出土状態

遺物は、石室内に 3ヶ所にわかつて出土した。直刀、刀装具類は側壁にそって出土しており、切先部を奥壁にむけていた。また、刀装具と直刀が離れており、2次的に動かされていると判断された。尚、直刀には木装などは遺存しておらず、抜身で副葬された可能性も否定できない。床面に置かれていた土器類は搅乱を受けておらず、最終埋葬の状況を良くとどめていた。また、奥壁から管玉 1点が出土したが、他に装身具類は一物も出土せず、装身具として副葬されたものか、あるいは前埋葬（この古墳の最初の埋葬か）の副葬品を取り片付けたものの残存品であるかの 2つの可能性がある。間仕切石より南側の土器類については、遺物の接合関係により 2次的移動が考えられるが、原位置よりさほど離れていないものと推定される。

出土した遺物は、須恵器 14点以上（坏蓋 8・不明器種蓋 1・坏身 3・短頭壺 1・無蓋高坏 1・器種不明破片 1括）、土師器 5点以上（坏 3・盤 1・壺 1・破片 1括）、直刀 1振（刀装具を含む）、管玉 1点であった。調査された笛吹段古墳群のうちで、直刀を副葬する唯一の古墳であり、副葬品のバラエティも豊かであった。

#### 須恵器

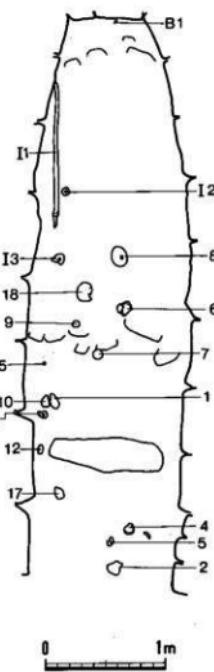
坏蓋はいずれも第 II 類であるが、口径やつまみの形態に若干の違いが認められるので、第 II 類 a、第 II 類 b と細別する。第 II 類 a は最大径 10.7 cm と小さく、内面のかえりもやや高く明瞭である。つまみの形態もボタン状を呈する。第 II 類 b は最大径 13.2 cm ~ 12.2 cm を測り、先の第 II 類 a より小まわり大きい。また内面のかえりも低くひしゃけている。つまみの形態は、ボタン状を呈するものと擬宝珠状を呈するものの両者がある。坏身は底部の形態が平底に近く明瞭なもので、No.10・11が第 II 類 b とセットになると判断される。短頭壺は胴部上位に最大径が求められる器形で頸部も低くなった新しいタイプのものである。No.9 の蓋は坏蓋とは考えられず、坏以外の器種の蓋（小型壺か）の蓋ではないかと推定される。このほか、図化できなかった細片では細頸瓶、無蓋高坏がある。

#### 土師器

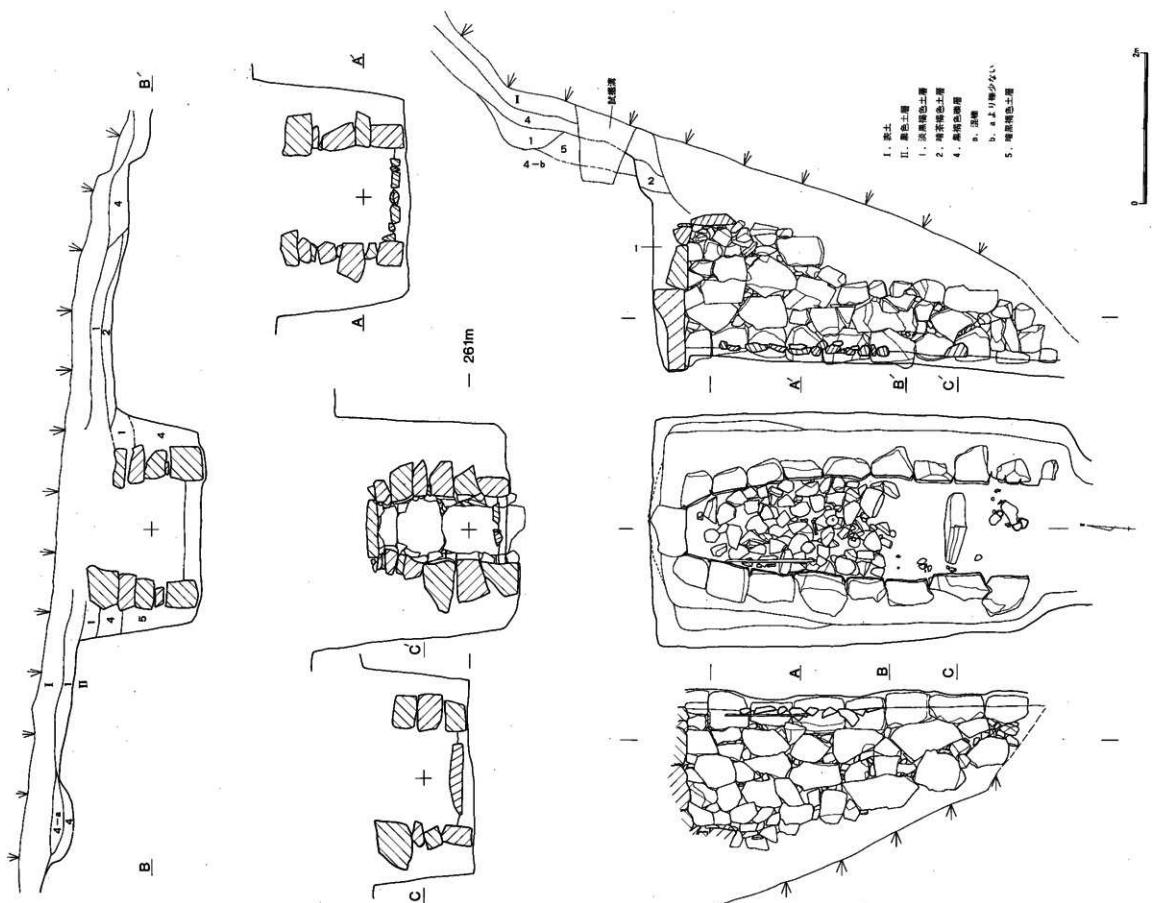
壺の内面には、狭い螺旋状暗文を境に二段の放射状暗文が施文されている。盤は口径 24 cm を測る大形製品である。壺は、体部中位でわずかに屈曲し、口端部で外反するものと、底部より丸味をもって口端部へつくものの二種類がある。

#### 直刀および刀装具

両開平造の直刀が 1点出土している。全長 116.2 cm、茎部長 17.9 cm、



第18図  
笛吹段第20号墳遺物配置図

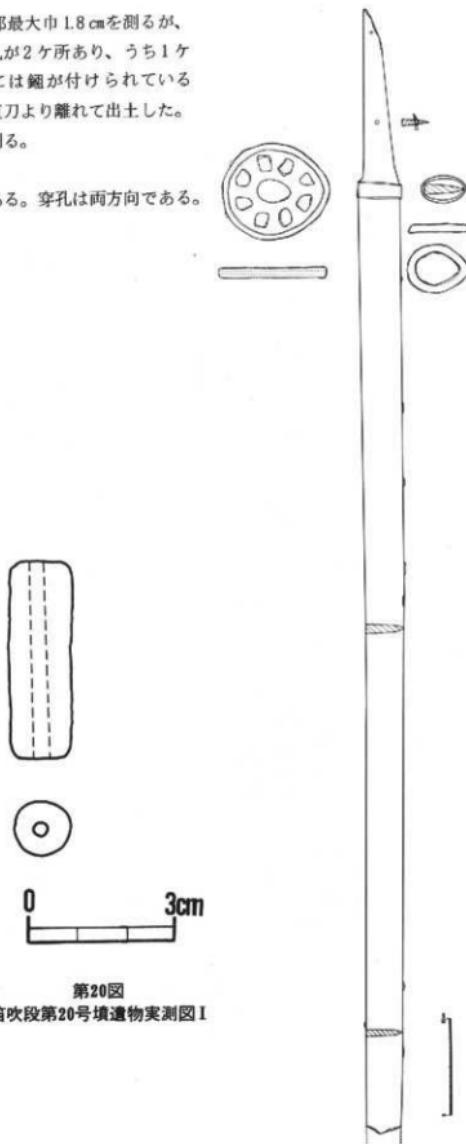


第19図 第一 shaft 第20号填石室実測図

刀身部長 98.3 cm、刀身部巾 3.8 cm、茎部最大巾 1.8 cmを測るが、刃部の先端を欠いている。茎部には目釘孔が2ヶ所あり、うち1ヶ所には目釘が残存している。また、刀身には鈴が付けられているが、鈴や切刃（6.2 cm × 5 cm）は、この直刀より離れて出土した。鈴は11 cm × 9.9 cmの倒卵形で厚さ1 cmを測る。

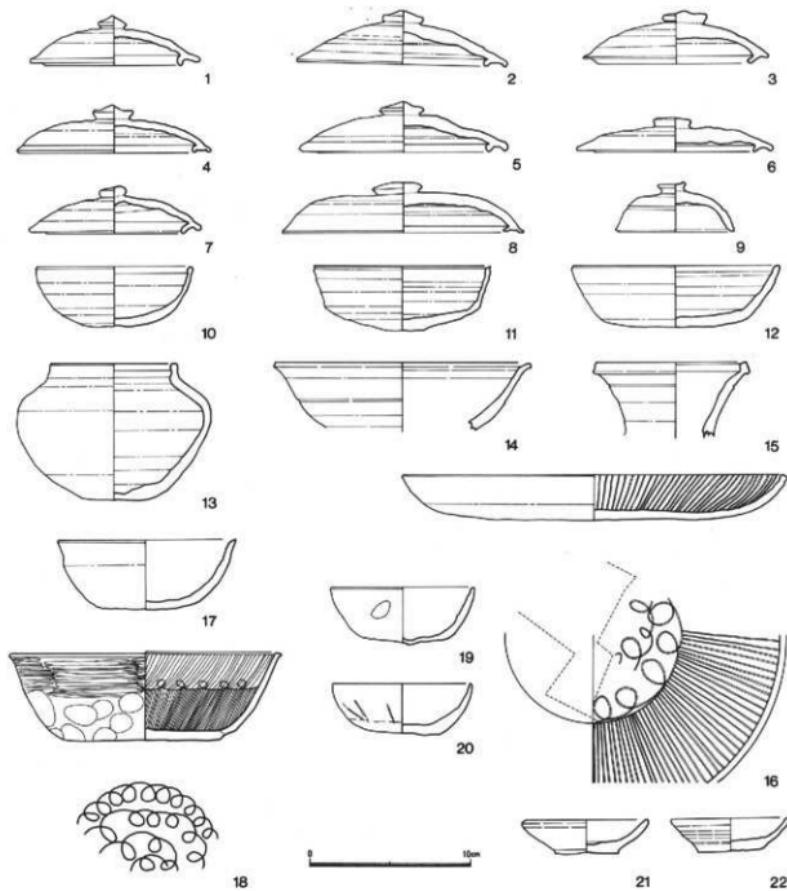
### 管 玉

長さ4.1 cm・径1.2 cmを測る碧玉製である。穿孔は両方向である。



第20図  
笛吹段第20号墳遺物実測図I

第21図  
笛吹段第20号墳遺物実測図II



第22図 箫吹段第20号墳遺物実測図Ⅲ

第4表 笛吹段第20号墳出土土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏蓋	1	口径 8.6 最大径 10.6 器高 3.1	先端の尖った擬宝珠状のつまみをもち、天井部はふくらみをもって口端部へつづく。	内外面ともに横ナデ調整。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 灰白色	
坏蓋	2	口径 10.2 最大径 13.2 器高 3.3	偏平な擬宝珠をもつ。天井部はやや丸味をもって端部へつづく。	天井部上位はヘラケズリ、天井部外面から内面は横ナデ。	胎土 良好・密・炭化粒子を含む。 焼成 堅緻 色調 灰白色	体部%残
坏蓋	3	口径 9.55 最大径 11.6 器高 3.3	先端のやや尖った擬宝珠状のつまみをもつ。ややふくらんだ天井部をもち、口端部へつづく。	天井部上位に自然軸がかかり調整不明。中位から内面は横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 灰白色	
坏蓋	4	口径 10.1 最大径 12.2 器高 3.05	先端の尖った擬宝珠状つまみをもつ。天井部はややふくらむ。	天井部内外面、横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 灰白色	
坏蓋	5	口径 10.6 最大径 13 器高 3.2	天井部のつまみは、中央部がわずかに突出する。天井部から口端部にはわずかにふくらみをもってつづく。内面のかえりは、端部をまるくおさめている。	天井部外面は自然軸がかかり調整は判別できない。内面は横ナデ。	胎土 良好・砂粒を含む。 焼成 堅緻 色調 灰白色	
坏蓋	6	口径 9.8 最大径 12.2 器高 2.1	ボタン状のつまみ。偏平な天井部で口端部へつづく。	自然軸がかかり調整不明。内面横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗灰色	
坏蓋	7	口径 8.5 最大径 10.7 器高 2.9	ボタン状のつまみをもつ。天井部がややふくらみ、口端部へつづく。	外面は天井部に自然軸がかかり調整不明。内面横ナデ調整。	胎土 少量の砂粒を含む・良好 焼成 堅緻 色調 暗灰白色	
坏蓋	8	口径 12.6 最大径 15.1 器高 3.1	偏平なボタン状をもつ。天井部は偏平で丸味をもつ。	天井部上位ヘラケズリ。天井部下位より内面、横ナデ。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 暗灰白色	
蓋	9	口径 7.4 器高 3.1	中央の凹むボタン状つまみをもつ。体部中位に凹線を巡らす。	体部内外面、横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗灰色	
坏身	10	口径 9.8 器高 3.7	底部は丸底で、丸味をもって口端部へつづく。	底部中央部は未調整。底部の脇、ヘラケズリ。体部は内外面とともに横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗灰色	

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏身	11	口径(11) 器高(4)	平底気味の底部に直立しながら、口端部へつづく。	底部はヘラ切り未調整。底部の堅、ヘラケズリ。体部内外面横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗青灰色	%残
坏身	12	口径(13.0) 器高(3.8)	平底気味の底部にゆるやかに内湾しながら口端部へつづき。	底部はヘラ切り未調整。体部内	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗青灰色	%残
短頸壺	13	口径 8.05 最大径 13 器高 8.5	やや平底気味の底部で胴部上位に最大径がくる。口頸部は短く直立する。口頸部内面に凹線が巡る。	底部ヘラケズリ。体部横ナデ。	胎土 良好 焼成 軟質 色調 明灰色	
無蓋坏	14	口径(15.8)	大きく外反する器形で、土木部中位に沈線をもつ。脚部以下不明。	坏部内外面、横ナデ。	胎土 良好 焼成 やや軟 色調 青灰色	
瓶	15	口径(9.8)	鋭く外反する口頸部で壺部を肥厚する。	内外面とも横ナデ調整。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 灰白色	
盤	16	口径 24 器高 2.8	平底気味の底部で、ゆるやかに屈曲して口端部へつづく。口径に比べ底部が大きい。	口端部横ナデ。内面放射状暗文。見込み螺旋状暗文。	胎土 良好 焼成 やや堅 色調 赤茶色	
坏	17	口径 11.1 器高 4.3	体部上位で屈曲し、外側に開いて口端部へつづく。	体部内外面は指ナデ。口端部横ナデ?。	胎土 やや粗 焼成 軟 色調 赤茶褐色	
瓶	18	口径 16.9 底径 9.6 器高 5.4	平底の底部で丸味をもって口端部へつづく。口端部は外側へわずかにつまみ出している。	底部未調整。外面上位ヘラミガキ調整。下位は未調整指頭圧痕残る。内面は放射状暗文を二段に巡らす。暗文と暗文の境界は螺旋状暗文。見込部螺旋状暗文。	胎土 良好・密 焼成 堅緻 色調 淡赤褐色	
坏	19	口径 9 器高 3.5	やや平底気味でわずかにふくらみをもって口端部へつづく。	体部中位に指頭押圧痕が一部残る。底部は指頭押圧して平坦にする。手づくね技法。	胎土 良好 焼成 軟	
坏	20	口径 8.8 器高 3.2	やや平底気味の底部をもち、丸味をもって口端部へつづく。	底部に粘土塊をはり、体部をつくり出す、手づくね技法でつくられている。	胎土 良好 焼成 やや堅 色調 淡赤褐色	
小皿	21	口径 8.0 底径 3.9 器高 2.0	平底の底部で、外側に大きく開いて口端部へつづく。	底部はまわし糸切り切離しのあと、未調整。体部は内外面とともに横ナデ。	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗青灰	
小皿	22	口径 7.3 底径 4.1 器高 2.0	口端部をやや肥厚させる。	同上	胎土 良好 焼成 堅緻 色調 暗青灰色	

## 笛吹段第21号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

この古墳は、19・20号墳から続く緩傾斜面東端に位置し、19・20号墳の後方に位置する約2m程の高い崖が東に下降する末端部にあたる。この古墳は崖を境に上は23号墳の位置する斜面に連続し、崖の下端はゆるやかな傾斜をもつ平坦面に接し海拔263m～266m付近に位置する。

周辺には、20号墳の墳端と推定される位置に、海拔255m付近から本墳の西側壁部にかけて石垣が組まれ、この石垣を境に平坦面のコンターが東に変化し谷に移行する。

#### 墳丘

石垣と崖により本墳は、古墳の所在すらも推定困難な地形であったが、試掘により古墳の存在が確認されており、崖の掘削面にそってトレンチを入れた結果、側壁を検出したものである。後世の人為的な地形変化にとらわれることなく、旧地形を推定するとこの古墳は13号墳を除く全ての調査古墳の典型的な立地といえる。

墳丘は崖の造城の影響をうけない奥壁付近に認められ天井石の上にも約40cmの淡黒褐色を呈する盛土が認められた。墳丘は周溝から約25度の傾斜をもつ地山より、やや傾斜をゆるくして、天井石の上部に至っている。

周溝は奥壁後方で巾0.7m、深さ0.3mを測るが溝という形状ではなく斜面を掘削して一方を平坦にしたような断面を示す。

確認された周溝のプランは両端が開く“コ”の字状を呈し、崖の掘削によって消滅している。周溝は黄褐色礫を含む地山には達せず黒褐色土中に掘り込まれていた。尚、石室検出の際地表下約45cmで灰釉の長頸瓶が出土したが、位置及びレベルからみて石室に伴う遺物ではないと判断した。

#### 石室

第21号墳の横穴式石室は、263m～266m付近の等高線に直交して構築され奥壁床面では海拔263.20mであった。

石室は奥壁付近が良好に残存し、天井石一枚が架設され、東側壁は約1.5mの間で天井石の高さまで遺存している状況であった。石室の現在値は全長2.3m、奥壁部巾0.8m、最大巾0.88mであり、石室形態は長方形を呈し、前側は、崖の掘削により消失する。

奥壁は5段、三列に積んで構築されており高さ1.5mに達する。中央列の5段は、両側壁の根石よりやや大きい40cm～50cm、ほぼ方形の角礫を広口面を内側に積まれており下段より中段に大型の石材を用いその面が特に前に張り出している。

中央列の左右はそれぞれ7～8段の礫を積みあげているが、側壁の礫より小型で20cm前後の礫を用い下部はやや方形に近い礫を用いるが、上部は不定形で小型化する。

奥壁全体のつくりは、面を整えるより、小型の石材を用いて、奥壁部の巾を確保することを主とした構築がなされたと推定される状況であった。

側壁は全体に遺存状態が良好であり、特に東壁においては奥壁より1.5mにわたって、天井石が架設され、高さは1.5mまで残り、奥壁付近では、弱い持ち送りがみられた。この21号墳の側壁は、小型の石材が多用され他の古墳にはみられない特徴となっている。

東側壁は根石に30～50cmの三角形、方形等をした不定形の石材を用い奥壁側にやや大型の根石を置く。高位置に置く石材程小型化し2段目に30cm前後、中間は20～30cm、最上段は20cm前後の規格の石材を用

いる。

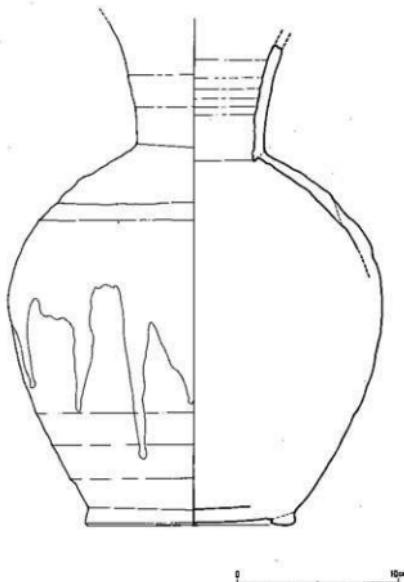
構築法をみると根石を広口に、2段目は横口にそれ以上は、ほとんどが小口面をみせて積み重ねる。全体に、石材は小型であるが位置に相応して規格をそろえている。

床石は奥壁から5cm離れて敷かれ、80cmの位置で終る。多少の凸凹はあるが隙間なく敷かれ礫が相互に接する状態であった。奥壁及び側壁付近に小型で20cm前後の礫を用い、中央部には30cm程の規格の礫を置いている。残存する礫床は、比較的整った面を呈する。

掘方は、奥壁部において、黄褐色地山層に達しており現地表より、2.5mを測る。掘方の形態は、根石にそって巾2mの長方形に掘り込まれ、奥壁付近は良好に遺存していたが、石室の石材の消失に伴い、掘方の下部まで擾乱が及び、前側の状況はまったく把握できなかった。この石室は後側を掘削し、前側を土盛りして根石を置き、先述した17号墳のように旧地表と推定される面にそのまま根石を置く築造方法はとっていない。根石の下部をみると、ほぼ水平線上に並び、從て床面も下降するという現象はあらわれない。この地点は急斜面から緩斜面に変化する現象が最も端過にあらわれている地点であり、他の古墳より容易に築造されたことが推定される。

#### 出土遺物

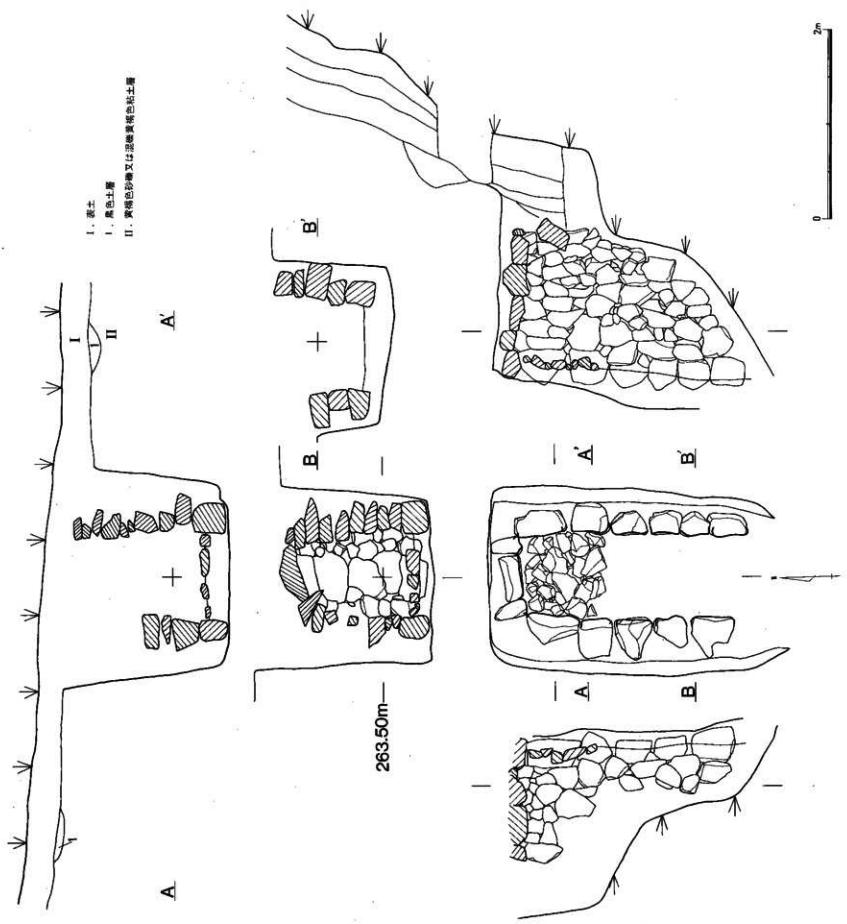
石室内からは、遺物は発見されなかった。しかしながら、閉塞石が残存していないことをのぞいて、擾乱を受けた状況は認められず、当初より、石室には副葬品はなかつたか、あるいは、極めて少ないものと推定された。なお、石室前方の排土中より、須恵器壺蓋片が採集された。その特徴からすれば、第Ⅲ類に分類される。このほか、墳丘部からは、須恵器長頸壺が発見された。この長頸壺は、口頸部の一部を破壊するほか、ほぼ完形である。口頸部から肩部にかけて自然釉がみられる。8世紀の中頃から後半と考えられる。直接、古墳の埋葬時期を表わす資料であるかは、判断できなかつた。



第23図 笛吹段第21号墳遺物実測図

第5表 笛吹段第21号墳出土土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
長頸壺		胴径 23.3 高台径 13.2 残存高 29.7	楕円形の胴部に外側に開く。高台は低くふんばっている。	胴部は三段で接合、さらに口頸部を接合する。胴部に自然釉がかかる。胴部下位ヘラケズリ調整。底部未調整。	胎土 密・わずかに小礫を含む。 焼成 聖級 色調 灰白色	



第24図 篠次段第21号填石室実測図

## 笛吹段第22号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

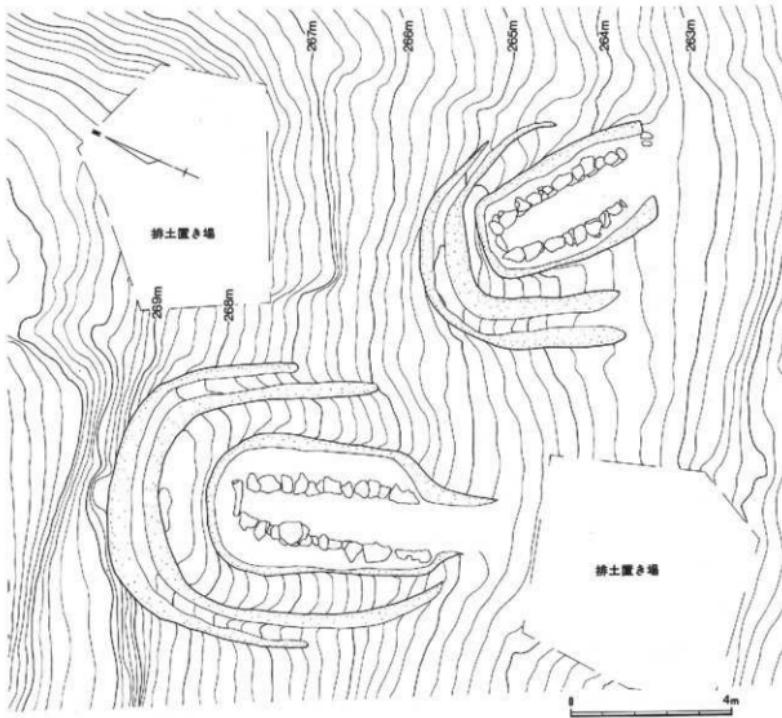
調査した古墳のなかでは、最も東に位置し等高線が東西から北東に向きを変える地点にあり、傾斜交換点に立地する。この付近では等高線が僅かに乱れる程度の変化を示し、小支谷にむかって石室の長軸をとっている。調査対象区域では、墳丘裾部の一部は未調査区域に入っている。

#### 墳丘

石室を中心として2本のトレンチを掘り下げ、墳丘、周溝を確認した。この所見に基づいて、墳丘を復元すると、 $6\text{m} \times 5\text{m}$ の長楕円形で、北側では、黄褐色礫層を掘り込んで、周溝を掘削している。また、周溝は、墳丘を半周し、それより南側では消失し、自然地形と区別できない。

#### 石室

石室は現存値で全長 $3.73\text{m}$ 、奥壁部巾 $0.75\text{m}$ 、最大巾 $1.05\text{m}$ を測り、長方形を呈する。石材の積み



第25図 笛吹段第22・23号墳墳丘図

方は、持ち送りのみられる横穴式石室で、無袖型とおもわれる。茶園開墾時に天井石が抜きとられてはいるが、遺存状態は良好で、側壁は1.3mの高さまで残されていた。

奥壁は板状の石材を3段に積み上げ、側壁は根石が比較的大きく方形状に面取りした石材を用い2段目からは、30cm～40cmの石材が使われている。いずれも、割石であり、全体に整った面をとっている。下段には横口積みが多く認められるが、上段では小口積みが多い。石組は全体に堅牢な造りとなっている。閉塞石は根石が残っていた。奥壁より、1.8m～2.8mの範囲に置かれ、床石に接して長さ82cm、巾36cmの細長い角柱状の石材を置き、手前には30cm～50cmの礫が置かれている。これらの上にも石が検出されたがいずれも閉塞施設とは認められなかった。床石は奥壁より1.8mの間に、30cm前後の角礫を用い、全面に隙間なく敷かれている。比較的凹凸が少ない床面を形成している。

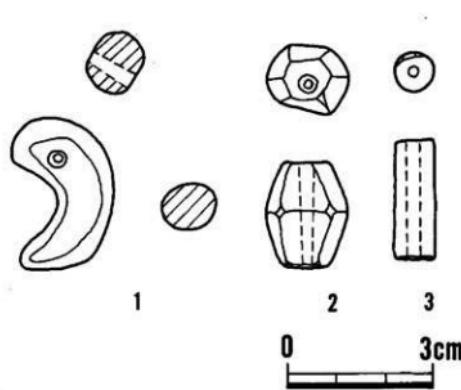
#### 出土遺物

##### 遺物の出土状態

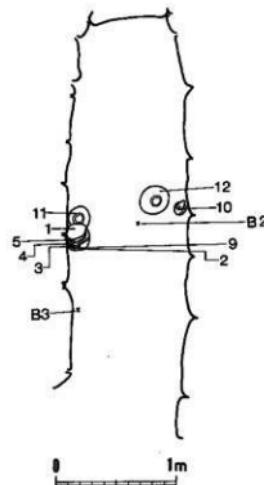
遺物は床面の終る両側壁に2群にわかれて供献されていた。左側壁にそった土器群は、鉢に6枚の坏蓋、坏身が重ねられていた。また、装身具のうち切子玉は、短頸壺の口縁部片の中に置かれた状態で発見された。また、閉塞石の根石をはずしたところ勾玉、管玉それぞれ1個が出土した。これらのことにより、第22号墳の遺物出土状態は、最終埋葬の状況を良く残しているものと判断された。従って、前埋葬の副葬品を石室外へ一部かき出して整理しているものと判断される。

#### 出土遺物

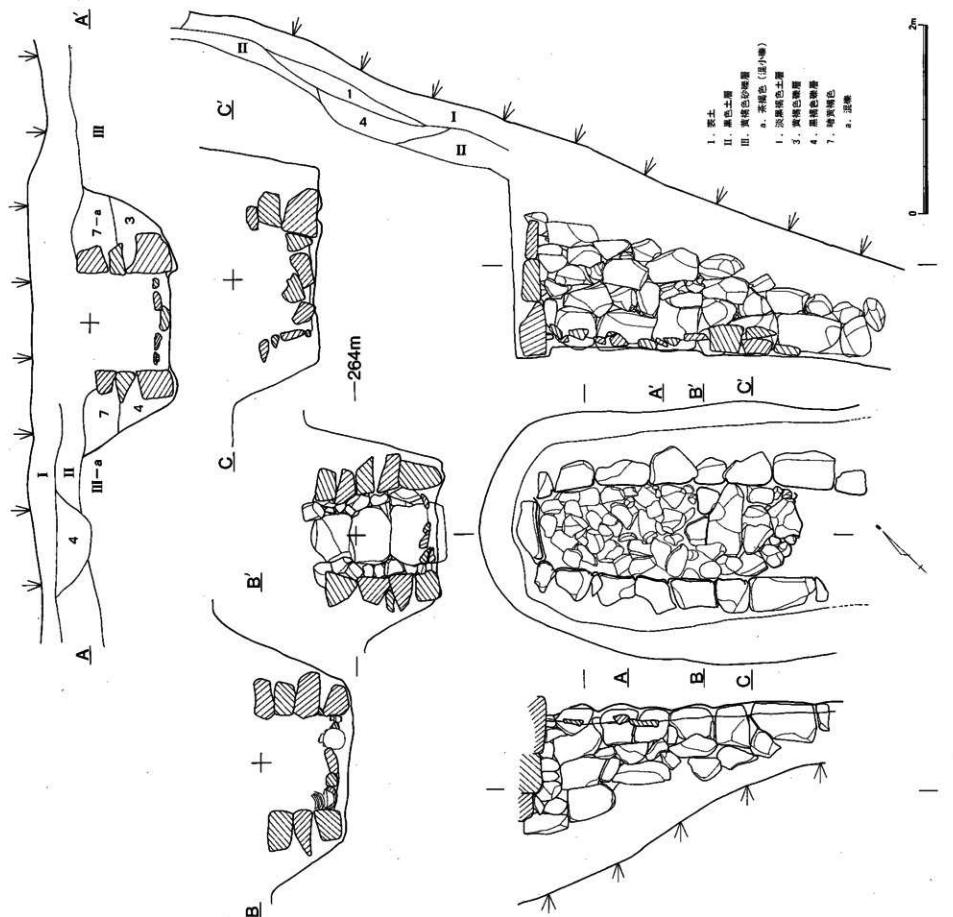
出土した遺物は須恵器12（环蓋4・坏身1・鉢1・短頸壺2・長頸壺1・提瓶1・扇1）、玉類3（勾玉1・切子玉1・管玉1）のほか鐵錠と思われる鉄製品の小破片が認められた。



第26図 笛吹段第22号墳遺物実測図



第27図 笛吹段第22号墳遺物配置図



第28图 笛吹段第21号填石室实测图

## 須恵器

坏蓋はいずれもつまみをもち、内面のかえりの消失した第Ⅲ類である。しかしながら、これらの坏蓋は、つまみの形態により、A擬宝珠を呈するもの、Bボタン状を呈するもの、Cつまみの中央部の凹むものに細別される。鉢は、それ以前にはない形態を呈し、金属器（仏器）を模倣した形態である。短頸壺は、出土状態により、2時期のものと判断されるが、口頸部の形態に明瞭な差異が認められる。長頸壺は、口縁部を肥厚させ、肩部を鋭く屈曲させる形態であり、新しい器型である。堤瓶は、環状の2つの把手を貼付させているなど古い形態をとどめているが、胴部の調整はカキ目調整ではなく、単に、円板状の粘土で塞いだあとに、叩いているなどの新しい特徴をもっている。罐は、注口部を突出させ、高台をもつなど、東海地方に多い器型であり、時期的にも限定される資料である。

## 玉類

No.1は長さ3.1cm、径1.2cmを測る瑪瑙の勾玉で黄褐色を呈する。穿孔は片側からうがっている。No.2は長さ4.0cm、径1.1cmを測る碧玉製の管玉で濃緑色を呈する。穿孔は、側からうがっている。No.3は長さ2.2cm、径1.8cmを測る水晶製切子玉で、穿孔は片側からうがっている。

## 笛吹段第23号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

この古墳は、今回調査した古墳の中で最も高い位置にあり、標高266m～270m付近に立地する。等高線が東西に走る南向き斜面の21、22号墳とは一番高い位置にある。背後に石垣が組まれてはいるが本墳の石室は約266m付近にあり、又、24号墳石室は265mに構築されることから、この二基は、他の古墳より一段高い位置に構築されている。21、22号墳とともに約11mの間隔を持っている。

#### 墳丘

この古墳の斜面は他の古墳と比較して、かなり急斜面であったが、僅かに、石室前側にあたる微地形が前に張り出し、等高線の乱れが認められた。

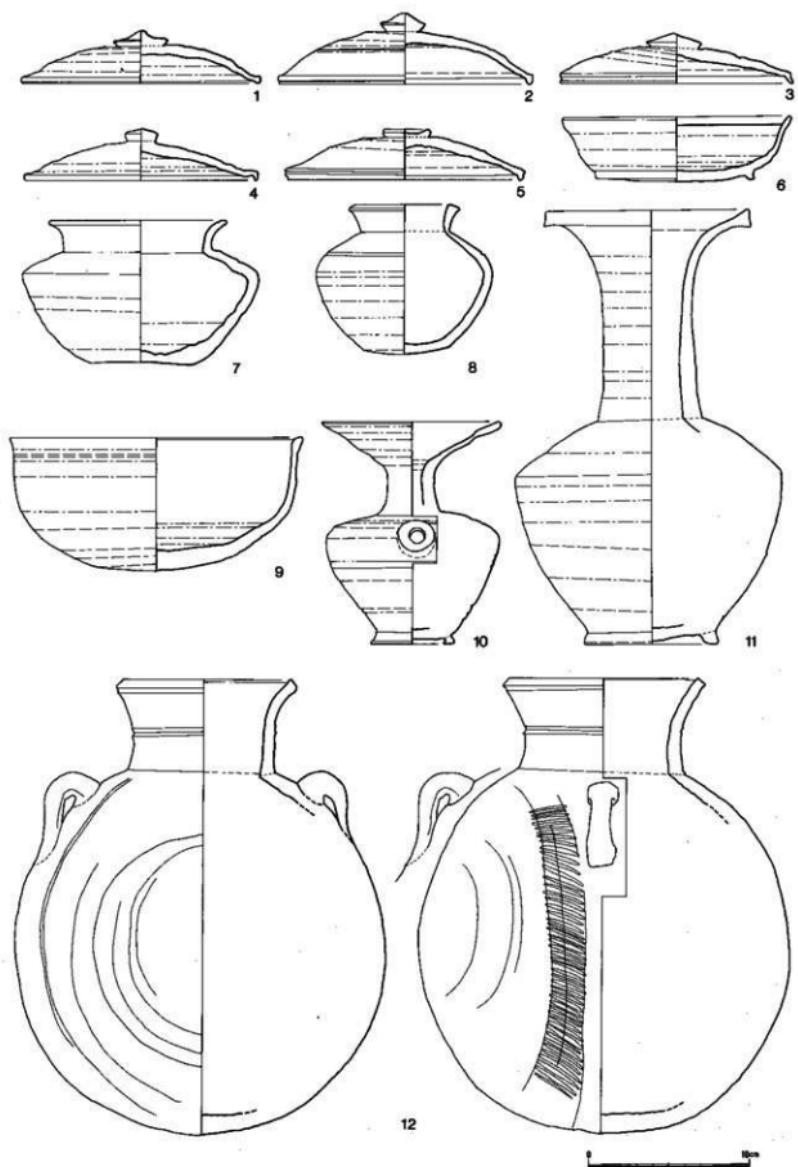
石室の東西、南北方向に設定したトレチの土層観察の結果、西側において、周溝内に墳丘から流入した地山礫と、淡黒褐色土の堆積が認められた。又、墳丘も遺存状況は良好であり石室構築後、黒色土の上に地山礫を主体とする盛土が認められた。なお、石室解体後の墳丘の断面では、石室中央付近から前側では旧表土上に黒色土と地山礫の互層が認められ、前側に盛土をし、石室を構築したと判断される堆積が認められた。

墳丘は、開塁により前側が消失するが7.7m×6m程の楕円形状を呈し、周溝は、西では巾1.5m、深さ0.35m、東では巾1.2m、深さ0.15m北で1.2m、深さ0.6mの計測値を示す。墳丘に限ってみれば調査古墳中最も遺存状態が良好であった。

#### 石室

石室は斜面に直交して構築され、全長4.8m、奥壁巾0.72m、最大巾1.24mを測り、やや胴の張る無袖式の形態であった。石材は斜面にそって抜き取られ前側は根石のみ残存していた。

奥壁は3段70cm×50cm厚20～30cm板状の石材と面を整えて積む。側壁は根石に0.5m前、隅丸方形の礫を小口に積む。東側壁は奥壁より3個目に35cm程の礫を用い、その上段にも同程度のものを積む、全体にこの部分を除き、ほぼ同一の礫を用いる。西側壁は残存する石室中央より前側は根石を残し、ほとんどが抜き取られているが、残存する側壁は根石を除き西側壁と比較すると極端に小さ



第29図 笛吹段第22号墳遺物実測図II

第6表 箕吹段第22号墳出土土器觀察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
坏蓋	1	口径 15.0 器高 3.3	やや小さく尖出した 擬宝珠状つまみで、 天井部はゆるやかな 張りをもって口端部 へつづく。	天井部上位、ヘラケ ズリ。天井部下位か ら蓋内面にかけて横 ナデ。	胎土 良好・砂粒を 少し含む。 焼成 やや堅 色調 灰白色	
坏蓋	2	口径 15.9 器高 4.4	擬宝珠状のつまみを もち、天井部がふく らみをもって口端部 へつづく。	天井部上位へラケズ リ。天井部内外面、 横ナデ。口端部はわ ずかに内側へおり曲 げる。	胎土 良好 焼成 やや堅 色調 灰白色	
坏蓋	3	口径 14.8 器高 3.1	22-1と同じ		胎土 粒子を含む。 焼成 やや堅 色調 暗青灰色及び 暗灰白色	
坏蓋	4	口径 14.7 器高 3.2	ボタン状のつまみを 有し、つまみ中央部 がゆるやかに尖出す る。口端部は、直立 気味におり返してい る。	天井部上位、ヘラケ ズリ。天井部下位か ら蓋内面にかけて横 ナデ。	胎土 良好 焼成 やや堅 色調 灰白色	
坏蓋	5	口径 15.0 器高 3.1	つまみ中央部が、凹 む形態で、天井部に ゆるやかな張りをも つ。口端部上位に浅 く、沈線状に段をも ち、内溝がある。	天井部上位、ヘラケ ズリ。天井部下位か ら、蓋内面にかけて 横ナデ。	胎土 粒子を含む。 焼成 堅 色調 青灰色	
坏身	6	口径 14.35 器高 4.0	口端部より高台にか けてゆるやかに屈曲 し、やや外開きの高 台をもつ。	高台内に、ヘラケズ リ。高台脇から、体 部内外面ともに横ナ デ。	胎土 粒子・砂粒を 含む。良好。 焼成 やや堅 色調 灰白色	
短頸壙	7	口径 14.7 器高 8.9	球形の頸部をもち、 短く直立する口頸部 をもつ。底部は丸 味をもち、やや尖っ ている。肩部に沈線 がつく。	頸部中位から、底部 がヘラケズリ。体部 と口頸部の内外面と もに横ナデ。	胎土 良好 焼成 硬 色調 灰白色	
短頸壙	8	口径 11.0 器高 9.3	肩部のやや張った形 態でゆるやかに外反 する口頸部をもつ。 底部は、平底である。	底部は、ヘラケズリ。 体部・口頸部は、内 外面とも横ナデ。口 頸部内面と頸部上位 外面に自然軸がかかる。	胎土 粒子を多く含 む。 焼成 堅 色調 青灰色。底部 灰白色	
鉢	9	口径 18.3 器高 8.3	大き目の底部をもち、 体部中位より直立氣 味に曲屈する。口端 部は、やや厚くつくれ られ、外側に開く。	口端部から、体部内 外面ともに横ナデ。 底部から、体部外面 下位は、ヘラケズリ。 底部内面は、未調整。	胎土 粒子・砂粒を 含む。 焼成 やや堅 色調 底部が暗青灰 色。全体は灰白色。	
壺	10	口径 10.9 器高 12.5	ラッパ状に大きく述 べる口頸部に肩部の 張った形態でふん ばった低い高台をも つ。注口部は尖出し ている。	頸部中位以下がヘラ ケズリ。体部・口頸部 から頸部上位の内 外面ともに横ナデ。 高台内は、未調整。	胎土 小石・砂粒を 含む。 焼成 堅 色調 暗青灰色	

器種	図版No.	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
長頸壺	11	口径 16.6 器高 26.9	肩のはった頸部上位に最大径をもち、口頸部の鍋どく外反する器形である。口端部は、やや厚く、直口気味である。合部には、ややふんばった低い高台を付ける。口頸部内面と、肩部に自然釉がかかる。	頸部下位はヘラケズリ。口頸部と頸部と高台の境界付近は、横ナデ。高台内中央部は、未調整。	胎土 粒子を少し含む。 焼成 やや堅 色調 灰白色。下部側面に暗青灰色。	
提瓶	12	口径 23.2 器高 28.2	球形の頸部にゆるやかに外反する口頸部をもつ。口頸部中位に沈線をめぐらす。頸部上位に環状の把手を両側に貼付する。	口頸部は内外面ともに横ナデ。頸部は、三分割して造り、内外面を円板状の粘土で塞ぐ。側面は、叩いており接合部は、横ナデ。円板状の塞面は未調整。	胎土 砂粒を多く含む。 焼成 堅 色調 暗緑灰色。頸部外側、黒色。	

い礫が顯著にみられる。奥壁に接するものは巾15cm～20cm、長さ40cm程度の礫を根石上に5段積むが前側は長さ30cm前後で不整形の礫を多用する。そのほとんどは小口積みであり大型の礫は横口積みされている。東西側壁とともに石材の位置と大きさは不均等と認められる。なお、根石のうち、前側に大型の根石が用いられ、第17号墳とも共通する特徴が認められる。その大きさは、東で長さ86cm、高さ47cm、西で82cm、高さ70cmを測る。

床は、15cm前後の割石が散在し、この礫の状態をもって埋葬時の床面とは認め難い。遺物の出土も僅かであり、盜掘の際攪乱をうけての残存であろうと推定される。

#### 出土遺物

##### 遺物の出土状態

東壁より1.65m、西側壁に接して須恵器壺と若干の破片が周辺から出土したのみであった。

##### 出土遺物

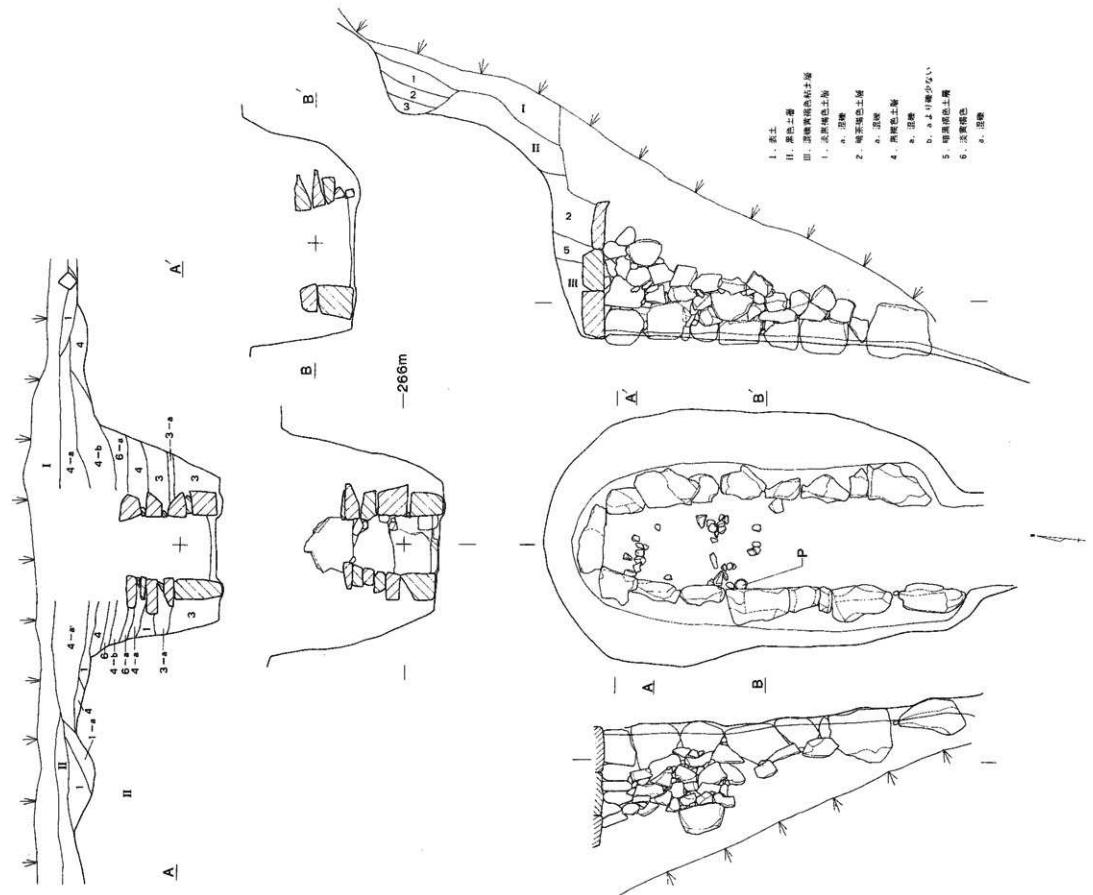
石室内は、敷石に使用されたと思われる小礫が散在するのみで、攪乱された状況であった。発見された遺物は、須恵器壺身と須恵器片が数点、発見されたほか認められなかった。壺身は第Ⅲ類に分類される。



第7表 笛吹段23号墳出土土器観察表

第30図 笛吹段第23号墳遺物実測図

器種	図版No.	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺身	1	口径 14.1 器高 4.0 高台径 10.5	体部下位よりわずかにふくらみながら屈曲する。高台の断面は台形を呈する。	底部中央未調整。底部ヘラケズリ、体部内外面ともに横ナデ調整。	胎土 やや密 焼成 壓致 色調 灰白色	



第31图 首次发掘第23号填石室实测图

## 笛吹段第24号墳

### 墳丘と石室

#### 立地

第23号墳とはほぼ同じ標高に位置し、約265m付近に石室が構築され、他の古墳とは一段と高い位置にある。現地形の観察では墳丘の状態は認められなかったが本古墳の前側が、17、18号墳の位置する北西方向の斜面が、19~21号墳の東西方向斜面に変化する位置にあたり、微地形の等高線をみると、やや前に張り出すのが認められる。墳丘が流出した結果形成された微地形であろう。従って確認トレントでは検出されず、表土除去作業の際、前側の側壁が検出され、発見に至った古墳である。石室の大部分は用地外であり、墳丘を含む、古墳の外部施設については本調査である。下位の18・19号墳より急斜面に立地するが上位の斜面がやや緩む位置に立地する。

#### 墳丘

墳丘は、用地境に設定したトレントの断面観察においても確認されなかった。背後にある崖の構築と、開墾により削平され、墳丘を失ったものと判断される。

#### 石室

石室は斜面に直交して構築され、残存する規模は、全長4.1m、奥壁部巾0.62m、最大巾0.93mのやや胴が張る形態を示し、僅かに持ち送りが認められた。

奥壁は3枚、3段で構築され、70cm×50cm厚さは下段が43cm、中段と上段は20cm程の板状の面取りされた石材を用い内面を整え、詰石もほとんど用いず構築されていた。両側壁は他の古墳と同様に、奥壁側が良好に残り前側は斜面にそって抜き取られていた。東側壁は、奥壁から前側にかけて、次第に大型化する。奥壁に接する石材、37cm×30cmに対し、前より2番目は60cm×50cmと約5倍の差がある。又、2段目に根石の約2倍程もある大型の石材を用いる。この2段目も各々の石材の大きさも整わず約30cm前後の不整形の石材を用い、約40cm前後の石材は横口にそれより小型のものは小口に積む。西側壁は、これと比較すると下段から上にかけて小型化し、整然と積まれている。根石は東側壁と同様の傾向がみられる前的位置に置かれるに従って大型化する。2段目は横口に積み、それ以上は小口面向けている。

床は20cm~30cmの角砾を奥壁から1.8m付近まで敷き他の古墳より平坦な面を形成する。一部に重なる部分もあるが、ほぼ隙間なく配置されている。

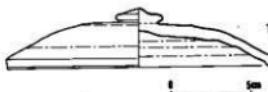
#### 出土遺物

##### 遺物の出土状態

床面よりの遺物は、奥壁より3.5m付近の西壁寄りに須恵器片が出土したのみであり他に床石の末端部東壁に接して須恵器杯蓋が発見されたが礫床に伴うものでなく約0.2m高い覆土中の出土であった。

##### 須恵器

出土した遺物は須恵器2点(杯蓋1・甕片1)であった。杯蓋は擬宝珠状つまみのつく第Ⅲ類Bである。甕は口頸部から胴部に移行する部分の破片であり、小片であるので図上での復元もできなかった。口頸部は無文で、胴部内面の調整は横ナデ調整である。



第32図 笛吹段第24号墳遺物実測図

第9表 笛吹段第24号墳出土土器観察表

器種	図版No	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺蓋	1	口 径 16.4 器 高 3.7	偏平な鼓室球状つまみをもつ。体部はわずかにふくらみをもって口端部へつづく。	天井部丸面中央は末調整、天井部外面ヘラ削り、そのほかは横ナギ調整。	胎 土 やや粗砂粒と含む 焼 成 やや堅 色 調 灰白色	

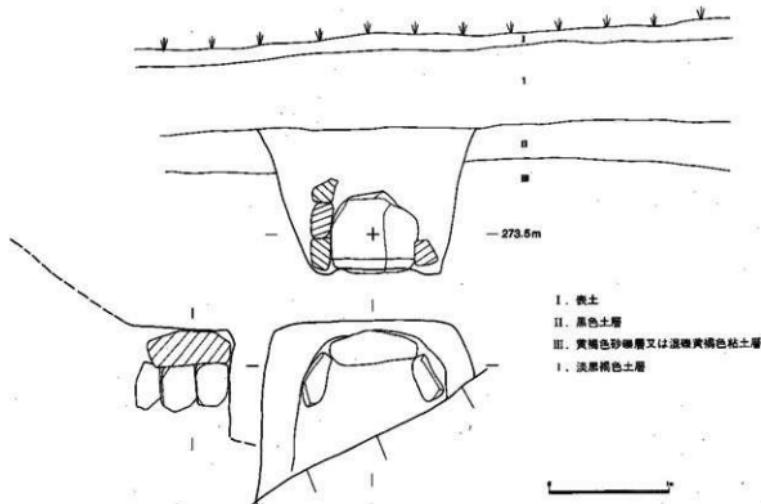
## 笛吹段第25号墳

この古墳は、本調査において発見されたものではなく、調査終了し、道路工事が開始され、路線の法面を掘削する際に発見された。調査を行ったものである。23号墳から北東へ約0.5m、小支谷を形成する南東向きの急斜面上に位置し、石室は275m付近であった。奥壁一枚と、西側壁が僅かに残り前側はすでに削り取られていた。詳細は全く不明であるが、この古墳は、等高線が内湾し、小支谷状の地形に形成されており、他の調査古墳の立地にはみられない特徴を有している点で今後笛吹段古墳群の検討をすすめるにあたり大きな一石を投じたといえるであろう。遺存部の計測値は長さ0.4m、0.68m、高さ0.8mであった。

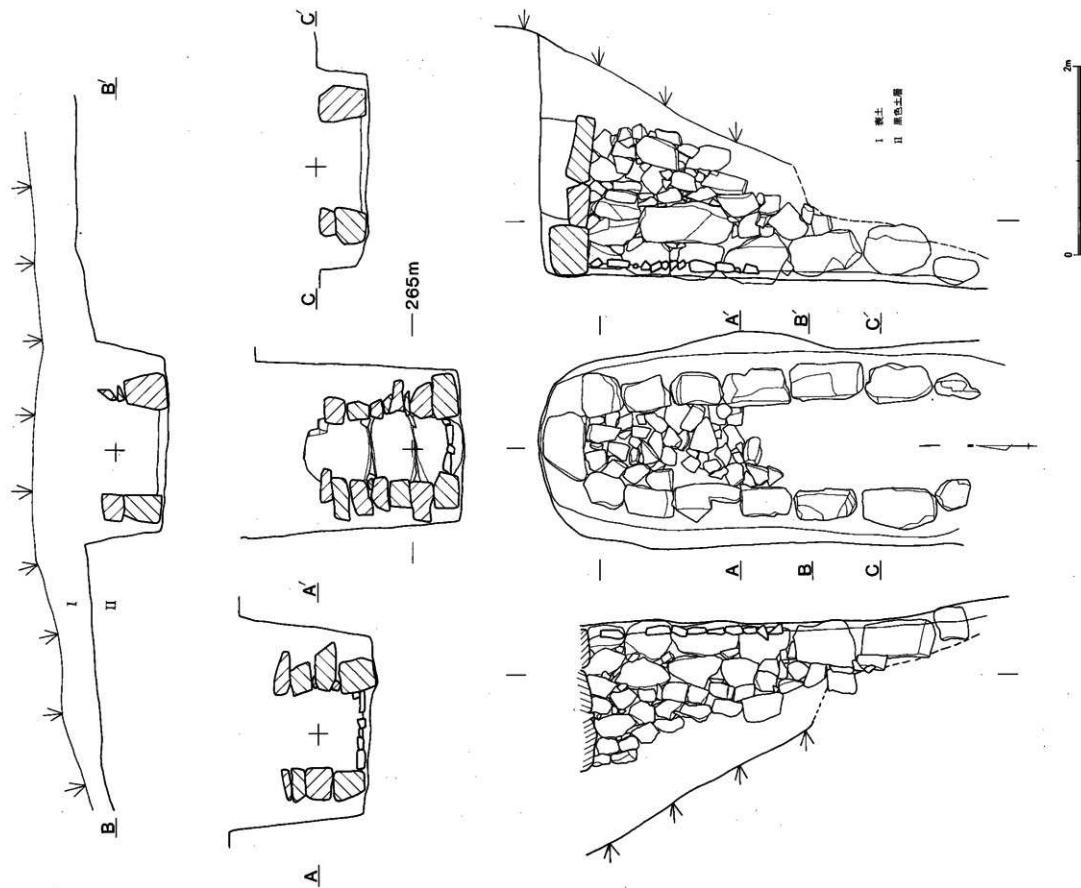
## その他の遺物

## 陶器

いわゆる山茶碗系の小皿が2枚、第20号墳の石室覆土から発見された。口径7.9cm～8.0cm・器高2.1cm～2.0cmを測るもので、やや口端部を肥厚させるなど13世紀前半の製品と判断される。



第33図 笛吹段第25号墳石室実測図



第34図 箕吹段第24号墳石室実測図

## 第 IV 章 兎沢古墳群の調査

兎沢古墳群は、東西方向の高草山の支丘上に立地し、それは西向きの急峻な斜面である。古墳は、現在10号墳までが確認され、標高98m付近から、140mの間に位置する。この周辺は、茶畑、蜜柑園が営まれているが、兎沢古墳群の周辺は、西面する突出した急斜面の尾根上で僅かに、第4号墳の北側斜面に茶畑がみられるのみであり、古墳群全域は雑木林に覆われている。従って高草山周辺の茶園、蜜柑園の造成の対象とならず、兎沢古墳群は、自然の作用の中で現在の姿を残していると言える。この様な背景の中で現在では、この兎沢古墳群は焼津市内はもとより、志太平野に存する古墳群中、個々の石室、墳丘、及び古墳群全体の立地が、地形の中で最も良好に太古の景観を残している古墳群と言えよう。

古墳の分布は、尾根が走る支丘上の緩斜面部分に多くみられ、僅かに、6・7号墳が、南斜面上に位置する。各古墳には墳丘が認められ、又開口する。6、7、8、9号墳をみると、尾根上のものは等高線に平行して石室が構築され、南斜面上の6、7号墳は直交する。従って石室の確認されない尾根上の古墳は、等高線に平行する石室の築造がなされていると推定される。古墳群の分布範囲は、東西約100m、南北約20mである。

今回の調査は、古墳群中で最も分布が粗の範囲に計画を変更した結果行われたものであり、当初、尾根上に緩斜面をもつ張り出しが認められる範囲（第5号墳推定位置）、開口する第6号墳の前部及び第4号墳の計3基の調査が予想されていた。しかし、尾根上と、尾根の南側斜面での確認トレント調査の結果南側斜面では古墳は発見されず、第5号墳推定位置は自然の緩斜面上に、高所から流出した土砂の堆積によって形成された地形であると判断された。従って調査対象古墳は第4号墳1基となった。

第4号墳は、尾根上の確認トレントと、奥壁から北へのトレントを入れ、他に周溝、墳丘確認のサブトレントを設定し、調査を行った。この調査に併行し、兎沢古墳群全体の地形測量及び個々の古墳の立地、墳丘、石室等について観察を行った。以下、第4号墳を除く各古墳について概要を記すこととする。

### 各古墳の概要

#### 第1号墳

標高98m～100m付近に位置し、兎沢古墳群中、最も低い位置にある。3号墳より続く緩斜面の先端に位置し、南は急斜面に移行し、北は緩やかな斜面を持つ。墳丘は明瞭に観察されないが109mの等高線が先端部で内に屈曲するのが認められる。石室の露出はみられず推定される墳丘の規模は東西約7m、南北約7mである。

1号墳～3号墳までは、4号～10号墳の位置する斜面より緩やかな部分に位置する結果であろうが、2号墳を除いて石室の開口や、用材の露出はみられない。

#### 第2号墳

2号墳は、東西約6.9m程と推定される墳丘が認められ、石室の側壁、奥壁の一部と思われる50cm前後の石材が5個「L」字状に並んでいるのが確認された。これから推定すると、南側部分は急斜面に変化するため石室も一部消失した可能性が想定される。従って南北の墳丘規模は推定できなかった。101m、102mの等高線の不自然な張り出しと、用材の存在から古墳と判断した。各々の墳丘の中心と判断した位置からの距離は1号墳とは7m50cm、3号墳とは約12.5mの間隔がある。

#### 第3号墳

この古墳も、1号～2号墳と同様、等高線の不自然な張り出しと、斜面の状態から古墳と判断した。特に104m、105m付近の等高線は不規則な張り出しや、屈曲が認められる。墳丘は、推定値で東西約

6.5m南北7.3mを測る。比較的墳丘の状況を良好に示すと認められる古墳で、4号墳西側の急斜面から緩斜面に移行する位置に構築され、2号墳とは12.5m、4号墳とは11.5mの距離がある。

#### 第6号墳

6、8、9号墳は、標高130m～119m付近まで続く緩斜面に位置し、この6号墳は、尾根上に張り出した緩斜面の先端部、尾根の中央よりやや下った南向き斜面の、等高線に直交して、118m付近に横穴式石室が構築されている。開口する石室の現状での計測値は長さ4.7m、巾1.4m、高さ1.3m、側壁は5、6段が残り、墳丘は東西約7m、南北約6.5mと思われる。4号墳とは約19m、8号墳とは約11mの距離がある。この古墳と同様な立地を示す古墳は他に8号墳があり、ほぼ同様な傾斜と標高で、約20m南東方向に位置する。

#### 第7号墳

8号墳下の南斜面上標高118m付近に横穴式石室が構築され、それは、6号墳と同様等高線に直交する。石室の後側部分の遺存状況は良好であり奥壁から天井石3枚分、2.5mにわたって土に覆われていた。後方斜面の北から北東側に古墳築造の際の掘削により生じた斜面が認められ、奥壁から北へ約2.5mの位置であった。前部は、急斜面に移行する位置にあるため石室の崩壊は著しく、かなりの部分が消失したと推定され、石室の用材が、原位置の痕跡もとどめず散乱する状況であった。現状での計測値は、全長7m、巾1.7m、天井の高さ2m、側壁は6段が確認され、墳丘は、東西9m、南北は10m前後であると推定される。

この7号墳の石室は4号墳と並び、兎沢古墳群中でも最も大型の石室をもつ古墳であると判断される。

#### 第8号墳

6号墳の東、尾根の張り出し部のやや平坦面を横断して横穴式石室が構築され、ほぼ全体が露出している。天井石一枚が架構されており、現在、尾根上の小路が通っている。前部と推定される部分にも崩れた石室の用材が散乱するが、ほぼ石室の規模、構造等検討する上で、最も良好な古墳である。各々の計測値を示すと、石室長さ6.5m、巾1.25m、高さ1.4m、側壁は6段程度残存するのが認められた。墳丘は推定値で東西9m、南北10mであり、南南東方向約12mに7号墳、6号墳とは約11mの距離を置く。標高122m付近に位置する。

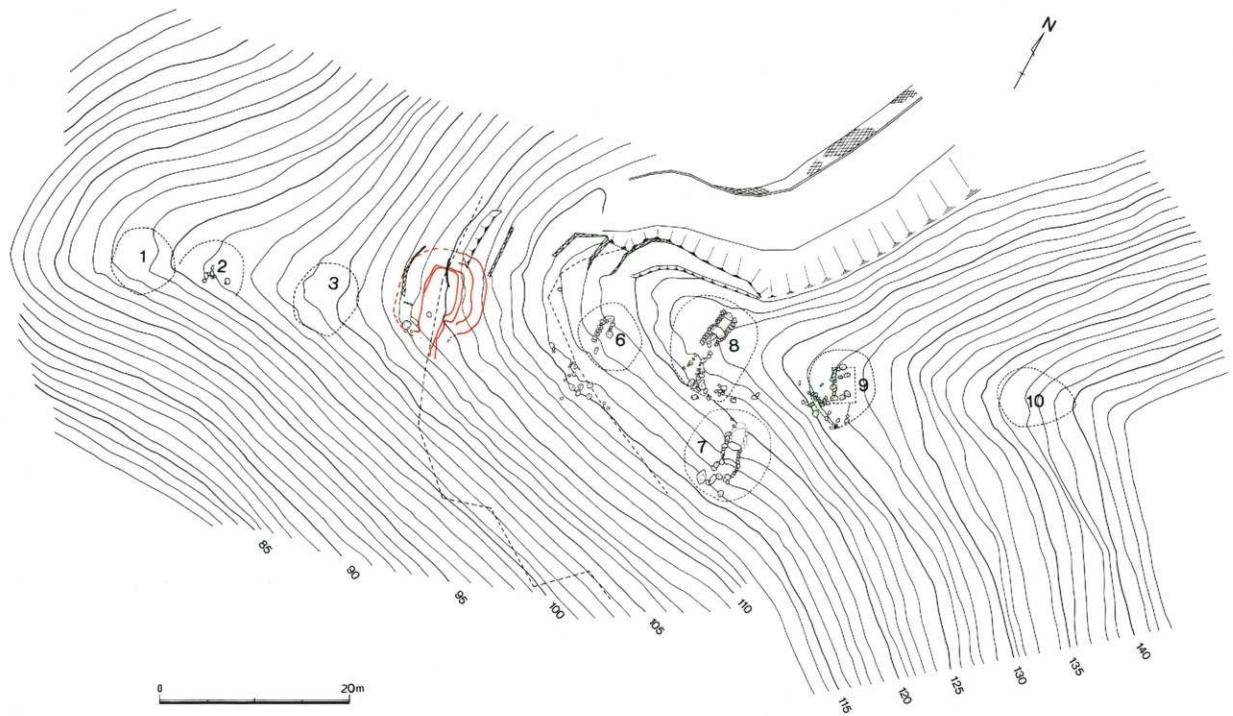
#### 第9号墳

9号墳は、奥壁に猪の線刻画が発見されたことで注目された古墳である。10号墳からの斜面がやや緩かになる標高126m付近に構築され、西側壁と奥壁は良好に残るが、東側壁は奥壁に接する5段を除き、埋土上面まで消失する。従って東側壁は大部分が埋土下にあり現状ではその状態の把握は不可能である。前方部では石室の用材と思われるものが散在する状況であるが、墳丘を囲む根巻石状の石組が、126m付近の等高線にそって認められた。尾根の等高線がやや「U字形」に張り出す位置にあり、8号墳とは約14m離れている。

石室の計測値は、長さ3.5m、巾1.1m、高さ1.5mを測り、墳丘は東西7m、南北8mと推定される。この猪の線刻画をもつ本墳については発見後、焼津市により石室全体に覆屋が設けられた。尚、線刻画については「研究所だよりNo.9」に掲載した斎藤所長の論文を付載として再録した。

#### 第10号墳

兎沢古墳群中最も高所に位置し、標高137m付近である。東西の急斜面に挟まれたやや緩やかな尾根上に位置し、やや前に張り出す状況がみられることから古墳の存在を推定した。又、斜面上の地表には石材の露出が認められ、137m付近の等高線にも墳丘による乱れが認められた。他の古墳からみて、傾斜の強い位置にあるため、土砂流出により全体にかなりの変化をきたしていると思われる。墳丘は約7m前後と推定された。



第35図 兎沢古墳群分布図

以上概略を記したが、各古墳の立地をまとめると次の様に要約される。

1. 古墳群中尾根の緩斜面上に立地する 1・2・3・8・9号墳
  2. 東西を急斜面に挟まれ、狭い緩斜面を利用して構築される。4・10号墳
  3. 尾根の南斜面上に構築される。6・7号墳
- 石室の方位は、6・7・8号がほぼ北に集中し、4号墳はやや西、9号墳は最も西にふれており、N—28°—Wを示している。

## 兎沢第4号墳

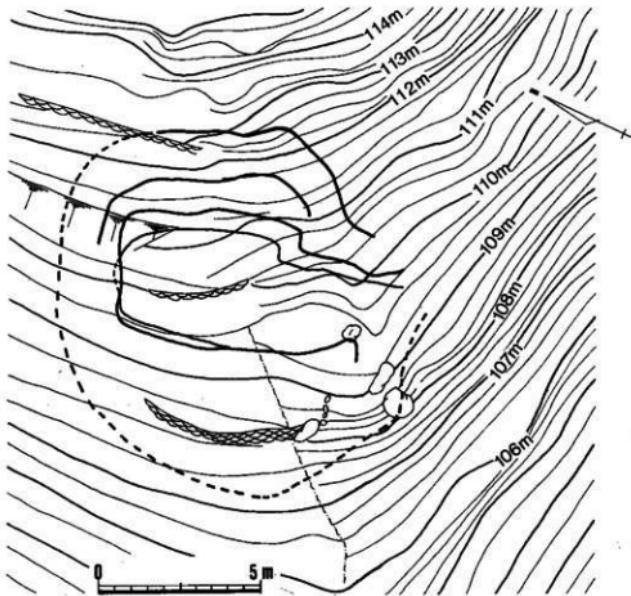
### 墳丘と石室

#### 立地

兎沢古墳群のはば中央部、標高108m～112mに位置し、6号墳付近より尾根の張り出しが弱まる。急斜面から、緩斜面に移行する地形にある。他の古墳の立地と比較すると、この緩斜面は、最も傾斜が強く、かつ、緩斜面の範囲は狭い。従って本古墳は他の緩斜面上に位置するものとは立地のうえでも相違点がみられる。

#### 墳丘

墳丘は、高位部の東側で半円状に地山を掘削し、約15cm程、地山礫混黄褐色土の盛上が認められ、低位部の西側でも30cm程の盛土が2層確認された。又、西側の墳端も、地山の傾斜に凸凹があり、不自然



第36図 兔沢第4号墳地形図

な角度を示す等の点から掘削されているものと判断された。規模は東西10.3m、南北10.8mを測る。全体に土砂の流出が激しく、北、南側では、表土下は地山という状況であった。周溝は、東側で確認されたが、地山掘削の面が周溝の一方の肩となり、一方は僅かに10cm程の立ちあがりとなる程度で、奥壁後方付近と玄門の北付近で消失していた。周溝は、この部分でしか検出されなかつたが、全体の遺存状況からして径約11mの円墳であると判断した。

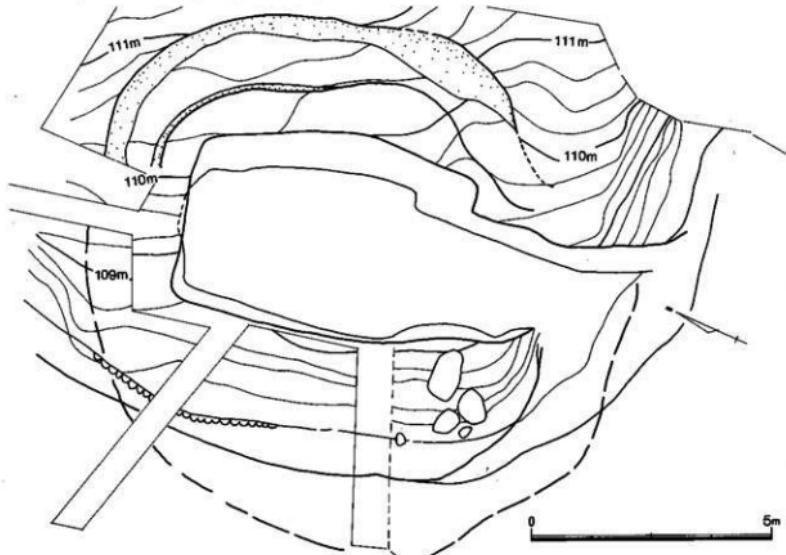
#### 石室

石室は、両袖式の横穴式石室で、全長7.2m、玄室4.1m、奥壁部門は1.3m、最大巾は袖石手前で2.1mを測る。全体に遺存状況は悪く、石室検出の際、側壁の用材及び床石に使われた河原石が散乱する状況であり、床面は河原石が掘方の10~20cm高い位置に凸凹をもって検出され、礫床面を決定するのは困難であった。

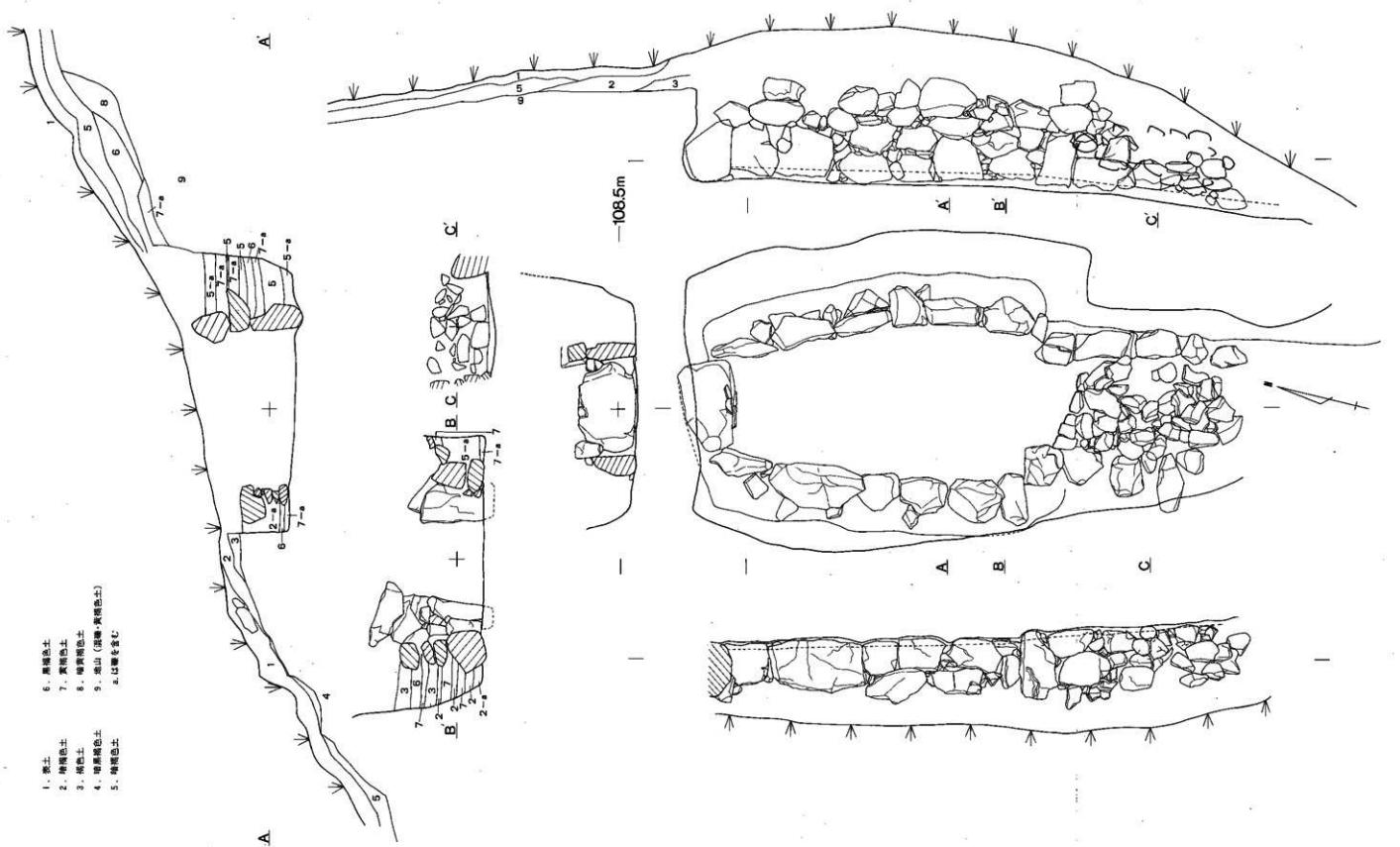
閉塞石は袖石より2.5mにわたって検出され、ほぼ羨道側壁の高さまで残るが、上面は側壁が崩壊して閉塞石上に落ち込んでいた。30~50cmの礫を積み重ね、袖石付近では斜行するが、礫を並べた状態で検出された。尚、地山と、最下部の礫の間は黒色土であり、約20cmの間隔をおいている。

奥壁は1枚、東壁は3~4枚が残り、西壁では根石と、2段目が残るのみである。東壁では、3枚目の石材に比較的小さなものを用い、小口積みで、内側の面が内傾する等から持ち送りが強くなることが認められる。石材は、開口する他の石室と比較しても大型であり、広口面が1.3mに達するものが、西壁根石に認められる。奥壁付近に大きな石材を配し、袖石に向って小型化したものを用いる。東袖石は、角柱状の石材を直立させており、その上に3段小口積みにし、持ち送りを施す羨道部の東側壁は2~3段残して崩壊し、西側壁では4段程残るが、石材の大きさと位置に規則性がなく雑な配置である。玄室内の構造とはかなり相違する。石室は等高線に並行して築造され、主軸はN-2°33'Wである。

調査の結果、この4号墳は予想以上に破壊をうけ僅かに閉塞部を含む羨道部がやや良好な遺存であっ



第37図 児沢第4号墳横断面図



第38図 兎沢第4号墳石室実測図

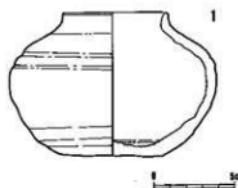
たといえる。西側の埴丘土にも側壁の一部と推定される石材が散乱し、又石室掘下げの廻り多くの石材が検出された。従って、この古墳の規模は、第7号墳に匹敵し、兎沢古墳群中最大のグループに含まれるであろう。石室の構造も両袖式で、胴部が強く張り、他の古墳にはない古い形態を示している。

#### 出土遺物

遺物の出土は須恵器、土師器の小破片が十数点出土したのみであり、床面の搅乱に伴い散逸したものと判断される状態であった。

図示した短頸壺は、西玄門石付近から出土したもので、法量は口径 6.6 cm、器高 9 cm、胴部最大径は中位にあり 12.9 cm を示す。頸部は短く底部から胴下部にかけてヘラ削りを施し、その上位はヘラによるナデ調整がみられる。

色調は灰白色を呈し、焼成は硬質である。7世紀前半から中葉の時期に比定される。



第39図 兎沢4号墳出土遺物実測図

第9表 兎沢第4号墳出土土器觀察表

器種	図版No	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
短頸壺	1	頸部は短く、胴部最大径は、中位にある。球形の胴部をもつ。	胴部中位下からヘラ削り。中位から頸部は横ナデ。	胎土・砂粒を含む。良好 焼成堅 色調灰白色	

## 第V章 まとめ

### 1. 笛吹段古墳群の調査

焼津市の北方、高草山南斜面のほぼ中位に位置する笛吹段古墳群は、約20基の古墳が推定される。そのうち、今回、調査の対象となつた古墳群は10基であった。

全体としては、笛吹段の地名からうかがわれるよう、高草山緩傾斜面を中心とする古墳群である。かつて、昭和35年に増井義己氏によって発掘調査された古墳は、標高330m前後に存在し、別の緩傾斜面に存在するが、今回の調査対象となつた古墳のちょうどその上段に位置する。共通する要素として、いずれも緩傾斜面に位置すること、沖積地からかなりの比高差があることなどである。

調査された古墳は、立地（標高、比高差、微地形など）によって多少の差異をもつていて、小支谷や起伏部および傾斜面の位置関係をみると、これらの古墳は、すべて共通するといいがたい。第17号墳～第25号墳については、急斜面から緩傾斜面に移行するところに、略東西方向に並ぶ。一方、第13号墳については、緩傾斜が終って急斜面に移行する傾斜変換点に位置する。この点では、第13号墳と第17号墳～第25号墳とに大別されよう。

さらに第17号墳～第24号墳についても、第22号墳が小支谷に張り出した区域に存在し、横穴式石室の方位も、わずかに西側にふれており、他の第17～21号墳、第23・24号墳のグループとの差異をみせている。また、第19号墳から第21号墳・第23号墳にかけて背後に高い崖を背おっている。この崖については、後世の開墾の手が加わっているが、当初より、自然地形がこのような変化をとどめたと考えられない以上、古墳の築造によって、何らかの地形改変が行なわれたことの反映とみることが許されよう。調査された古墳をこのような崖と傾斜面に注意して区分すると、つぎのようになる。

上列 第23・第24・第25号墳

下例 第17～第22号墳

つぎに墳丘について考えてみたい。墳丘の規模が判断できる古墳は第18号墳～第23号墳である。いずれも小規模で直径10m以下である。最大の墳丘をもつ第18号墳で8.6m×6.2m、最小の墳丘をもつ第21号墳で5.0m×4.0mを測る。墳丘の形態についても円墳でありながら、隅丸方形に近いものや梢円形を呈している古墳が存在する。全体に共通していることは、石室の規模に比較して墳丘が矮少化し、墳丘の形態が円墳でありながらも、地形にあわせて完全に円形を呈することが少ない点であろう。

前溝については、第17号墳の東側で発見された例があるが、この前溝そのものと関連する古墳は、調査対象区域外に延びていると考えられた。

つぎに内部主体についてふれてみたい。調査された古墳はいずれも横穴式石室であった。

いずれも石室は長方形プランを基本型としているが、つぎの点で大別できる。

#### 1. 玄室、羨道の区別を明瞭とする古墳

第18号墳は玄門石を設置し明瞭な区別をもつ。

#### 2. 玄室、羨道の区別を痕跡程度に残す古墳

第17・第19号墳は側壁の石材において大きさを変え区別している。第20号墳・第22号墳については間仕切り石を置き区別している。

#### 3. 玄室、羨道の区別をもたない古墳

第21・第23・第24号墳

ほかに石室内面を切り石で整備して丁寧な造りの古墳、石室内面の凹凸をそのままとしたやや荒い造りの古墳とにわけることが可能である。先の石室の形態分類とこの石室構築法の違いを重ねあわせて考えると、玄室・羨道の区別のない古墳が、後者の荒い造りの古墳とはば重ねられる。また、荒い造りの古墳は、奥壁内面が、凹凸が認められ、いわゆる鏡石的印象はほど遠い。

このようにみると、第13・21・24号墳は、やや荒い構築法をとり、玄室・羨道の区別をもたないといえよう。

床面はいずれも碌床をもうけているが、擾乱を受けた占墳をのぞくと、奥壁から敷つめる例（第18号墳・第19号墳・第22号墳・第24号墳）と奥塗付近に空間をあけ敷く例（第20号墳・第23号墳）がある。ほかに第17号墳は碌を置いて棺台石をつくっていると推定される。

つぎに築造時期について考えてみたい。すでに第Ⅲ章の出土遺物の項で須恵器坏蓋をあらかじめ分類して記述した。再度、この分類と出土した古墳をみるとこととする。

#### 第Ⅰ類 坏蓋出土占墳

坏蓋は、今回の発掘資料では明確な例は認められなかった。また、第Ⅰ類の坏身は、第23号墳の周溝覆土で発見されているが、上層からの出土であり、直接、第23号墳との関係は無いものと判断された。

#### 第Ⅱ類 坏蓋出土古墳

##### 第20号墳

##### 第Ⅲ類 坏蓋出土古墳

##### 第17号墳・第18号墳・第21号墳・第22号墳・第23号墳・第24号墳

第Ⅰ類について上段の未調査古墳からの流入ではないかと推定され、調査区域周辺の古墳群の上限を現時点で示していると判断されよう。

第Ⅱ類a・bと細分した坏蓋・坏身は、從来より古墳出土資料や古窯跡出土資料によって年代の差異（編年的差異もある）として考えられており、今回の第20号墳における出土状態もこれを裏づけている。すなわち、第Ⅱ類bとしたグループは、第20号墳の最終埋葬に伴なう遺物であり、第Ⅱ類aについては前埋葬に伴なう遺物と判断された。

第Ⅲ類については、a・b・cに細別したが、出土状況に関する限り、一括遺物と考えられる例と副葬品としてほぼ同時期と考えられる例が多く、この古墳群に関する限り、時期差としておさえることにためらわざるをえない。

一方、このような蓋坏類以外の器種の編年的位置はどのように考えられるであろうか。

第17号墳出土の長頸壺、広口壺に関しては、先の別稿で述べたように、<sup>註1</sup>720年代まで出土例が知られており、全体として7世紀末～8世紀第1四半紀としておさえられよう。

第22号墳の提瓶については、環状の把手がつき、胸部の調整がカキ目から叩き目に変化しているなどの特徴から、7世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

以上、副葬品を欠いているので築造時期を判断できない例をのぞくと、調査した古墳の築造時期、追葬の有無やその時期は、おおよそつきのように考えられる。

#### 第Ⅰ期（7世紀前葉～中葉）

##### 第22号墳

##### 第Ⅱ期（7世紀中葉～後葉）

##### 第20号墳

##### 第Ⅲ期（7世紀末～8世紀前葉）

##### 第17号墳、第18号墳、第21号墳、第23号墳、第24号墳

追葬の推定できる古墳

第20号墳（7世紀後葉）

第22号墳（7世紀末～8世紀前葉）

つぎに副葬品の組合せとその年代的推移についてふれてみたい。

7世紀中葉～後葉に築造されたと推定された第20号墳では、直刀一振が、刀装具のはずれた状態で発見された。また、管玉についても原位置を保っていないと判断された。のことにより、最終埋葬の際、前埋葬の遺物をとりかたずけたと推定される。したがって、直刀と管玉については、第20号墳の前埋葬に伴なう副葬品と考えられる。

第22号墳については、提瓶、破損して出土した短頸壺、玉類が、出土状況や編年的位置から最初の埋葬に伴なう副葬品と判断される。以上のように7世紀中葉～後葉と推定される副葬品には直刀、玉類が含まれている。しかしながら、この時期を境として、これらの副葬品はほとんど認められないことが指摘されよう。

以上のような状況が考えられるとすれば、7世紀末～8世紀前葉における古墳における副葬品の意味をそれ以前と明確に峻別する必要があろう。

つぎに、笛吹段古墳群のうち調査された古墳を例に群構成を考えてみたい。

調査された例では、石室の主軸方位の異なる第22号墳のみが、7世紀前葉～中葉に築造されたと考えられた。つぎに7世紀中葉～後葉に築造されたと考えられる第20号墳が出現する。つづいて、第20号墳に追葬が行なわれ7世紀末～8世紀前葉に第17号墳、第18号墳、第21号墳、第23号墳、第24号墳が築造され、その後の追葬は確認できない。この時期が調査された例での古墳群の終末と考えられよう。

こうしたあり方をまとめとして、微地形による古墳の立地、石室の方位、構築方法、副葬品などさまざまな要素をとり上げて調査例の範囲で古墳群における最小単位を抽出してみたい。緩傾斜面や小さな崖の微地形の変化を抽出単位とすれば、つぎのようなグループ化が考えられる。

A 単位群

第13号墳（周辺に2～3基を推定）

B 単位群

第17号墳（周辺に2基を推定）

C 単位群

第18号墳

D 単位群

第19・20・21号墳

E 単位群

第22号墳（周辺に1～2基を推定）

F 単位群

第23号墳

G 単位群

第24号墳（周辺に1～2基を推定）

調査範囲の中では、単独で存在するように考えられたD単位群をのぞく例は、むしろ、調査範囲が限定されたゆえの現象と考えられるが、それでも第18号墳と第23号墳については、単独で成立している可能性も否定できない。

また、第20号墳については、直刀を副葬していることや石室も調査例の中ではもっとも巨大である事から、D単位群中、主座的役割を荷なっていると判断される。また、第19号墳については、築造年代を

第10表 調査古墳一覧表

	墳丘		石室					出土 遺物	備考	
	規 模 (m)	形 状	主軸方位(°)	奥壁床面 レベル(m)	全 長 (m)	奥壁巾 (m)	最大巾 (m)	側壁段 数(段)		
笛吹段 第13号墳	—	不 明	—	250.7	—	90			な し	
笛吹段 第17号墳	—	不 明	N-4° 20' -W	259.64	6.00	0.71	0.82	5~6	須恵器、土師器、 鐵錐 閉塞石有	
笛吹段 第18号墳	8.6×6.2	隅 丸 方 形	N-3° 58' -W	261.5	6.2	0.75	1.10	5~6	須恵器、土師器、 鐵錐 袖石有 天井石2枚	
笛吹段 第19号墳	5.7×5.5	半 円	N-5° 35' -W	261.45	4.3	0.65	1.0	5	土師器 天井石3枚	
笛吹段 第20号墳	6.4×6.5	半 円	N-4° 45' -W	261.3	4.8	0.7	1.4	7	須恵器、土師器、 大刀 閉塞石有、 天井石1枚	
笛吹段 第21号墳	5.0×4.0	隅 丸 方 形	N-2° 10' -E	263.2	2.3	0.8	0.88	7	な し	
笛吹段 第22号墳	6.0×5.0	半 円	N-40° -W	263.28	3.73	0.75	1.05	3	須恵器、鐵錐、 切子玉、管玉、勾玉	
笛吹段 第23号墳	7.7×6.0	半椭円	N-6° 30' -W	265.67	4.80	0.72	1.24	4~5	須恵器	
笛吹段 第24号墳	—	不 明	N-1° -W	264.56	4.10	0.62	1.93	6~7	須恵器	
笛吹段 第25号墳	—	不 明	—	273.29	—	68	—	—	な し	
兎沢 第4号墳	11×10	東 半 円	N-2° 33' -W	108.38	7.2	1.1	2.0	2~3	須恵器	閉塞石有

知る手がかりはないが、石室の形態から、第20号墳より後出する可能性が高い。このように考えられると言えば、D単位群は、当初、主座的役割を荷なった第20号墳が成立し、さらに追葬が行なわれ、それより以降、あるいは追葬期にはば併行する時期に第19号墳が築造された可能性があることになろう。さらに、7世紀末～8世紀前葉に小規模な第21号墳が築造され、D単位群の機能は終了したと推定される。

その後、この現象は、7世紀末～8世紀前葉に、第17号墳、第18号墳、第21号墳、第23号墳、第24号墳が出現することと、どのような関係があるのであろうか。今後、十分、検討されなければならない重要な課題であろう。

## 2. 兎沢第4号墳の調査

兎沢第4号墳は、攪乱を受けているため、築造当初の様相はとどめていなかった。それにしても、残存した石室のスケールは、全長7.2m、奥壁巾1.1m、最大巾2.0mとこの地域においては、最大級の石室であった。しかしながら、推定される墳丘は直径11mを測る一般的には小規模といえる墳丘で石室の規模に反比例する。また、わずかに残された副葬品のうち、須恵器短筒埴は、7世紀前半～中頃の所産と考えられ、古墳築造年代の一端を知りえた。

したがって、第4号墳は調査当初の予想に反して、大型の石室をもち、立地の点からもこの兎沢古墳群の主座的位置をしめるであろうと推定される。おそらく、石室の規模からすれば笛吹段古墳群がこの地域における律令制直前の様相を伝えていることに比べ、兎沢第4号墳は古墳時代後期の様相を伝えていると判断されよう。おそらく、この違いは単に被葬者の問題にとどまらず、地域史や当該期の社会構成上の問題におよばざるをえないが、今後の課題として、一まず、筆をおこう。

### 註

- 足立順司「笛吹段古墳群出土の須恵器」『調査研究所だよりNo.14』1983年。

## 付載 兎沢古墳群9号墳の壁画の発見について

所長 斎藤 忠

### I

本研究所が、静岡県島田土地改良事務所の委託によって調査している焼津市笛吹段古墳群及び兎沢古墳群については、既に、本誌5号～8号に紹介されてきた如くである。兎沢古墳群は、10基より成っており、今回調査したものは、この中の4号墳であったが、これらの古墳群を巡査している間に、はからずも9号墳の石室に壁画のあることを確認した。この確認は、私が10月21日に、副所長長田実氏等とともに、現地を訪れたとき、なされたものであった。

私は壁画の題材の重要性にかんがみ、10月30日香川県出張の途次、再び現地に行き、調査部長植松章八、所員佐藤達雄、佐野五十三、足立順司、及川司の諸氏とともに、拓本を作製し、写真を撮影するなどの操作を行いつつ、つぶさに壁画を観察したのであった。

### II

この9号墳は、10号墳とともに、山稜近くの高い位置に立地し、ほぼ南面する横穴式石室であるが、墳丘の大きさは $15.7 \times 13\text{m}$ ほどに観察される小円墳といえる。石室も、玄室のみの一部が残されているだけで、天井石は失われている。奥壁は、二枚とも完存し、玄武岩の石材を利用している。上石と下石との間際には小さい割石が充填されている。側壁は、奥壁に向って右側壁において奥壁に接する部分だけ数段の石塊が積まれた形状がうかがわれる。左側壁は、全面的に比較的よく残されており、ほぼ5段に細長い割石を横に長く積んでいることがわかる。両側壁とも、やや内傾斜し、ことに右側壁は、倒壊の危険も感ぜられるほどである。床面にはかなり土砂がおおわれて、その構造は明らかでない。玄室の長さ $3.50\text{m}$ 、幅 $1.20\text{m}$ 、高さは奥壁の残存石材から考えると、約 $1.70\text{m}$ に推定される。

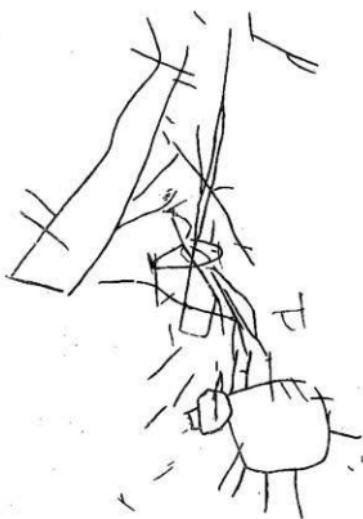
壁画は、奥壁の下段の石材に線刻されている。この石材は、1辺 $1.10\text{m}$ 四方のほぼ方形をなすもので、若干剥落の面もあるが、平らかな面をなす。剥落も亦、当初からのものとみとめられる。絵画は、その主題を剥落面をさせて、平らかな面を利用して、横 $45\text{cm}$ 、高さ $60\text{cm}$ の範囲内に、巧妙な斜め配置を見せている。すなわち、床面から約 $20\text{cm}$ ぐらい上位の、平らかな面には、猪像を彫刻しており、その尻部の一端は、剥落面にも及んでいる。その斜め上には、飛翔する鳥、その上の横に二本の樹木が見られる。線刻の技法は、鋭利な筆状のものでなされた如く、鋭く刃痕がはいっている。

### III

猪の図は、2本の前肢を前斜めにのばし、体は太く、尾も耳も見られる。猪の特色としての鼻の先端は、厚板をとりつけたような状態であらわされている。背上の2、3本の斜線は豪毛だろうか。猪の動物学上の外形の特色は、体形はずんぐりし、頭部が短かく、四肢も短かく、かつ鼻の先が円盤状になっているといわれているが、その絵は、その外形的な特色を見事にとらえている。鼻端から尾部までの全長 $23\text{cm}$ 、丈は尾をふくめて約 $13\text{cm}$ ぐらいと測られる。

飛翔する状態をあらわした鳥の図は、羽翼を左右に張りのばし、尾羽はながく、なだらかにあらわし、その線の先端は、ことさらに細く尖らしている。全長 $20\text{cm}$ 、羽翼の幅 $14\text{cm}$ である。山鳥か雉のようなものをあらわしたかも知れない。木は、向って左のものは太く、右のものは、中央の幹が中ぶとりしている。上に枝も見られる。高さ約 $40\text{cm}$ ぐらいである。

なお、猪像は、床面から約 $20\text{cm}$ ぐらいの高さの位置に彫刻されていることも、一つの特色である。この奥壁の下端で筆を使って彫刻する場合、腹ばいになるなり、かなり身体を前屈みにしなければ不可能



第40図 兎沢第9号墳壁画

（『南方熊楠全集』一所収）を見ると、猪は好んでまむしや蛇を食する動物であり、それから発展して、これらを退ける靈力あるものとされていることが述べられている。それで地方によっては、子供が家をでるとき、しきいをまたがぬ中に、「まだらむしや、わがゆくさきへ、あたならば、山たち姫に知らせ申さん」と三遍となれば、蛇にあわぬという俗信のあることも紹介している。「まだらむし」は蛇であり、「山たち姫」は猪という。もし猪に、辟邪的な意味が、古代にもあったとすれば、この絵を、恐らく死者の枕辺のそばであったろう奥壁下端に画かれた意味も了解される如くである。

鳥が、靈魂を運ぶという思想が、古代人の間にあったことは、折口信夫博士の多くの論稿の中にも記されているものであるが、空中を軽快にかつ迅速に飛んでいる状態をからわす、この壁画の鳥も亦、このような古代人の精神生活の一端を示したものと考えられないだろうか。

V

日本の装飾古墳といわれるものには、石棺、横穴式石室、横穴などの各種のものの図文を包括しており、その図文にも、色彩のもの、彫刻のもの、彫刻に色彩をほどこしたものなど各種がある。この中で、横穴式石室の線刻画で、図文の鮮明なものは比較的少い。しかも、動物画としては、馬、鹿、犬などがあるが、猪として明確なものは、これまで発見されていない。本古墳のように、堅硬な石材の面に、鮮明に自由的に彫刻し、しかも、積築以前に既に彫刻したとみなされる例の検出されたことは、飛翔する鳥の図と共に貴重である。

この発見の報を、焼津市当局にもたらしたとき、市教育委員会においては、地主大石裕氏の好意にもとづき、応急な保存対策を構じた。県教育委員会文化課と市当局と地主大石氏の文化財保存に対する適切な措置に感謝するとともに、本古墳が、貴重な文化遺産として、永く保存され活用されることを希望したい。

であり、むしろ、石材にあらかじめ彫刻し、のちに奥壁に据えたと考える方が自然であろう。

IV

さて、猪の明確な図は、日本壁画古墳の画題としては「新種」である。飛翔する鳥をあらわしたものは、若干あるが、本図のように、尾翼をのばし、いかにも軽やかに、かつ速やかに空中を舞いとぶような図柄は、他に見られない。

一体この古墳の被葬者、或いはその関係者は、どういう意図で、これらの絵を、奥壁に彫刻したものであろうか。

猪の場合、四つの考えがある。その一つは、単に自然風物を画いたとする考え方、その二つは、被葬者が何等かのかかわり合いをもったとする考え方、例えば、家猪として飼育していた猪をあらわしたことなど、その三は、猪を供献したとする考え方、その四は、猪に辟邪的な意味があったとする考え方である。もし、私見を述べるならば、その四を適切とした。猪は、民俗学的な立場から見ると、まむしや蛇などをしりぞける呪性をもつとされている。

たとえば、南方熊楠氏の「猪に関する民俗と伝説」

（静岡埋蔵文化財調査研究所だよりNo.9より転載）



第41図 児沢第9号墳壁画拓影

# 図 版

図版 1



1. 笛吹段古墳群 遠景（航空写真）



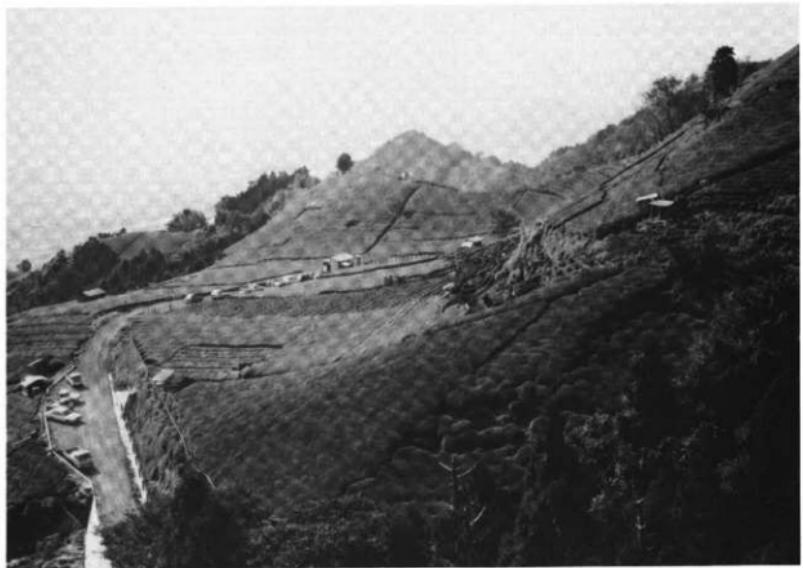
2. 笛吹段古墳群 遠景（東より航空写真）



1. 笛吹段古墳群 遠景 (西より航空写真)



2. 笛吹段古墳群 遠景 (南より)



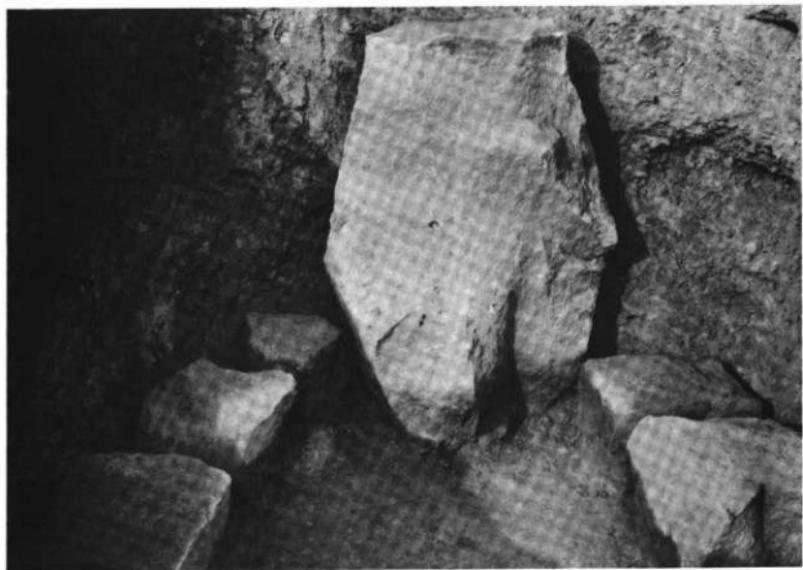
1. 笛吹段古墳群 近景（東より）



2. 笛吹段古墳群 近景（西より）



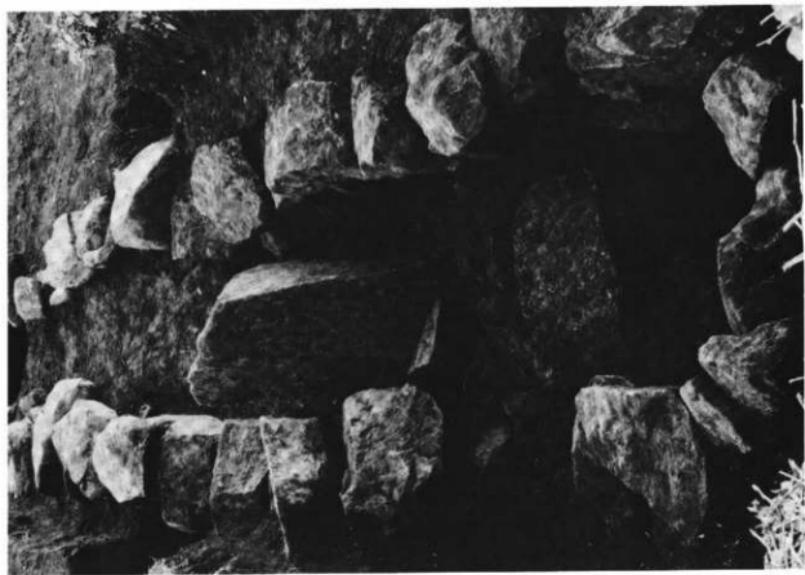
1. 笛吹段第13号墳 石室



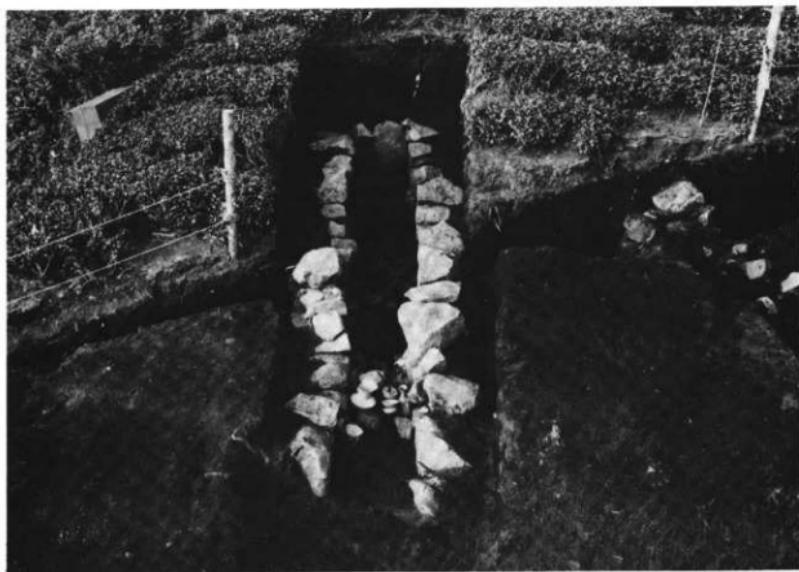
2. 笛吹段第13号墳 石室根石の状況



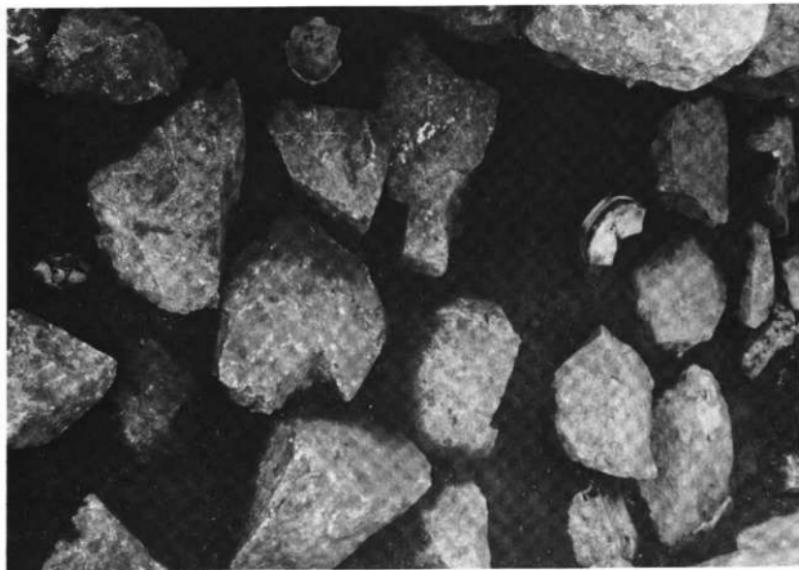
1. 笛吹段第17号墳 地形



2. 笛吹段第17号墳 天井石棟出状況（奥壁より）



1. 箕吹段第17号墳 石室



2. 箕吹段第17号墳 床面遺物出土状況



1. 笛吹段第17号墳 閉塞部遺物出土状況（前方より）



2. 笛吹段第17号墳 閉塞部遺物出土状況（石室内より）



1. 笛吹段第17号墳 虞壁



2. 笛吹段第17号墳 石室模石の状況



1. 苗吹段第18号墳 地形



2. 苗吹段第18号墳 全景



1. 笛吹段第18号墳 天井石の状況（後方より）



2. 笛吹段第18号墳 天井石の状況（西より）



1. 笛吹段第18号墳 奥壁付近の石室



2. 笛吹段第18号墳 左袖石部付近の状況



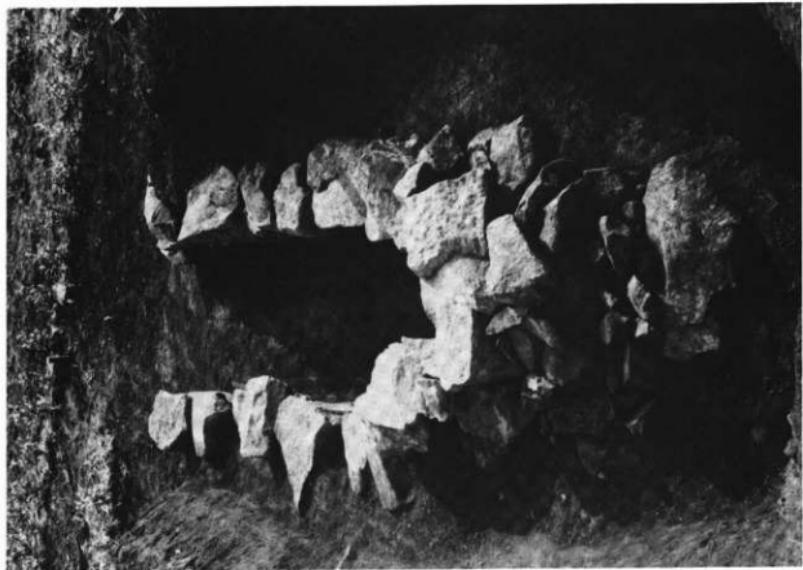
1. 箕吹段第18号墳 石室内遺物出土状況



2. 箕吹段第18号墳 石室根石及び全景



1. 笛吹段第19号墳 石室全景



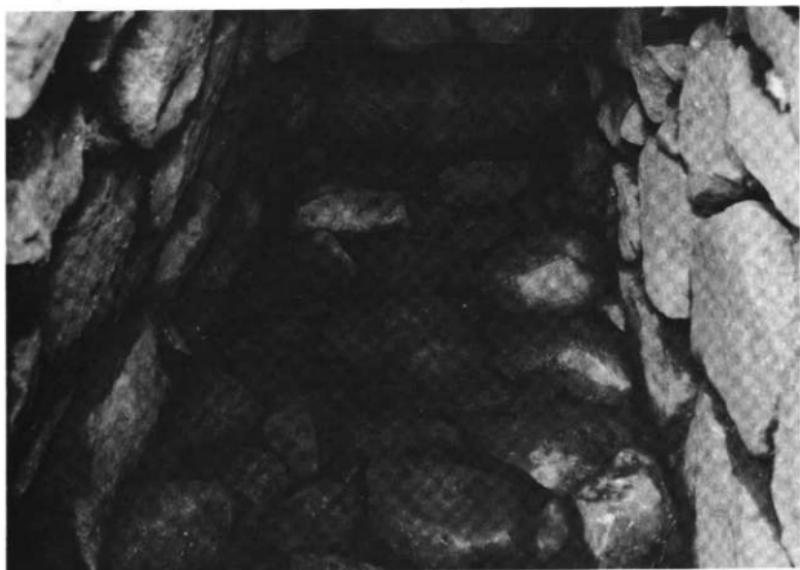
2. 笛吹段第19号墳 天井石の状況（後方より）



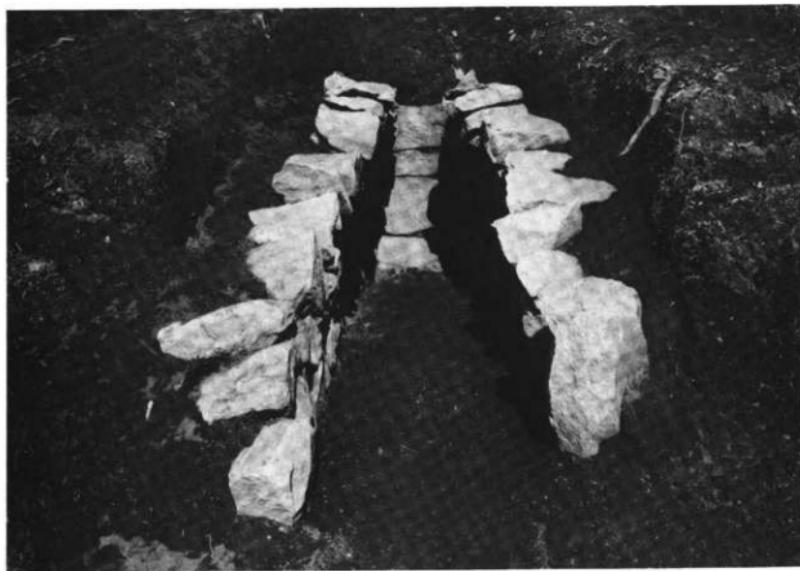
1. 笛吹段第19号墳 天井石の状況（東より）



2. 笛吹段第19号墳 天井石の状況



1. 笛吹段第19号墳 奥壁付近床石の状況



2. 笛吹段第19号墳 石室天井石除去後の状況



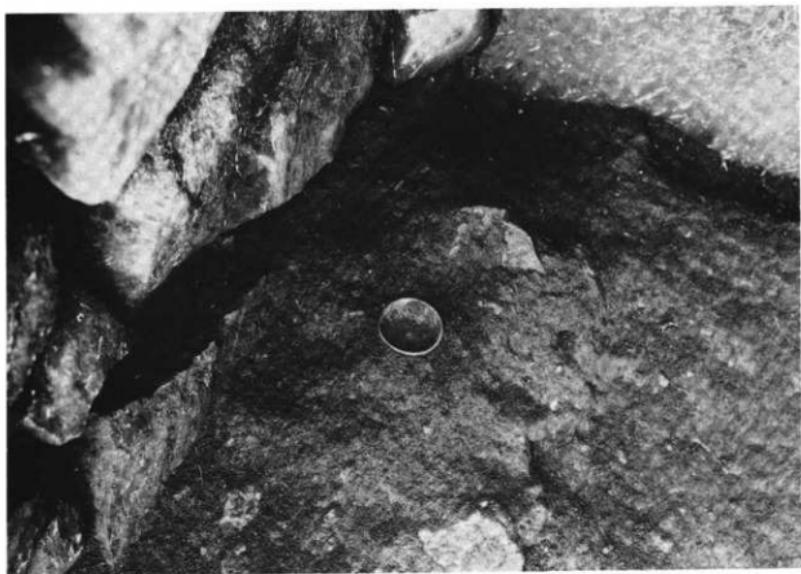
1. 苗吹段第19号墳 石室根石及び全景



2. 苗吹段第19号墳 掘り方全景



1. 笛吹段第20号墳 天井石検出状況（後方より）



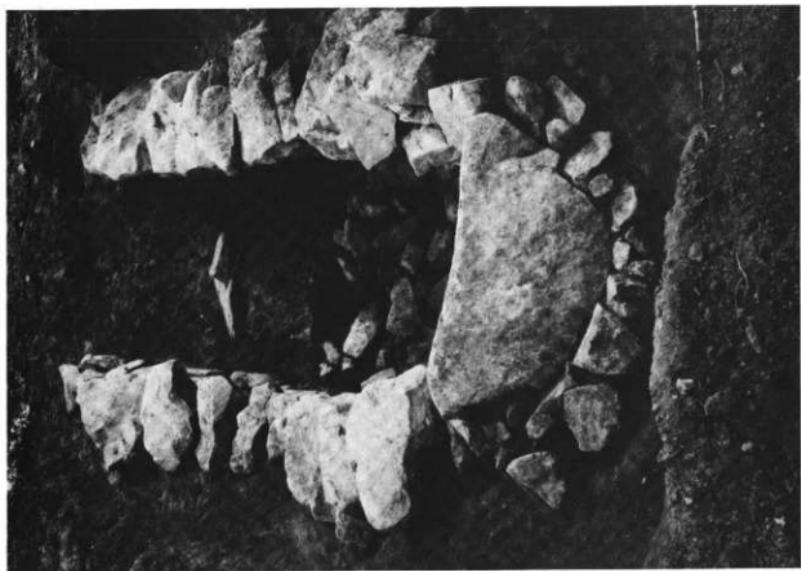
2. 笛吹段第20号墳 石室内覆土中小皿出土状況



1. 笛吹段第20号墳 全景（前方より）



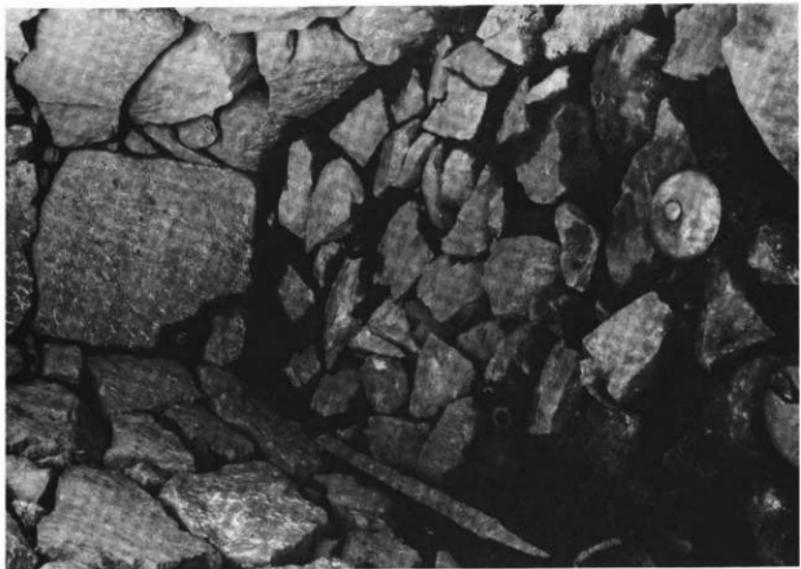
2. 笛吹段第20号墳 全景（後方より）



1. 笛吹段第20号墳 天井石の状況



2. 笛吹段第20号墳 石室内の状況



1. 箕吹段第20号墳 奥壁床面付近



2. 箕吹段第20号墳 太刀出土状況



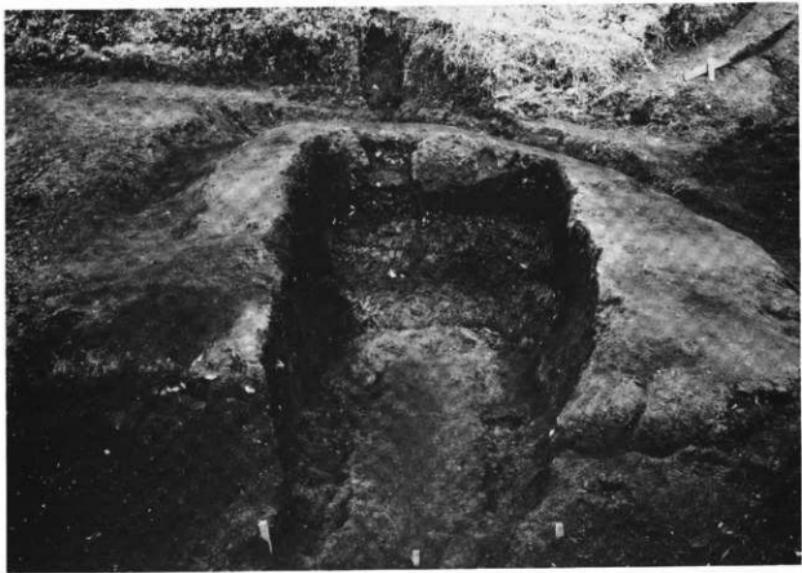
1. 苗吹段第20号墳 遺物出土状況



2. 苗吹段第20号墳 床石の状況



1. 箕吹段第20号墳 天井石除去後の奥壁



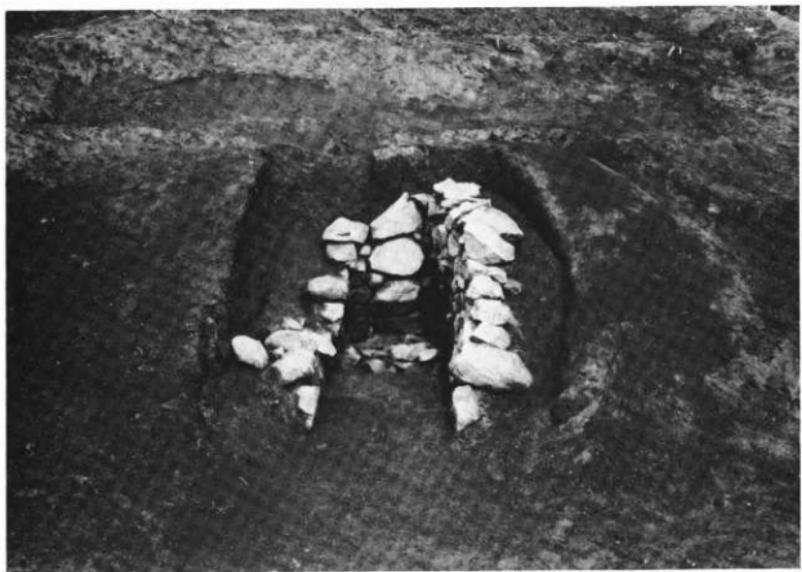
2. 箕吹段第20号墳 掘り方及び全景



1. 苗吹段第21・22・23号墳 周辺の地形（南より）



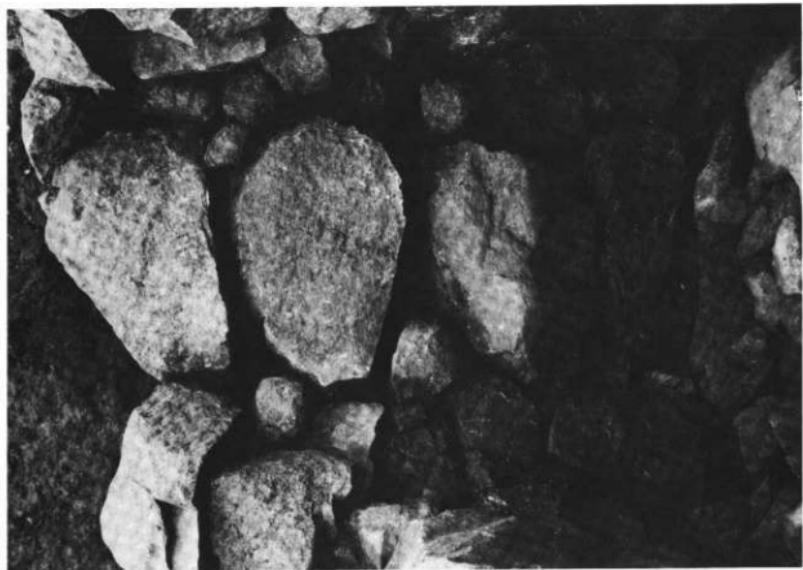
2. 苗吹段第21号墳 天井石の状況



1. 笛吹段第21号墳 全景（前方より）



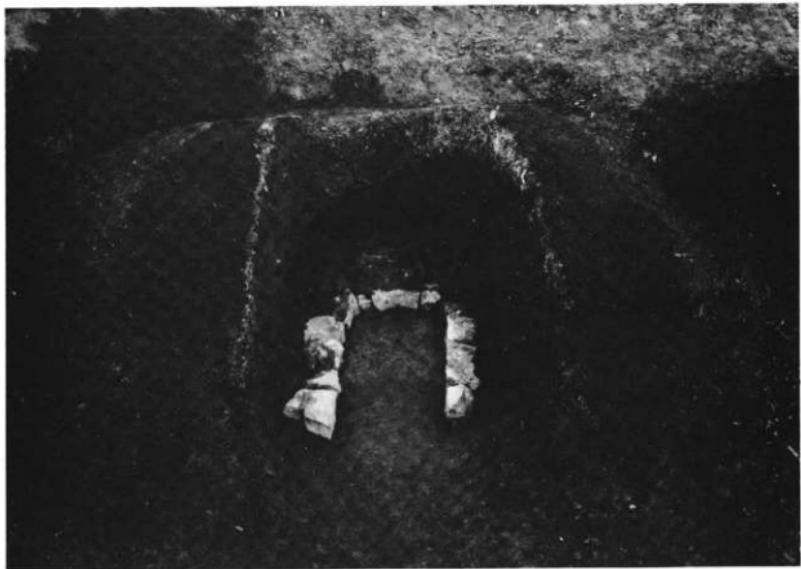
2. 笛吹段第21号墳 全景（後方より）



1. 笛吹段第21号墳 奥壁



2. 笛吹段第21号墳 東側壁



1. 箕吹段第21号墳 石室根石及び全景



2. 箕吹段第21号墳 石室振り方全景



1. 笛吹段第22号墳 石室全景（前方より）



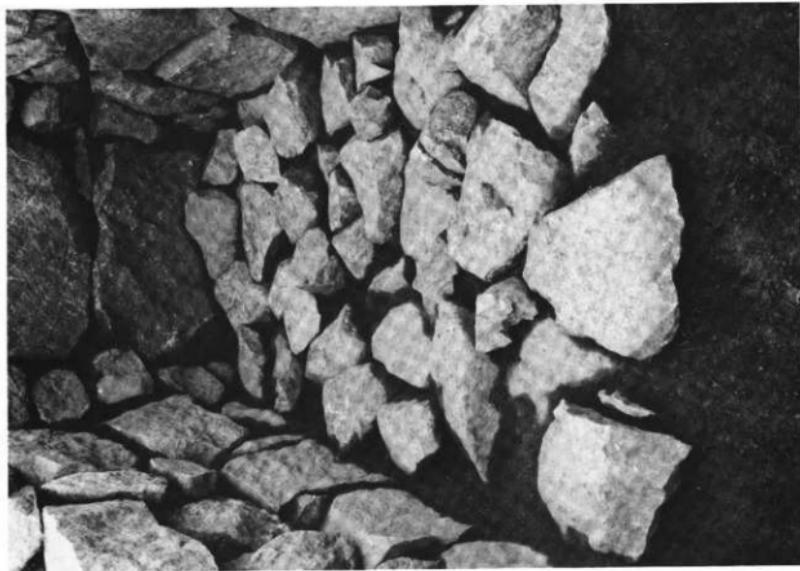
2. 笛吹段第22号墳 石室全景（後方より）



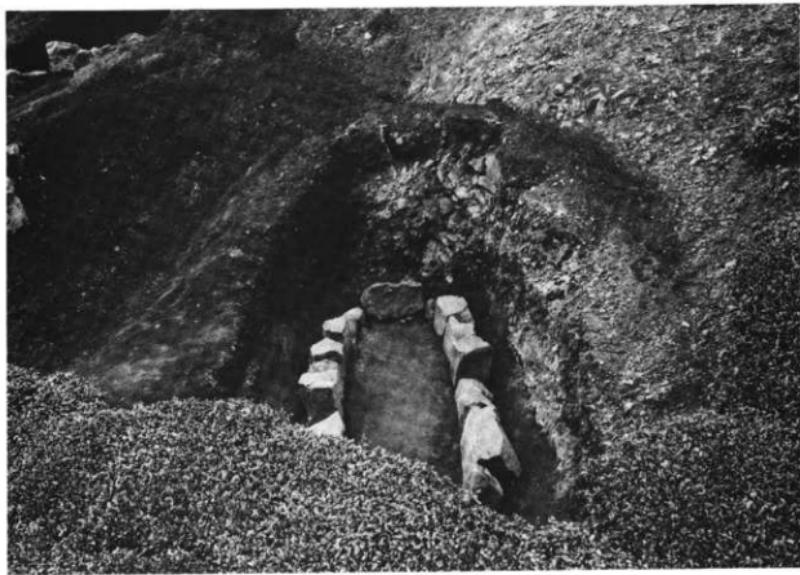
1. 笛吹段第22号墳 遺物出土状況（東側壁部）



2. 笛吹段第22号墳 遺物出土状況（西側壁部）



1. 苗吹段第22号墳 床面の状況



2. 苗吹段第22号墳 石室根石及び全景



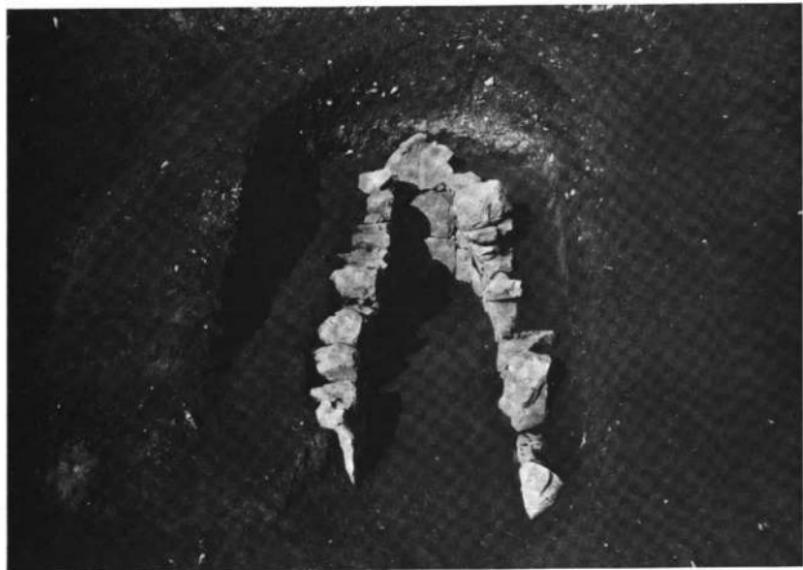
1. 笛吹段第23号墳 床面検出の状況



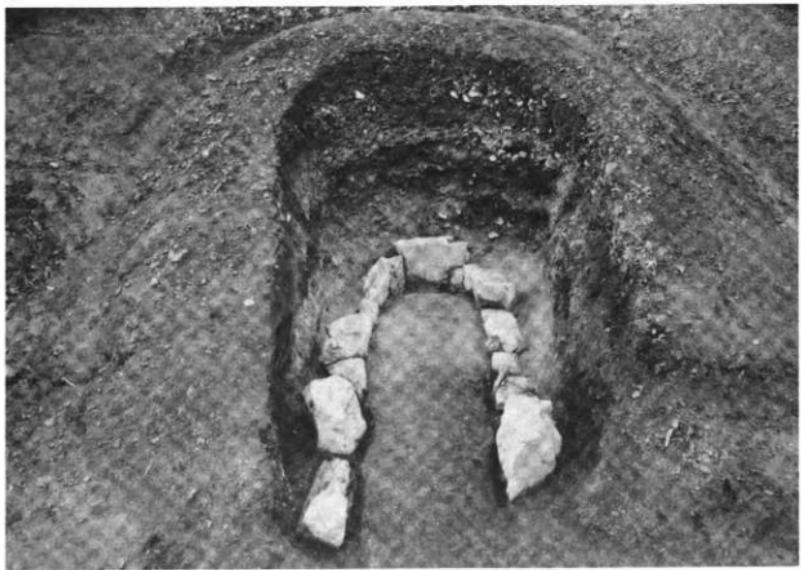
2. 笛吹段第23号墳 壁面



1. 箕次段第23号墳 石室床面遺物出土状況



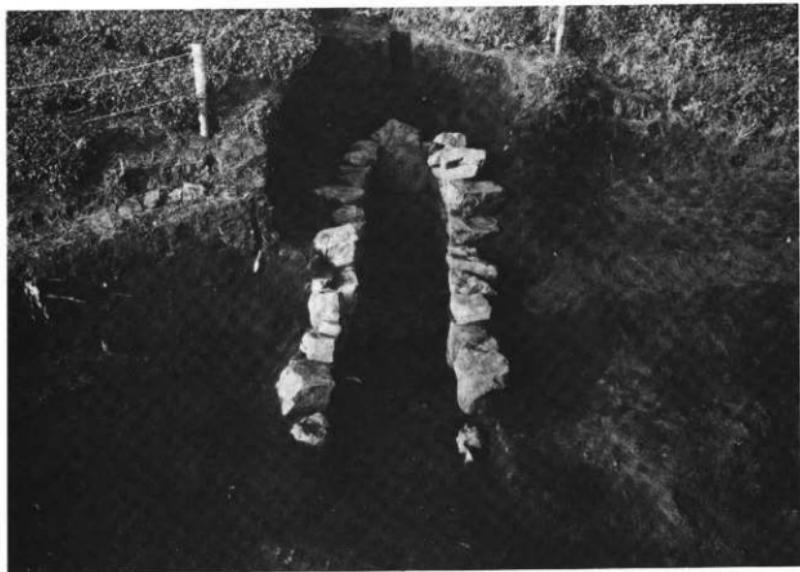
2. 箕次段第23号墳 石室全景



1. 苗吹段第23号墳 石室根石及び全景



2. 苗吹段第23号墳 墓丘の築造状況



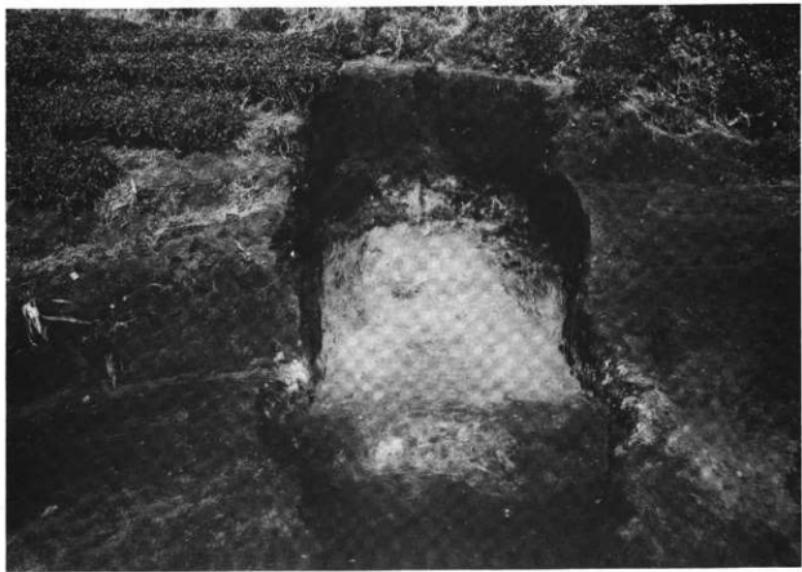
1. 苗吹段第24号墳 石室全景



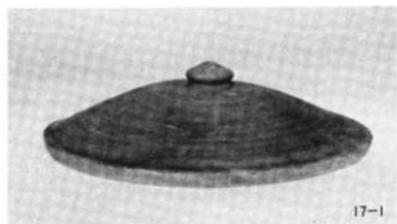
2. 苗吹段第24号墳 遺物出土状況



1. 笛吹段第24号墳 石室根石



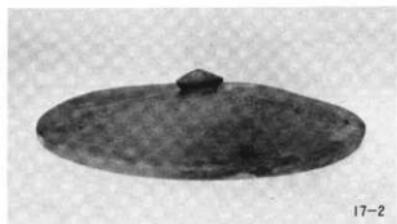
2. 笛吹段第24号墳 振り方



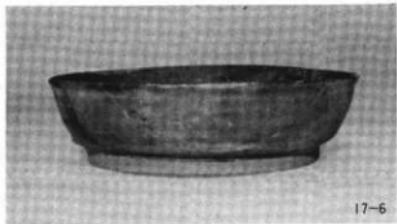
17-1



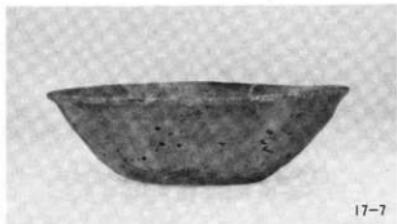
17-5



17-2



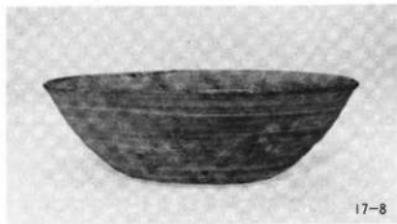
17-6



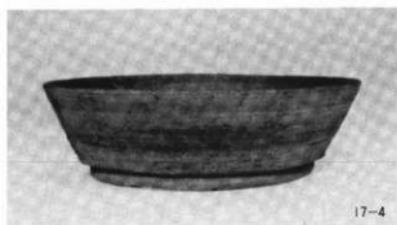
17-7



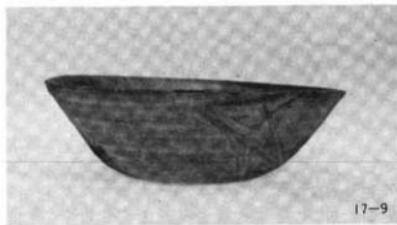
17-3



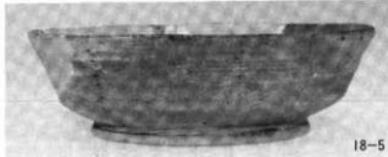
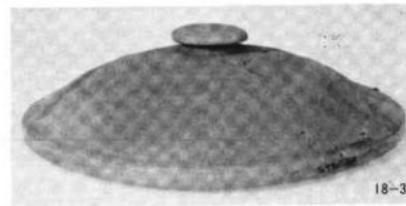
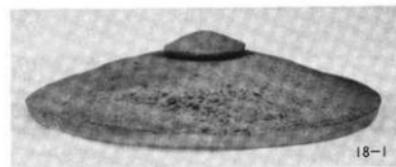
17-8



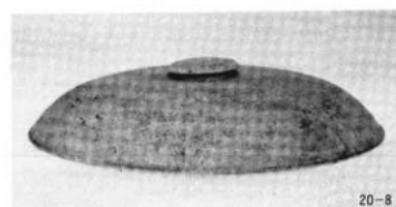
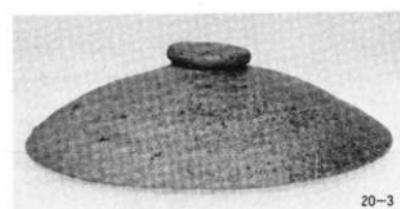
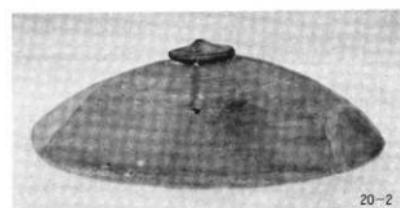
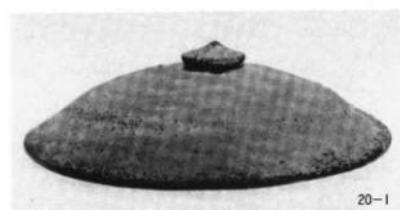
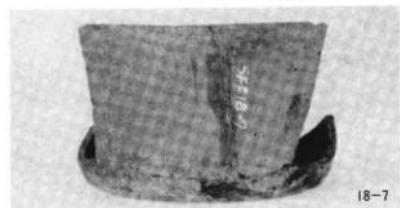
17-4



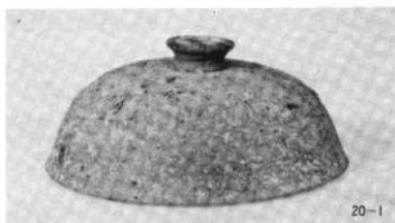
17-9



苗吹段第17・18号墳 土器



笛吹段第18・20号填 土器



20-1



20-6



20-2



20-7



20-3



20-8



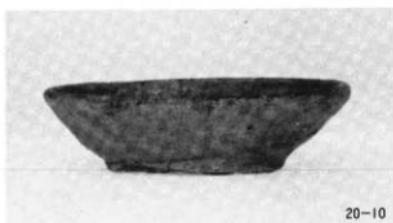
20-4



20-9



20-5



20-10



20-16



22-11



21-4

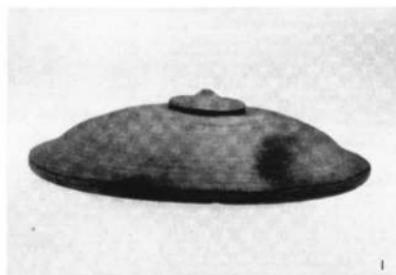


22-12



22-12

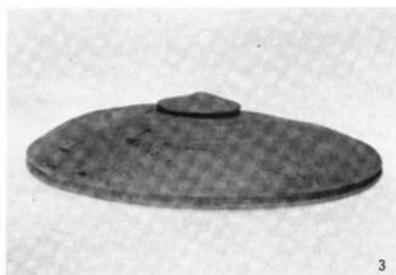
笛吹段第20~22号填 土器



1



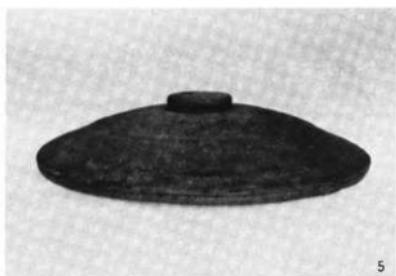
7



3



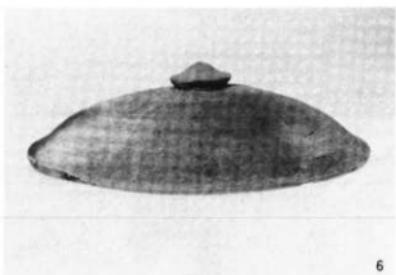
8



5



9

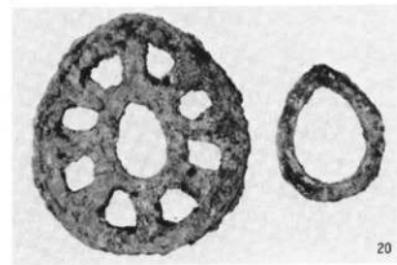
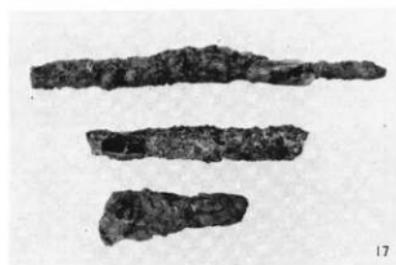
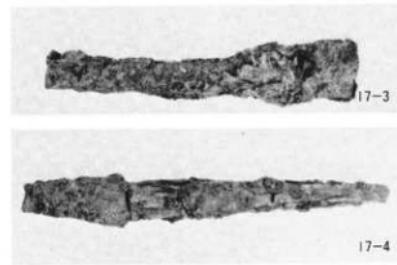
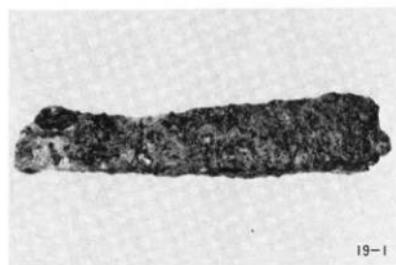
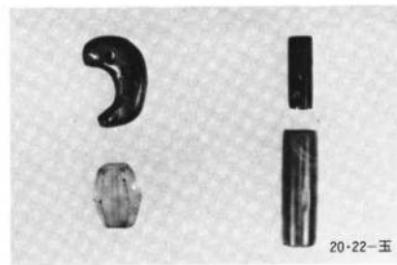
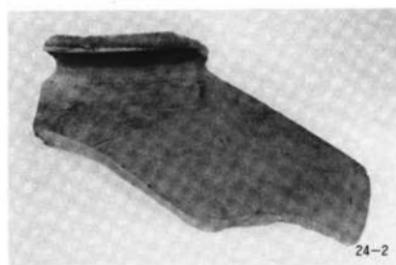
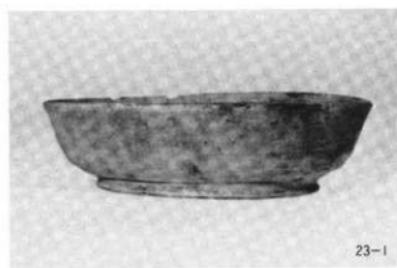
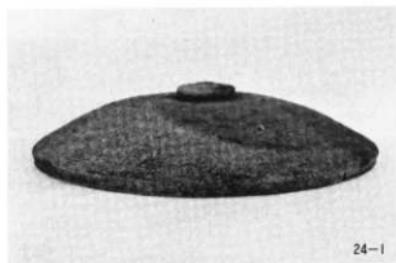


6

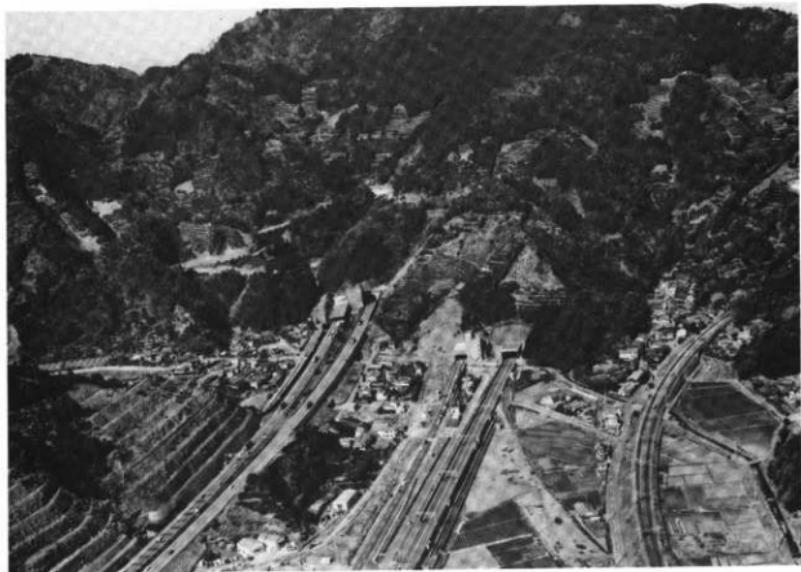


10

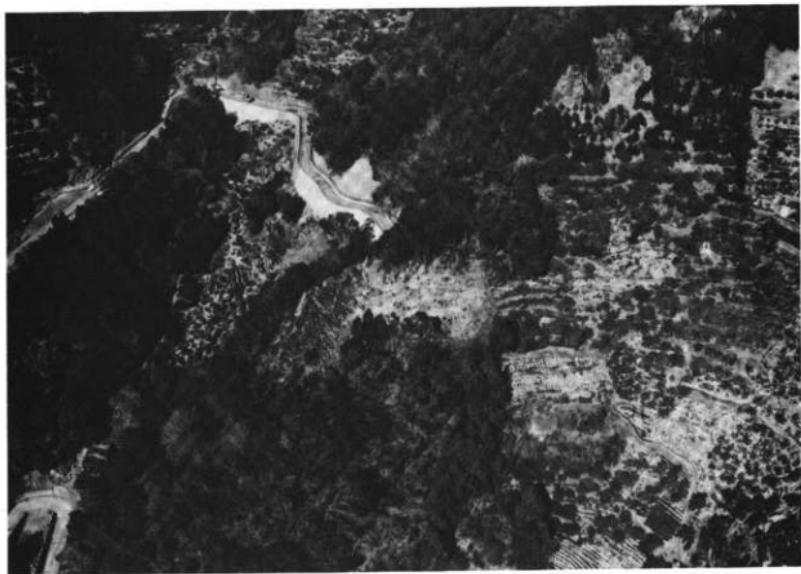
笛吹段第22号墳 土器



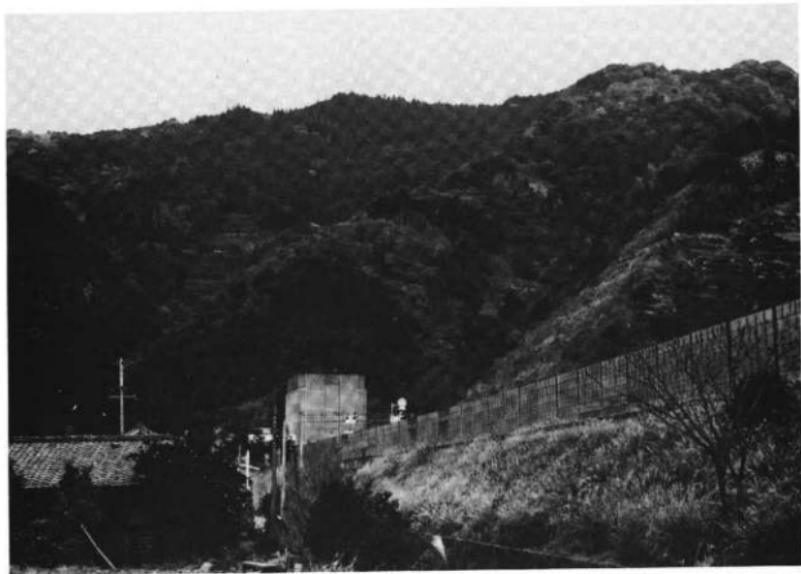
笛吹段第17～24号墳 土器・その他の遺物



1. 兎沢古墳群 遠景（航空写真）



2. 兎沢古墳群 近景（航空写真）



1. 兎沢古墳群 遠景（西より）



2. 兎沢古墳群 遠景（南より）



1. 鬼沢第4号墳 墓丘（北より）



2. 鬼沢第4号墳 墓丘（南より）



1. 児沢第4号墳 東側周溝の土層



2. 児沢第4号墳 地山掘削面



1. 兎沢第4号墳 閉塞施設



2. 兎沢第4号墳 石室全景



1. 鬼沢第4号墳 石室



2. 鬼沢第4号墳 石室



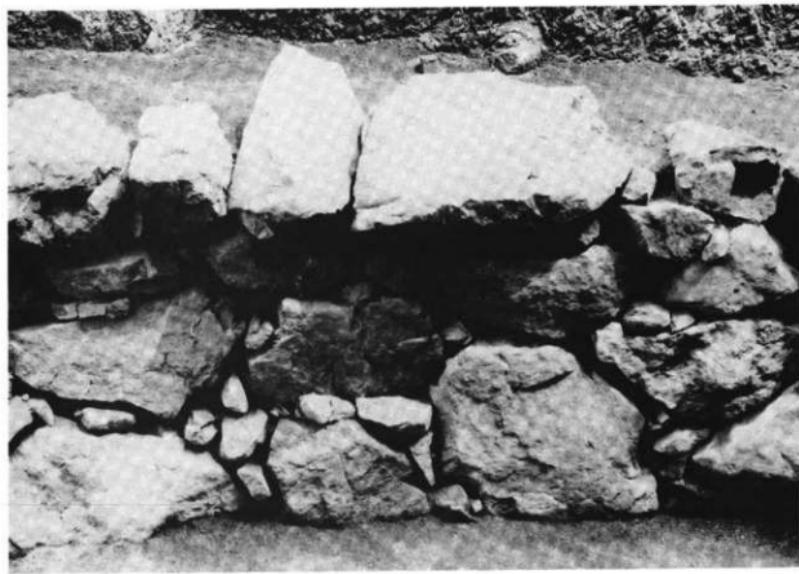
1. 児沢第4号墳 奥壁



2. 児沢第4号墳 玄室内西側壁



1. 児沢第4号墳 玄道部西側壁



2. 児沢第4号墳 玄室内東側壁



1. 児沢第4号墳 東玄門



2. 児沢第4号墳 石室横石及び全景

笛吹段・兎沢古墳群

昭和58年度県営畠給高草地区埋蔵文化財  
発掘調査報告書

昭和59年3月24日

編集発行 財団法人 県府博物館付属  
静岡埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三 創  
静岡市豊田3丁目5-30  
TEL (0542) 82-4031